

ものがたり観光

Narrative
Tourism

ものがたり観光行動学会誌 第2号



ものがたり観光

Narrative
Tourism

ものがたり観光行動学会誌 第2号

ものがたり観光行動学会

Association for the Study and Practice of Narrative Tourism

創刊にあたって 白幡洋三郎	3
■ 講演	
科学する観光学／本保 芳明	4
Tourism Studies Practiced as a Science / HONPO Yoshiaki	
■ 研究論文	
ウィーンの「ものがたり風」観光魅力 [前編]／高田 公理	21
Alluring Vienna: In the Mode of a Travel Narrative (Part 1) / TAKADA Masatoshi Yasutaka	
ウィーンの「ものがたり風」観光魅力 [後編]／高田 公理	35
Alluring Vienna: In the Mode of a Travel Narrative (Part 2) / TAKADA Masatoshi Yasutaka	
旅する学びで考えたこと／李 有師	52
Reflections on "Travel-Learning"	
黎明期の遊覧バス旅行における「ものがたり」の生成 —— 宮崎・観光バスガイドテキスト『遊覧説明』（岩切章太郎, 1932年）の分析／長谷川 司	66
The Formation of "Narrative" at the Dawn of Sightseeing Bus Trips: An Analysis of <i>Yuransetsumei</i> (Local Description) Texts (1932) by Iwakiri Shōtarō for Tour Bus Guides in Miyazaki Prefecture / HASEGAWA Tsukasa	
■ 研究ノート	
聖書の世界を旅することの意味 —— 自然を取り巻く人々の物語を探して ——／古畑 正富	79
Travelling the Biblical World: A Search for the Tale of the Human Environs of Nature / KOBATA Masatomi	
観光資源としての万葉歌碑 —— 新潟県佐渡市の場合 ——／市瀬 雅之	89
Manyō Poem Epitaphs as Tourism Resources: An Example from Sado City, Niigata / ICHINOSE Masayuki	
■ エッセイ	
美味しいロンドン／熊谷 真菜	100
編集規程および執筆要領について 概要	103

創刊にあたって

本学会論文誌創刊の意図は「観光」を論じた読み物をつくることである。

「観光」は地域や学問領域を越えたたのしみであり、学ぶよろこびである。共通のたのしみやよろこびを「読み物」として会員に伝えるために印刷物として配布することは学会に求められている任務だと考えた。

学会員共通の関心をかき立て、共通の課題に応える「読み物」をつくりたい。そして「読み物」であるから研究者以外の一般の人々にも知ってもらい、読んでもらいたい。学会にふさわしい学問的な内容を備え、学術論文の体裁をもった堅めの読み物も、事例報告やエッセーなど柔らかめの読み物も収めたい。書きたい人の熱い思いを受けとめる場も必要だ。こうしてこのような学会誌が誕生した。

投稿する人も手にとって読む人も共通の関心は「読み物」である。すなわち書き手には、人に読ませようとする配慮、読んでほしいという情熱、が求められる。一方、読み手には読み物として妥当かどうか、わかってもらおうとの努力、気配りがあるかどうか、の吟味をお願いしたい。書き手と読み手の双方が求めるものの中に本誌の輝きは生まれるだろう。

『ものがたり観光行動学会』には、呼びかけに応じて、物語が好き、歴史が好き、人が好き、遊びが好き、そんな人々が集まってきた。そしてメンバーが納得できる舞台づくり、環境づくりに取り組んできた。

若い世代には、何か文章を書いて投稿できる媒体が欲しいという声強い。ここに誕生したのは、まとまった考えを発表したい、聞いて欲しい、読んでほしい、意見をたたかわせたいという思いを持つ人に提供される新たな場所である。

ものがたり観光行動学会 会長 白幡洋三郎

科学する観光学

本保芳明*

Tourism Studies Practiced as a Science

HONPO Yoshiaki

1. 観光を科学で捉える

観光立国を本気で推進していくためには、行政や企業などのステークホルダーが戦略的・合理的な行動をしていかなければ物事は実現していかないと思います。それも、バラバラに戦略的・合理的であっても意味がなく、共通の言語や理念がなければ動いていかないのではないのでしょうか。共通の言語や理念を持つということはある意味では科学ということであろうと思いますので、そのような意味で観光には科学的な応用が必要だと考えています。それと同時に、企業なり行政なりが適切な戦略・戦術を駆使していくためには、あるいはそのことを支えていくためには、学の世界の科学的なサポートが重要になります。

戦略的・戦術的行動が必要だということを申し上げましたが、そのようなことを言うときには、そうっていないと言っているのと同じことです。実際、日本の観光に携わっておられる方々、行政から始まって企業や関係する役所や団体の方々を含めて正直なところ底が浅いと思っています。長い歴史を持ち、産業的にも大きな活動をしてはいますが、国を挙げて観光を国の大きな礎にしていくための、きちっとした仕組みができていないと思います。特に私が担当してきました行政や日本の企業を見ますと、非常に弱いところが目立ちます。日本の産業界の観光における歴史は長く、学における歴史も長いと言えますが、行政が真剣に観光行政に取り組むようになったのは2000年代になってからです。組織にもそれが現れていて、ノウハウの蓄積もできておらず、人的な面での準備も整っていないと思います。

そのような状況の中で、観光庁は組織体の規模としても予算の規模としても図抜けて大きいですから、最大の力を持たなければいけないし、私自身は現状では最大級のシンクタンクであると思っています。また、それだけの情報収集能力と分析能力を持っていると思

*首都大学東京（観光庁初代長官）

います。しかし、自分がいた経験からしますと、まだまだだというところが沢山あります。観光庁ですらこのような現状ですから、自治体などにつきましては、足りないところが多くあると思います。

一方、企業の世界に目を転じますと、国際的な規模のたいへん大きな企業もありますし、大きな成果を上げているところもありますが、国際競争という面では、必ずしも強いとは言えません。旅行業界最大手のJTBさんですら、今頃になってという表現をあえて使わせていただきますが、必死になって国際化をしようとしておられる段階です。どういう意味かと思われるかもしれませんが、国際関係の業務はたくさん扱ってはおられますが、ほとんどは日本人相手の仕事です。世界を相手にして仕事をするのが国際化だと考えますので、そのような意味ではまだまだだと思います。このような大企業でさえ国際化はこれからというところですから、中小企業となると多くの問題を抱えています。特に日本の観光を支える上でこれからますます重要な役割を果たすべき旅館業界などは、中小企業のかたまりですので、相当の努力で経営面の科学的マネジメントの仕組みをつくっていかないといけないと思います。

先日、星野リゾートの星野佳路さんのお話を改めて伺いしてすごいなと思いました。星野さんがやっておられることは目立ちますから賛否両論がありますけれども、やや否定的な物言いをする方たちは、マーケティングの原則に従ってやっているにすぎないという見方をされます。しかし実は、マーケティングの原則に従って徹底してやっている企業あまりに少ないと思います。その中で本気でやっているのが星野さんだと理解しています。一度お話を聞いてみられれば、なるほど数値的、科学的な経営がなされているということが分ると思います。

一方、多くのところではどうかと言えば、先日、宿泊関係の最大の団体の全旅連の青年部長さんが正直に面白い話をしてくれました。「全旅連は委員会が多いんです。そこではもちろん色んな議論をするのですが、実は、今さら恥ずかしくて聞けないような経営に関する初歩的な知識、例えば税務署への申告の仕方といったことなどを聞く場になってしまっていて、マネジメントについてちゃんと勉強する機会がなくて困っています。そのような勉強の場をつくっていかないといけないし、全体の底上げが必要なんです」。そんなことを語ってくれました。

これからお話ししますことは、このような状況の中で、行政なり大学なりが役割を果たして人材育成をきちんとやっていくことが、これからの観光の世界を形づくり、進めていくために必要であり、そのためのアクションを起こしていかなければならないということです。

2. 省庁のマネジメント改革

中央官庁では、各省庁の課長補佐を集めて年に数回研修が行われます。昨年の10月の

研修会では私が観光政策について話をしました。観光政策の話と併せて、せっかくこれから国の中枢で仕事をしてもらわなければならない人たちですので、自分たちの組織が持っている組織や仕事の仕方の欠陥に気づいてもらって少しでも直してもらいたい、あるいは良い仕事をしてもらいたいということで、その例として、これまで私がやってきた「マネジメント改革」の話をしました。参加者はショックを受けたように感じましたが、同時に「そうだよな」という思いで受けとめてくれたと思います。

行政組織の基本的な欠陥の一つとして、マネジメントが実質的に存在していないという実態があり、その結果として結果責任の意識が貧困であり、成果軽視になる。だから霞が関がバッシングを受けることになるという話をしました。マネジメントが実質的に不在であるということは、誰が、何を、どこで決めているかがはっきりしないということです。例えば国土交通省の場合是一种の最高意思決定機関として「省議」というものがあり、局長以上から大臣までが出席して、予算や省の大きな政策について決定する場になっています。しかし、その場では既にシナリオが決められていて、一方的に発表があって出席者は何も発言しないままに終わるということになっています。よその省庁ではそうではないところもありますが、国交省ではそのようになっています。もちろん、その場に至るまでには省内で十分な調整をしてくるからそういうことが可能なのですが、それにしても誰が、どこで、どのように決めたのかが分からないという仕組みです。さらに、全体として成果を上げていくという経営者意識が乏しく、例えば事務次官になったときに、どこをどう動かして何について成果を上げていくのかということが掴みにくい組織になっています。また、人事に継続性がなくコロコロと変わっていき、仕事の都合で人が動くのではなく、時の都合で人が動く人事になっています。予算についても非常に硬直化しています。これは多くの国民の皆さんが批判をされるのですが、現実問題として、各省庁間で予算配分を0.01%変えるのはたいへんなことです。省内でも同じような状況になっています。このようなりソース配分の仕方をしていては、ニーズに応じた仕事をしたりコスト意識を持つということはありません。

それから、スピード感が全くありません。このことには色々原因はあるのですが、民間企業ですと4半期や月次で物事を考えますが、国の場合は予算にしても法律にしても基本的には年に一回になってしまいます。年間ワンサイクルで物事が動いていく訳です。何か計画をつくる時には5ヶ年計画ということになりますが、「5年なんてバカなことを言うな」というのが私の正直な気持ちです。3年もすれば世の中は変わってしまいますが、そのスピードに対して対応できていません。また、全体として信賞必罰には至っていません。

役所はたいへん大きな組織であり、当然法治でありますから法律に基づいて動いていかなければなりません。したがって、ルールを守ってその中で整備していかなければならないところがありますので、やむを得ず硬直的になったり、自由に予算を動かしたりという

ことができません。しかし、見方を変えますと、正しいと思っただけでも結果として間拔けたところがあるということです。自分たちがやっていることについて結果責任をきちんと感じていないとか、成果よりもやっている姿や形を大事にしているといったことが、全体として霞が関の信頼性を落とすことになっています。

研修では、以上のようなことを意識して仕事をするように話しましたが、言うだけでは理解してくれませんので、小さな試みではありましたが、私が観光庁を立ち上げたときに行いましたマネジメント改革を例として示しました。マネジメントの問題につきまちは制度的に限られていますので、できることに限りがあるのですが、具体的には「庁プランをつくる」、「コミュニケーションを改善する」、「人事政策を変える」、「職場規律の回復に努める」、「産業界との対話とスピード感のある対応を行う」といったことがその内容です。その中で一例だけをお示しします。これはある意味では失敗であったという意味からも例としてお示ししたいと思います。

3. 観光庁ビジョンとアクションプラン

マネジメントの考えを導入し、結果責任を考えながらスピード感を持って仕事をやっていくためには、仕事のフレームワークが必要だということで「観光庁ビジョン」をつくり、その中で、何を目指して自分たちが仕事をしていくのかという理念と、理念を実現するためにどのように行動するべきかという「行動憲章」を定めました。このビジョンをベースにアクションプランをつくりました。

そもそも観光庁ができたときに、よるべき基準として「観光立国推進基本計画」という5つの目標を持った大きな計画が立てられており、その計画に従って目標を達成していくことが基本的なミッションとして私たちに与えられました。このミッションを達成するために、観光庁として何を成すべきかをまとめたのが観光庁のアクションプランです。アクションプランの内容は詳細なものですが、構成は簡単です。まずは現状がどうなっているかを整理し、その現状のどこに問題があるかをえぐり出した上で、問題に応じて自分たちがどういう考え方でこれに対応していくのか、具体的には、どの仕事を誰がいつまでにやるのかということをもとめました。ここまでのアクションプランをつくったのは霞が関では間違いなく初めてのことだと思います。

なぜこういうものをつくったかと言いますと、責任者をはっきりさせ、何をいつまでにやるのかということを確認しておかなければ、上司たるもの、長官たるものは組織全体の運営ができないということが一番の理由です。それを裏返しますと、職員や管理職がそれぞれの成果を内部できちんと管理、チェックできるようにするためということでもあります。また、役所は何をいつまでにやるのかということがはっきりしていないところがあります。そのために、産業界と役所が仕事をする場合にどう対応すればよいのかが分ら

ず、連携プレイがうまくいかないことがありますので、産業界の関係者にコミットメントとしてこれを示すことで明確な責任を取る形にしたということもあります。このようなアクションプランをつくること、導入することは大変なことでしたが、定着させることはさらに大変だろうと私自身は考えておりました。しかし、これぐらいのことをやらなければ、せっかく新しい組織をつくりながら、期待に応えることはできないと思っておりました。

一方、私自身は、私がいなくなったらこのようなことは多分続いていかないだろうと考えておりましたが、その通りになってしまいました。ただし、そうならないための努力だけは行ってまいりました。その一つとして「観光庁アドバイザー・ボード」という外部監視機関、一種の社外取締役会をつくりました。ここでは、アクションプランに従って、ちゃんと仕事ができているかということを3カ月に一回報告して意見をいただき、未達成のモノについては、どこに問題があってどう変えていかなければならないかを見直すということにしました。普通の審議会ですと、意見を言っていておしまいです。アドバイザー・ボードのメンバーには、常時監視していただいて意見を言っていたきたいということ、意見を受け止める私たちは真剣に受け止めて実現の努力をしますから、意見を言う以上は無責任に言わないで下さいというお願いをしました。

私自身は観光庁に戻ってくる前は一度国交省を辞めて、日本郵政公社の理事や執行役員をやっていましたので、当時の郵政公社の総裁であった生田正治さんにとりまとめをやっていただき、その他のメンバーには経済界やスポーツ界の方たちに就任していただきました。スポーツ界からは中田英寿さんをお願いしました。任期につきましては、私の任期の間ということにしましたので、私が辞めるときに皆さん一緒に辞めていただきました。

ここまでお話ししましたことは、何をすべきかをきちんと決めてそれを継続してやっていくことに意義があるということです。

4. 観光立国人材育成

省プランの構成要素として力を入れていたのが観光立国のための人材の育成です。これが今日の話のテーマです。観光立国を進めるためには、人材育成が必要であると考え、国や地域、その他の主体がそれぞれ何をすべきなのかということをもとめました。

(1) 人材育成の取組み

人材育成に当りましては、日本の観光全体が抱えている課題を踏まえた上で、

- ・インバウンドへの対応
- ・魅力ある観光地づくり
- ・国際力の強化

の3分野で人材の育成が必要であるという整理を行い、それぞれの分野ごとに国としての

取組みも整理しました。実は観光庁では、「国際力の強化」については特に力を入れてまいりましたし、現在も継続して取り組んでいるところです。人材育成の取組みの具体策としましては、次のようなことを挙げております。

- ・モデルカリキュラムの策定と大学等での実践支援
 - ……産学共同研究の促進、実践者向けセミナーの展開
- ・教育者のスキルアップ支援
 - ……海外から招聘した当研究分野の先駆者等によるモデル授業の実施
- ・観光産業におけるインターンシップの促進
 - ……教育内容と連動したインターンシップの試行および検討

このようなことは、大学の中で閉じこもってやっても価値が出てきません。日本の大学、特に文系では産学官連携が弱いということがありますが、そこを打破しながらやらなければ意味がないということで、産学官連携で仕事をする仕組みをつくりながらやっています。

(2) マネジメント教育

つぎに、マネジメント教育について考えて見ます。マネジメント教育に力を入れるということのポイントは簡単なことで、世の中が求めている人間を生み出すような教育をすることであり、この点が日本の弱いところなので力を入れましょうということです。

例えばということで、私が大学で学生に見せるのですが、学生の皆さんが大学で受けている授業や先生聞いていることと、スライドに示した「社会人基礎力」(図1)とはマッチしていますかというような質問をしています。



図1: 「社会人基礎力」とは

この「社会人基礎力」は、経済産業省がどんな人間が企業に必要とされているかということを整理したもので、分りやすく言えば、リクルーターはこんなことを考えながら学生を採用しているのだということを示しています。3つの能力として、

- ・前に踏み出す力（アクション）
- ・考え抜く力（シンキング）
- ・チームで働く力（チームワーク）

ということが挙げられていますが、この3つができる人間をリクルーターは求めているということになります。現に、私が採用する側で面接したときにどうだったかと言えば、このような目で学生を見て選んでいました。しかし、率直に申し上げて、大学で先生たちの話を聞いていますと、だいぶずれていると感じます。このようなことを人材像の念頭に置きながら人材育成を考えてまいりました。

スライドに示しましたように、観光庁の人材育成の取組みは、2007年度に始まって2011年度も継続しています(図2)。まず申し上げたいのは、国の事業において一つのテーマで5年も続いている事業はそんなにありません。ハードの世界では20年、30年続いているものはありますが、ソフトの世界では極めてまれだということが実態です。「人づくり」はきちんとやっていかなければならない取組みですので、毎年の進捗を見ながら、また、見直しをしながら次のステップを定めるという対応をとってきました。



図2：観光庁（国土交通省）の産学連携による人材育成の取組みの経緯

少し詳しく説明しますと、2007年度に「観光立国人材育成推進会議」、別名「産学官連携検討会議」がスタートし、2008年度には観光経営のカリキュラムモデルがつくられています。2009年度にはカリキュラムモデルによる実験が行われ、また、2010年度に産学共同の実験が行われて、2011年度に次世代のインターンシップモデルの実験が実施されるといったように、官主導で色んな取組みを進めています。取組みの経緯の表の中で丸を付けています2009年度～2011年度の事業（カリキュラムモデルによる実験、産学共同実験、次世代インターンシップモデルの実験）につきましては、私が所属しております首都大学東京で最先端の取組みとして施策の展開を進めているところです。

マネジメント、マネジメントと申しておりますと、ずいぶん偏ったことを言っているのではないかとお思いになるかもしれませんが、決して幅広い分野での学なり人材育成の必要性を否定している訳ではありません。今の日本の置かれている状況からしますと、マネジメントの育成が重要だからこそ、そこに力を入れたいということであり、逆に言いますと、他の部分はうまくいっているのそこはお任せして、足りないところに力を入れていると理解していただければと思います。

マネジメント意識が欠けていることやマネジメント教育が遅れているので充実しなければならぬという思いを持つに至りましたのは、日本の大学、特に観光関係の分野での動きの中にそう思わざるを得ない要素があるということによります。このグラフは観光学部・学科を設置している大学の定員数の推移です（図3）。

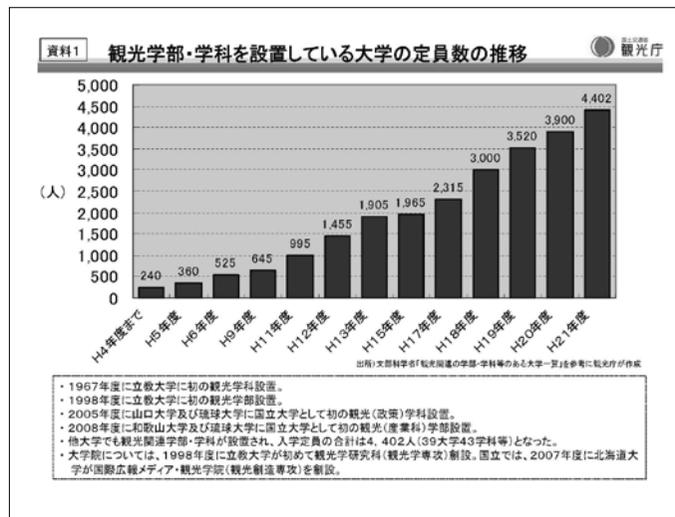


図3：観光学部・学科を設置している大学の定員数の推移

平成4年度は240人であった定員が、その後急に増えてきているということがお分かり頂けると思います。日本では、1967(昭和42)年に立教大学に観光学科が設置されて以来、ほとんど追加がありませんでしたが、このところ観光学部や学科を設置する大学が急増しています。なお、観光学部・学科に加えて観光に関する専攻やコースまで幅を広げますと、実に125の大学(128学部, 134学科・専攻コース)で観光を教えていますから、全国で観光を勉強する学生がものすごく増加していることになります。これを学生の定員数で見ますと17,540名になります。ところが、卒業後の進路を調べて見ますと、観光関係への就職は12.2%に過ぎず、これは完全なミスマッチです(図4)。

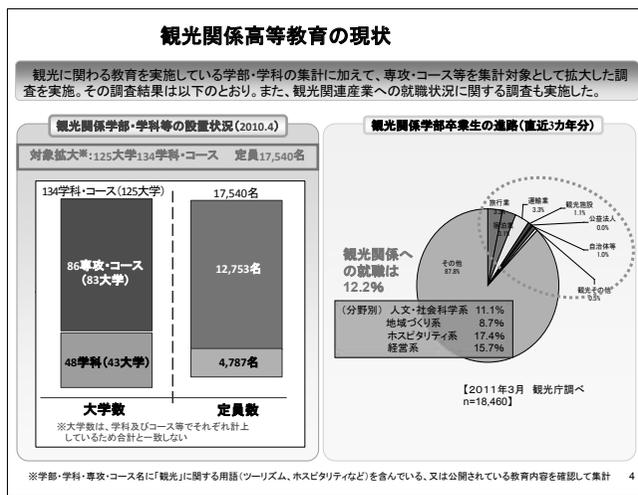


図4：観光関係高等教育の現状

(3) 外国との比較に見る日本の観光教育の課題

このようなことを踏まえて、日本と外国の観光教育を比べて見ますと、日本の観光高等教育だけが極めてユニークな位置付けにあるということがはっきりわかります。

多少荒っぽい分け方ですが、観光関係高等教育機関の類型を「人文・社会学系」、「地域づくり系」、「ホスピタリティ系」、「経営系」の4つのジャンルに分けて、日本、中国、韓国、台湾について調べて見ますと、日本と外国の国々の類型が全く違うことが分ります(図5)。アメリカもそうですが、観光は、ほとんどの国では「経営系」で教えています、日本だけは「人文・社会学系」が多く、次いで「地域づくり系」となっています。「地域づくり系」は韓国や台湾ではほとんどゼロに近いのに比べて、日本で「地域づくり系」が多いのは、日本の強みだろうと私は思っています。それにしても日本は「経営系」が少ないこと

が分ります。さらに調べていきますと、中国、韓国も日本と同じように観光系のコースが増えていますが、特に中国では、「経営系」以外の新設は世の中の役に立たないから認めないという方針です。アメリカ的な考え方では、少なくとも学部の仕事は産業界の役に立つプロダクツをつくるのが目的ですから、産業界が求めているものをつくっても売れないし、大学として機能しないということで、「経営系」の割合が多くなるのは理解できることです。

このように、日本は「経営系」が弱いので、強化しなければならないということはおご理解頂けると思いますが、実はもう少し掘り下げて見ますと、もっと惨憺たるものだということが分ります。観光系あるいはホスピタリティ系の研究が一番進んでいるのはアメリカですが、そのアメリカの博士課程に留学している学生の数は、韓国約100名、中国約40名、台湾約20名、そして日本はゼロです（図5）。アメリカの大学教授にアメリカの学会における論文発表の状況はどうかということを訪ねたことがあります。中国や韓国出身者の論文発表は年々歳々活発になってきているが、日本人については毎年ほとんどありませんという答えでした。日本はこんなにも世界とずれてしまっています。従いまして、弱いところを強くしていく必要がありますので、先ほど説明しましたようにここ5年間ほど観光庁が中心になって、経営マネジメントに力を入れてやっております。

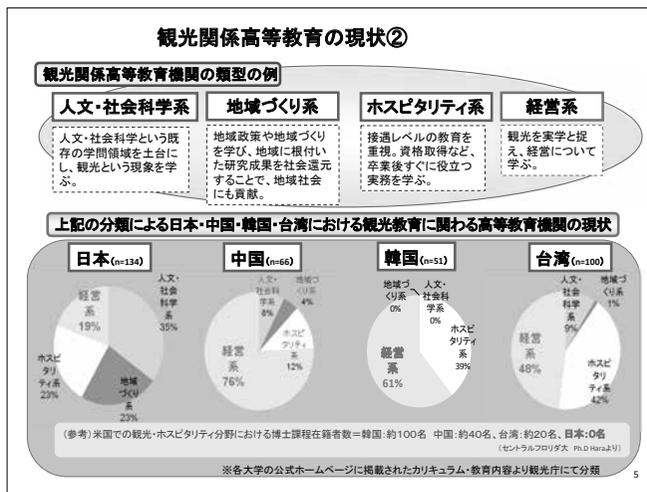


図5：観光関係高等教育の現状②

5. 首都大学東京の取組み

私は、去年の4月に首都大学東京に参りました。役所でやるべきことはやってまいりましたので、今度は、大学でなければやれないことをやろうということで実践に取り組んでおります。幸いなことに大学も、私に研究や教育の能力を求めるよりも、大学全体の充実を図るようということを考えていただいています。

ここで、首都大学東京について簡単に紹介させていただきます。首都大学東京と言うと知らない方が多いのですが、旧都立大のことです。首都大学東京ができたのは2005年です。大学ができて3年後に私がおります自然・文化ツーリズムコースが創設されました。従いまして、この大学がツーリズムや観光に取り組んだのは最近のことです。自然・文化ツーリズムコースのたいへん大きな特色は、都市・環境学部という理系の中にあるということ（図6）。

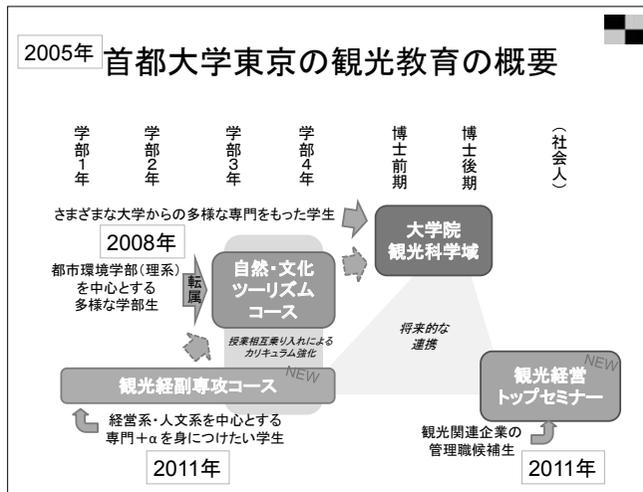


図6：首都大学東京の観光教育の概要

先ほど申しました全国125の観光に関連する学部・学科・コース部門などをを持つ大学の中で、唯一理系で観光をやっているのが首都大学東京です。このことをアメリカの大学の先生に話しましたところ、「たいへん素晴らしい。観光はビジネスでなければならず、数字を扱うことがレッスンになるので、理系でやるのはいいことだ」と言われて意を強くしました。

首都大学東京では次に示しますような6つの取組みを進めております。ここでご紹介するのは、自分のところでやっていることを宣伝するということではなく、できることは皆さんにもやっていただきたい、皆さんに広めたいということです。

○首都大学東京での日本で最初の6つの取組み

- ・観光経営マネジメントカリキュラムのほぼ完全実施
- ・産学共同研究への参画
- ・産業界の求める高度集中型の社会人材教育の実施
- ・地方大学における観光経営博士課前期コース支援
- ・多企業連続型インターンシップへの参画
- ・隠し玉

(1) 観光経営マネジメントカリキュラムの実施

まずカリキュラムの実施についてお話しします。先ほどマネジメントが弱いと申しましたが、弱いと言っているだけではいけませんので、学部で何を教えたなら役に立つ学生づくりになるかということで作成したのが、2008年に観光庁でつくったカリキュラムモデルです(図7)。つくってもやらないと意味がないので、2009年に7つの大学にお願いして約2週間の実験を行いました。実は2週間ぐらいの実験では意味がないと担当課長に申しましたが、結果的には、どこにこのカリキュラムに基づくマネジメント教育の難しさがあるのかということが分ったことは、たいへん意味がありました。難しさの一つは、先生がないし教材がないからできないということであり、もう一つは、役所も大学も同じですが、予算と教員確保がまず必要なわけですが、それができないということでした。

分野	1年次・2年次・・・各分野の基礎を学ぶ		3年次・4年次・・・専門的、業界別の知識・スキルを習得する	
	科目番号	科目名	科目番号	科目名
経営戦略	1	経営学概論	13	サービスマネジメント
	2	経営戦略概論	14	ホスピタリティ産業の経営戦略論
IT	3	IT概論	15	ホスピタリティ産業のIT
会計	4	会計概論	16	管理会計
			17	収益管理
			18	企業財務
財務	5	財務概論	19	ホスピタリティ産業の財務管理
マーケティング	6	マーケティング概論	20	サービス・マーケティング
			21	マーケティング調査
			22	ブランド論
人事・組織	7	組織行動論	23	ホスピタリティ産業の人材管理
			24	リーダーシップ論
ビジネススキル	8	観光調査法概	25	法務概論
	9	コミュニケーション基礎	26	ロジカル・シンキング
	10	統計・定量分析手法	27	リスクマネジメント・企業コミュニケーション論
	11	経済学	28	宿泊産業論
産業論	12	ホスピタリティ産業(入門)	29	旅行産業論
			30	MICE 赤字:必修科目 青字:選択科目

カリキュラムモデル実践にあたり、教員・教材が不足

産学共同研究の実施

図7：観光マネジメントカリキュラムモデル

そのようなことで、何も動かないということが分りましたので、ではうちの大学でやっ
てやろうということで学内を調整し、実践することになりました。ただし、学内バトルもあ
りますので、完全な形にはならなくて「副専攻」ということになりました。専攻を持ちな
がら、それにキャップする形としてコースをつくりました。授業は、観光系と経営系が両
方から出し合い、足りないところはよそから持ってきたり、新しくつくるということでス
タートさせることができました。運営につきましても、今までなかったような産学連携の
運営を導入したり、新しいインターンシップの仕組みを企業とともにつくったり、若手経
営者との交流を実施したりして「実」を持たせる努力をしているところです。

(2) 産学共同研究

残念ながら私の大学で取り組みをスタートさせたときには、観光の世界では共同研究の
実績はありませんでした。2010年度からはケーススタディとして、企業が求めるテーマ
について共同で研究することで、教材づくりを行うと同時に先生方の育成も図っていこう
ということで産学共同研究を進めているところです。昨年度は6つのテーマについて首都
大学東京と早稲田大学の2つの大学が、JTB、JR東日本、近畿日本ツーリストなどと組ん
で共同研究を行いました。今年度はもう少し幅を広げて、慶応大学、京都大学、一橋大学、
立命館大学にも加わっていただいて、9つのテーマで実施しようということで動いている
ところです。

共同研究を行ってたいへん良かったと感じたことが2つあります。一つは、それまで企
業の方と付き合い経験がなかったのですが、一緒に研究することで、大学も役に立つこ
とがあるんだということを理解していただきましたし、実際に貢献できるようなことも提
供できたと思います。このようなことを通じて、双方のレベルと理解が高まっていくもの
と信じています。良かったことのもう一つは、企業側のテーマを考えますと、それにふさ
わしい研究実績を持っている先生なり研究室を探す必要がありますが、見事なぐらい観光
についてやっていないということが分りました。これは大変困ったことなのですが、逆に、
新しい分野として関心を持っていただく方が増えてきました。このようにして観光への取
組みの質が高まっていくことは意味のあることだと思っています。

(3) 高度集中型の社会人材教育

社会人材教育はこれまでいろんな形でやられていますが、産業界からはレベルの高いも
のが求められていました。しかし、そのような要望に応じてこなかったということがあり
ましたので、レベルが高くて集中度の高い「観光経営トップセミナー」を去年の夏に開催
しました。これは社会人再教育ではありますが、トップセミナーと称していますのは、こ
れから経営層を担っていくような人材を育てる場にしようということでもあります（図8）。

セミナーの期間は5日間2回と、観光庁に担当していただく2日間を合わせて12日間という今までやったことのない長期間の開催としました。受講生は入社10年から15年ぐらいの優秀な人に絞り、カリキュラムはこの年代にふさわしいもの、つまり、会社に入って多少業界のことが分ったけれども、全体像が見えなくなっている。あるいは、マネジメント・スキルの必要性に気が付いているといった人たちを、言葉は悪いですが、「締め直す」ということで、観光産業論やマネジメント・スキルを学ぶ内容にしました。

このような学生を集めてセミナーをやる以上は、相当の魅力を持たせなければならないということで、講師陣は、観光行政のトップや観光産業の経営者のトップの方々に集まっていたいただきました。一般に、大学でセミナーをやるということになりますと、その大学の先生で固めることになるのですが、それはやめて、外部の先生方に活躍していただくという学際的なやり方をしました。具体的には、観光庁次官や京都市長に加えて、企業の社長さんにそろい踏みをしていただきました。

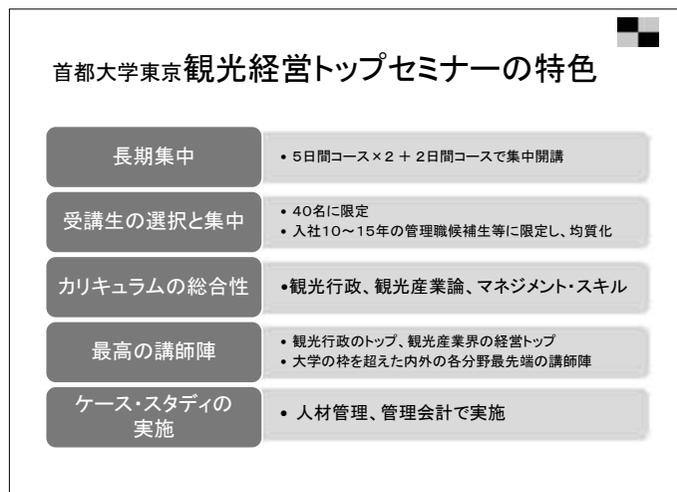


図8：首都大学東京観光経営トップセミナーの特色

集中でやったことはつらかったけれども、これでいいという声を参加者からいただきましたし、経営者側からは来年もやってくれという声が上がってきました。一番おもしろかったのは、親元の社長さんにプログラムを見ていただいたときに、自分自身が出席したいと思っていただきましたので、自社の今後を担ってくれるような人たちを出していただくことになりました。その結果、出席した人たちは自分は幹部候補生なのだという自覚が芽生えたということです。

このセミナーは東京で自己完結することが良いとは全く考えていません。ぜひ、それぞれの地域の状況に応じてやっていただくことがポイントだと思っています。実際に、うちでもやりたいという引き合いが来ていますので、成功であったと思っています。

(4) 地方大学での観光調査研究

観光に関する調査研究は、大学の外に出て産業界と一緒に仕事をすることによって、地域との連携が強まり、結果として良い人材が生まれてくることになります。地方の国公立大学は観光の調査研究の分野が弱いと思いますので、地方でこそ取り組んでもらいたいと考えています。今年度予算がつかまりましたので、現在準備を進めているところです。

なおこの際には、観光の科学的な調査研究をやろうとするとフィールドが必要です。このことを考えますと地方でやるということには大きなメリットがあり、成果が期待できます。

(5) 次世代型インターンシップ

今の日本のインターンシップは極めて不備です。学生も企業もアルバイト的な位置付けでしか考えていません。他方、アメリカなどではインターンシップは教育課程に組み込まれています。半年ぐらいのインターンシップ期間で企業に役に立つような実践を積み、結果として、中間管理職ぐらいの力を持った実践的な人材を育てています。

日本のインターンシップの現状はアメリカなどの状況には遠く、大学側にも企業側にも問題があります。この壁を突き破り、長期にわたるインターンシップメニューによって、学生と大学の双方にとって意味のあるインターンシップにしていかなければならないと思います。

このようなシステムは、一気に実現させるということではできませんので、まず第1段階として行ったのが「多企業連続型」のインターンシップです。これまでのインターンシップは、だいたい2週間ぐらいどこかの企業に行っておしまいということでした。次世代型インターンシップ（試行）では、旅行や観光の頭から尻尾までを勉強してもらおうということで、ホテル、旅行会社、交通・運輸会社の3つを2週間ずつ連続で勉強し、次に観光庁の部署に配属し、最後に総括としてインターンシップの成果を発表させるというスケジュールになっています。このように、学生も学生を受け入れる企業もたいへんな手間をかけてやっているところです。このような試行をしながら、本当に生きた人材をつくっていこうと考えています。

6. まとめ

色々とお話してきましたが、私は行政官としてものごとを興す立場でしたので、行動に結びつかないものは意味がない、物事を実現して社会の基礎をつくっていかなければ意味がないと思って仕事をしています。しかし、正直に申しまして、日本の大学はそのような

考えとは違う部分が大いにあると感じています。私が昨年の4月に大学に来てすぐに主任教員の研修会がありましたが、その研修会で大きな衝撃を受えました。

研修会で、ある大学の先生が最初に言われたことは、「大学の、少なくとも学部の目的は、世の中の役に立つプロダクトをつくることだ」ということでした。私はそれは当然だと思って聞いていたのですが、講演が終わって質疑の段階になりましたら、「神聖な大学に対して何を言っているのだ」という猛烈な反発の意見が出てびっくりしました。アメリカでは当たり前のことですが、日本ではこのような状況です。

一方、私は大学に来て初めて教育基本法を読みました。平成18年に大改正が行われ、初めて「大学」の項が設けられ、大学は何を成すべきかというところで、教育と研究について述べられています。教育については、「深い教養と専門知識を持った人間をつくる」と書いてありますが、どうも気持ちとしては「ちゃんとしたプロダクトをつくる」ということであろうと思います。そのようなことを考えながら仕事をしているところです。

▼参考資料

2011年10月15日ものがたり観光行動学会第1回年次大会「日本観光の復興」リーフレット

ものがたり観光行動学会 第1回年次大会

日本観光の復興

いま...だから...ニッポンを歩きたい

10.15^土

年次大会 9:45~17:40 懇親会 18:00~19:45

会場 関西国際大学 尼崎キャンパス
JR「尼崎駅」下車(改札スタ北、駅前デッキ上そのままを北西に徒歩約5分)

関西国際大学ものがたり観光行動学会 年次大会開催実行委員会
TEL 0794-84-3353 | 担当: 岩井(いかに) FAX 0794-85-1102 (関西国際大学気付)
※上記の電話番号は研究室直線です。Eメールでの連絡をお願いします。@imonoat@kaiiho.ac.jp
なお、不在時の電話は、ものがたり観光行動学会 事務局06-6311-3325(担当: 宮本まで)

主催 ものがたり観光行動学会 (愛媛県) 関西国際大学 | 協賛 トラベルニュース社・シンカコミュニケーションズ

「ものがたり観光の時代」
を考え行動する
学会の大会です。

写真提供: 毎日新聞
大分県豊後大野市 雨沢の滝

ウィーンの 「ものがたり風」観光魅力 前編

高田公理*

Alluring Vienna: In the Mode of a Travel Narrative (Part 1)

TAKADA Masatoshi Yasutaka

要 約

筆者は、本務校である佛教大学の教育職員研修のため、2011年度に半年間、オーストリアのウィーン大学に滞在しながら、ウィーン市をはじめオーストリア各地、中央ヨーロッパ諸国、イタリア、フランスなどにおいてフィールド調査を実施する機会を得た。

あわせて既存文献を渉猟し、国際観光に占めるオーストリアの位置を明らかにした上で、ウィーンを中心としたオーストリアの観光魅力を「ものがたり風」に捉え直すことを試みた。本小論は、こうした研究の成果のひとつである。

その概要は、本小論の節の表題に表出されている。すなわち「国際観光に占めるオーストリアの位置」「世界遺産とウィーンの多様な建築様式」「現代ウィーンにおける『世紀末』の残照」「ゲルマンとラテンの『合いの子』都市」「19世紀以来の路面電車が『いま新しい』」がそれである。

この小論は、以上の記述を終えたところで、いったん論文を閉じることとし、続きの考察は「ウィーンの『ものがたり風』観光魅力（後編）」において展開する。

1. 国際観光に占めるオーストリアの位置

2011年度、本務校である佛教大学の教育職員研修のために、同4月から9月までの6か月間、オーストリアのウィーン大学で客員教授（Gastprofessor）を務める機会を得た。その目的は、ウィーンを中心にオーストリア、および中欧諸国の観光の現状を調査し、もって日本の観光振興に資する研究を行なうことである。

滞在先にウィーン大学を選んだ理由のひとつは2009年、世界経済フォーラム（World

* 佛教大学社会学部

Economic Forum)¹が133か国を比較したうえで、オーストリアを、観光に関してスイスにつぐ世界第2位に順位づけていたからである。ここで、同レポートにおける上位15か国および日本の順位と、それぞれの国のスコアを記しておく。

- | | | |
|------------------|-------------------|-------------------|
| 1. スイス (5.68) | 6. スペイン (5.29) | 11. イギリス (5.22) |
| 2. オーストリア (5.46) | 7. スウェーデン (5.28) | 12. 香港 (5.18) |
| 3. ドイツ (5.41) | 8. アメリカ (5.28) | 13. オランダ (5.09) |
| 4. フランス (5.34) | 9. オーストラリア (5.24) | 14. デンマーク (5.08) |
| 5. カナダ (5.32) | 10. シンガポール (5.24) | 15. フィンランド (5.07) |
| ……25. 日本 (4.91) | | |

その詳細は『旅行・観光競争力レポート2009 (The Travel & Tourism Competitiveness Report 2009)』²に記載されている。ちなみにスコア算出の基礎となったのは、つぎに示す14項目の指標である(丸カッコ内、英語表記の後の数値は日本の位置を示している)。

- 政策 (Policy rules and regulations : 38 位),
- 環境整備 (Environmental sustainability : 49 位),
- 安全 (Safety and security : 84 位),
- 衛生 (Health and hygiene : 21 位),
- 観光の優先度 (Prioritization of Travel & Tourism : 49 位),
- 空港インフラ (Air transport infrastructure : 24 位),
- 陸上交通インフラ (Ground transport infrastructure : 8 位),
- 観光インフラ (Tourism infrastructure : 40 位),
- 情報インフラ (ICT infrastructure : 21 位),
- 価格競争力 (Price competitiveness in the Travel & Tourism industry : 86 位),
- 人的資源 (Human resources : 20 位),
- 親近感 (Affinity for Travel & Tourism : 131 位),
- 自然資源 (Natural resources : 41 位),
- 文化資源 (Cultural resources : 10 位)

ただ、ウィーンからの帰国直後、世界経済フォーラムは『旅行・観光競争力レポート2011』を発表した。それによると、1位はスイス(スコア:5.68)であるが、2位にドイツ(5.50)、3位にフランス(5.41)が位置づけられ、オーストリア(5.41)の順位は4位に低下していた。理由は、それぞれの国の個別指標に対する評価が微妙に変化した結果で

ある。それらをドイツ、フランス、オーストリアについて記しておく、つぎのようになる。

ドイツ…………… 環境整備, 安全, 観光インフラ, 情報インフラ, 自然資源, 文化資源
におけるスコアの上昇

フランス…………… 安全, 衛生, 情報インフラ, 自然資源におけるスコアの上昇

オーストリア… 政策, 安全, 空港インフラ, 陸上交通インフラ, 人的資源, 親近感,
自然資源におけるスコアの下降

しかし、2011年の評価結果を総合スコアにおいて比較すると、ドイツ=5.50、フランス=5.41、オーストリア=5.41であって、これら3国の差は非常に微少である。オーストリアは今なお、観光に関して突出した地位を維持しているといつてよい。実際、この点に関して『旅行・観光競争力レポート2011(The Travel & Tourism Competitiveness Report 2011)』は、つぎのように記している。

今年、オーストリアはその地位を2ランク落とした。しかし、この国は139か国のうち4番目という高い位置にランクされている。この順位は、8つの世界遺産を含む豊かな文化資源、豊かな創造的産業、そしてビジネス関連の旅行者に提供する多数の博覧会や展示会などによって支えられている。この国の環境の持続可能性に対する関心と共に、その自然環境もまた高く評価される(順位は5位)。くわえて、オーストリア人は外国人旅行者に対して、開放的で友好的であると認知されている。それに、整備されたレンタカー施設、ホテルなどの宿泊施設やATMといった、オーストリアの観光のための社会基盤には、これといって劣った点がない。世界で最も安全な国のひとつ(順位は10位)、卓越した健康と衛生の水準(順位は3位)といったオーストリアへの評価も、その強みとなっている(前掲レポート、p.11)。

つぎに、国際観光市場におけるオーストリアの位置を検討する。

2009年における世界の国々の「外国人受入数(=国際観光客数)」は約8億7689万人³であった。そのうち2.4%にあたる2,136万人がオーストリアを訪問している。この数値は、フランス、アメリカ、スペイン、中国などについて世界第11位である。

オーストリアの人口は、わずか839万人に過ぎない。この点に注意を払うと、オーストリアを訪問する外国人観光客の数は、同国の人口の2.5倍余にあたる事が分かる。その倍率は、世界的にも、人口わずか54万人のマカオを訪れる外国人観光客が、その約19倍の1,000万人余に及ぶのについて大きい。マカオが、いわば単一の都市であるのに対して、小国とはいえオーストリアが、ひとつの近代国家を形成していることを考えると、驚くべき数値だといふほかない。

さらにオーストリア経済に占める観光の位置に目を移す。この国の同じ年の国内総生産 (GDP) は、IMF (国際通貨基金) によると 3,770 億ドルである。それに対して国際観光収入は約 194 億ドルにおよんでいる。これは同国の同年の GDP の 5.2% を占めている。この数値もまた、マカオ (83.8%), レバノン (18.4%), クロアチア (14.6%), 香港 (7.3%), マレーシア (6.6%), モロッコ (6.4%) について世界 7 位に位置づけられる。

そこで、先に比較対象とした国々との比較を試みしてみる。すると、スイス (19 位, 2.1%), フランス (23 位, 1.8%), ドイツ (30 位, 0.1%), そして日本 (39 位, 0.2%) といった数値が算出される。観光関連産業が GDP の 5.2% を稼ぎ出しているオーストリアは、いわゆる先進国のなかでは、ある種の例外的な存在だといえる。

2. 世界遺産とウィーンが多様な建築様式

オーストリアには 8 件の世界遺産がある⁴。いずれも文化遺産である。

その数は必ずしも多くない。44 件の世界遺産を擁するイタリアをはじめ、10 件以上を世界遺産に登録している国は 22 か国を数える。世界全体では、世界遺産の登録件数が 900 件を凌駕している⁵。こうしてみると、8 件という数は、むしろ少ないように見える。

しかし、オーストリアの、2001 年に世界遺産に登録された「ウィーン歴史地区」には、ほかの世界遺産には珍しい特徴がある。そこには半径わずか 1 キロ程度、きわめて狭小な、ほぼ円形の空間に 10 件余りの歴史的建造物が集積している⁶。それは、世界的にもまれな稠密性だと思われる。このことが、きわめて強いインパクトを発揮する。

今ひとつの特徴は、これらの建築様式が著しく多様なことである。たとえば、旧市街の中心に位置するシュテファン大聖堂の外観はゴシック様式である。しかし、内部の祭壇はバロック様式、しかも正面入口の門はロマネスク様式といった具合である。12 世紀から 14 世紀にかけて建設された、この教会建築について伊藤哲夫は、つぎのように記している。

この時代の教会建築としてけっして稀な例ではないが、ウィーンの建築を特徴づける「異種なるものの共存」の先例といってよい⁷。

シュテファン大聖堂から、繁華な目抜き通りのケルトナー通りを南に向けて、1857 年に整備された環状道路 (Wiener Ringstraße) にまで進む⁸。すると、ネオ・ロマン様式の国立歌劇場がある。少し距離を置いた西隣には、13 世紀から 1918 年に至る 600 年以上もの間、広大な帝国を支配したハプスブルク家の居城であったホーフブルク宮殿が偉容を誇っている。当然その間、何度も増改築が繰り返されてきた。その結果それは、さまざまな建築様式が混交した壮大な建造物となっている。

環状道路に戻り、時計回りに進む。すると、ルネサンス様式とバロック様式が混在する

美術史美術館（開館は1891年）と自然史博物館（開館は1889年）、民主制を生んだ古代ギリシャの神殿デザインを引用した議会議事堂（竣工1883年）、中世市民の自治を象徴するかのようなゴシック風の市庁舎（竣工1883年）、ドイツ語圏内で最高峰の劇場とされるネオ・バロック風のブルグ劇場（竣工1888年）、そして学芸拠点を自己主張するルネサンス様式のウィーン大学（設立1365年、ドイツ語圏最古）などが並んでいる。

モダンデザインの先駆的建築家とされるオットー・ワグナーの建築作品も忘れられない。旧市街の北東に位置する郵便貯金局（竣工1912年）、国立歌劇場から環状道路をきざんだ南に位置する地下鉄カールスプラッツ駅舎（竣工1899年）などが、それである。そして、カールスプラッツの駅舎の南に広がるカールス広場に面しては、バロック建築の傑作として名高いカールス教会が建ち、その少し南にはバロック様式のベルヴェデーレ宮殿（竣工1722年）が壮麗な姿を顕示している。

今ひとつ、ウィーン旧市街の南西6キロの地点に「ウィーン歴史地区」よりも早い1996年に世界遺産に登録された「シェーンブルン宮殿と庭園群」がある。その着工は17世紀末、レオポルド1世の狩猟用別荘の建設にさかのぼる。それが18世紀なかば、マリア・テレジア在位の時代（1740～1780）に、ロココ様式の宮殿として一応の完成をみた。その広大な敷地には、世界最古の動物園などが併設されている。

3. 現代ウィーンにおける「世紀末」の残照

ここまで、世界遺産に登録された建築の様式にくわえて着工や竣工の年代を紹介してきた。このことには少し理由がある。というのも、その年代を見ると、ほとんどが19世紀なかばから20世紀初頭に集中しているからである。

そこで思い出すべきは、「ウィーン」が、しばしば「世紀末」という表現と組み合わせで話題にのぼるという事実である。ここでいう「世紀末」は、19世紀なかばから1938年におけるヒットラードイツによるオーストリア併合までを指している。

まず、フランスをはじめヨーロッパ各地で、いわゆる「1848年革命」が起こった。それは19世紀における市民革命とは異なり、産業革命の進展で数と力を増大させた労働者主体の革命である。同時にそれは、ウィーン会議（1814～1815）が打ち立てた、フランス革命以前の状態への復古を意味する「ウィーン体制」の事実上の崩壊をもたらした。

オーストリア帝国も、その影響を被った。皇帝フェルディナント1世の退位に伴う著しい混乱のなか、弱冠18歳のフランツ・ヨーゼフ1世（在位：1848～1916）が即位する。ハプスブルク帝国の「実質上、最後の皇帝」⁹が誕生したのである。

その皇帝フランツ・ヨーゼフは、きわめて規則正しい生活を旨とする勤勉な人物であった。しかし同時に、その性格には、つぎのような特徴がありもしたらしい¹⁰。

とにかく新しいものを取り入れたり変えたりすることが嫌いだった。……技術的なことに対してはことに強い拒否反応を示した。……電話や汽車、ことに自動車などには価値を認めていなかった。電灯は目に悪いと言ってつけなかった。

そんな皇帝の治世は、しかし、ハプスブルク帝国の衰退過程にほかならなかった。1859年にロンバルディアを失い、1866年に対プロイセン戦争に大敗すると共にベネチアを失う。そして翌1867年、帝国はオーストリア帝国とハンガリー王国に二分されるに至る。

それだけではない。1848年革命のなかで、それまで抑圧され、適切な住宅の確保さえままならなかった、とくにウィーンの労働者をはじめとする貧しい市民たちの不満が噴きだす。そこで皇帝は1857年、ウィーンの都市改造に着手せざるをえなくなった。

中世より堅持してきた都市を取り囲む市壁と稜堡を取り壊し、濠を埋め立て、それまで都市防衛上から一切の建築行為を禁止してきた幅500メートルに及ぶ帯環状のグラシーを一転して市街地として建設、整備するもので、いわゆるリングシュトラッセ（環状道路）の建設である¹¹。

このことには、前項の注（8）で触れたとおりである。そしてこのころから、この項の冒頭に示唆した「ウィーンの世紀末」が始まる。この時代のウィーンは、多様な文化の領域で、20世紀に大きな影響をもたらす新しい潮流を生み出した。その分野は美術、建築、音楽、演劇、文学、哲学・思想、自然科学、医学・精神分析、経済学などに及ぶ¹²。

それは、13世紀から700年近く、中欧を支配したハプスブルグ家の威信が、1848年革命を契機に揺らぎ始めた結果にほかならなかった。とくに1867年における帝国の二分以降、オーストリアは一層の政治的な混乱と退廃の時代を迎える。

こうした状況のもと、人々の政治への関心は極度に薄れていった。それに対する一種の代償として文化への関心が高まりだしたのである。

しかも当時のウィーンは、それまでの広大な帝国から多様な文化を身につけた人々が集まり住んでいた。いわば「多文化共生」というか、異文化に寛容なコスモポリタン都市であった。このことに関連して、たとえばジャーナリストのアーサー・J・メイなどは、「(19世紀末の)ウィーンはドイツ人の町ではない」と言い放っている¹³。そこではドイツ語以外に、スラブ語、ハンガリー語、イタリア語、ボヘミア語、ポーランド語、チェコ語など、いろんな言語が用いられた。

さらにオーストリア帝国全体に視野を広げると、1910年当時の民族構成は、ドイツ人をはじめ、ハンガリー人、チェコ人、スロバキア人、クロアチア人、ポーランド人、ルテニア

(ウクライナ)人、ルーマニア人、スロベニア人、イタリア人など、10を超えていた¹⁴。

こうした、多様にして異質な要素の出会いと相互刺戟が、新しい文化を生み出す環境を醸成したのである。

むろん現代のウィーンでは、誰もがドイツ語を話す。民族構成そのものも、90%はドイツ人が占めるようになった。しかし、この項で見たように、ほぼ円形の旧都心を取り囲む環状道路を周回してみると、そこには今も建築様式に投影された多様な要素の共存が留保されている。

こうした建築への過去の様式の場合当たりの選択と引用は、ときに「幼稚だ」と言われる。しかし、多様な要素を自由かつ奔放に取り入れた「世紀末ウィーン」の精神の現れでもある。そういう意味においては「21世紀はじめのウィーン」にも、多様性を許容する精神が脈々と受け継がれていると考えることができる。

4. ゲルマンとラテンの「合いの子」都市

そんなウィーンを、半年間の研修先に選んだもうひとつの理由がある。先輩のオーストリア学者の、つぎのような一言に触発されたのである。

「ドイツ語圏だけれど、プロテスタントのドイツと違って、宗教はカトリック。治安はいいし、気楽で楽しい、白ワインの美味しい所ですよ」

この言葉を耳にしたとき、とっさにイメージしたのは、つぎのような思いであった。「なるほど、ゲルマンとラテンの『合いの子』なのか。そういえばオーストリアはドイツとイタリアの間に、はさまれているなあ」

むろん、これは勝手な思い込みに過ぎない。しかし、実際にウィーンに住んでみて、そのことの意味が徐々に理解できるようになった。

到着した4月初旬の空気は肌寒かった。が、街路樹は新芽を吹き、花壇の花や桜などの花樹は満開。旧都心の南西に位置する広大な芝生のフォルクス庭園、環状道路をはさんで西側の市庁舎前の広場などを散歩するのは、きわめて快適であった。

ただ散歩するだけではない。4万平方メートルの広さを誇る市庁舎前の広場では、いろんな催しが行なわれるのである。

たとえば4月には、オーストリア南東部に位置するシュタイヤーマーク州の物産展が開催された。民族服を着た老若男女農民が吹奏楽の演奏を披露するなか、仮設の店舗で地元産のワインやソーセージ類などが販売される。そこを訪れて、オーストリアという国の「田舎ぶり」が非常によく理解できた。そしてそこに、ウィーン市民や観光客が集まり、グラスのワインを嗜みながら、春の訪れを共に楽しむのである。

5月には、世界中から前衛芸術家たちが集まってパフォーマンスを競う「ウィーン芸術祭」の開会式が行なわれ、7月から9月までは夏中、誰もが無料で入場できる野外「フィ

ルムフェスティバル」——これには毎年70万人の人が参加するという。

今ひとつ特筆すべきは、1993年以来、毎年開催されてきた市民主催の「ライフ・ボール (Life Ball: 人生の舞踏会)」である。それは「エイズと闘い、生き抜く」ことをめざして、毎年、エイズ救援団体に寄付するための100万ユーロ募金をめざす世界最大規模の「エイズ・チャリティ・イベント」である。

そこでは、エイズ撲滅、ホモセクシュアルを含む人間性の解放をめざして、男女を始め男性同士、女性同士のペアが派手な衣装で踊る舞踏会やパレードが行なわれる。その参加者は、クリントン元アメリカ大統領はじめ、世界的に著名な映画スター、歌手、芸術家、ファッションデザイナー、トップモデルなどを含めて、5万人近くを数える。

ところで、これらの催事では、いずれも真っ昼間から、酒のつまみになる料理と共に、必ずワインやビールが提供される。酔っぱらう人はいない。が、誰もが少し高揚した気分になる。だから、筆者のような一時の訪問者が紛れ込んでも楽しいのだと思う。

そんな気分が、やがて街中に広がっていく。少しでも歩道に余裕のある街路沿いのレストランやカフェは、路上にテーブルと椅子を出して営業を始める。席を埋めるのは家族連れやカップルなどである。そして人々は、正午を過ぎれば、食事の皿だけでなく、必ずといっていいほど、ビールや赤白のワインのグラスを傾け始める。午後3時ともなると、2本目のワインに取りかかる人もいる。ゆったりと寛いだ気分は、短期間のウィーン滞在者にも感染する。で、より本格的にワインを飲みたくなってくる。

そんなときは都心の北西角、ショットtentアの電停から30分足らず、38番の路面電車で終点グリンツィングに行けばよい。童話の挿絵に出てきそうな街に、緑の庭やワイン蔵のあるホイリゲが軒を連ねている¹⁵。ここでは、ウィーン料理とワインやビールが楽しめる。ときに楽士たちがやってくる弾くバイオリンやアコーディオンの演奏を眺めつつ耳を傾け、大勢でおしゃべりしながらの会食はホイリゲならではのものである。

週末など、ホイリゲを出て都心に戻る人々が乗る路面電車では、快い酩酊で快活になった、おもに中年ぐらいの男女が肩を組んで歌を歌っていたりする。やがて誰もが、それに和して、車中に歌声が響きわたることになる。

ただ、飲食店一般に目を転じてみると、ウィーンには、美味しい料理を提供してくれるレストランが非常に少ないという印象を受けた。もとより「料理の美味」に関する評価は、きわめて主観的なものである。だから、一個人が感想を述べても余り意味はない。

そこで、しばしば美食の基準とされる「ミシュランの星」を獲得しているレストランを探してみた。すると、人口173万人の大都市ウィーンに、二つ星の「シュタイヤーエック (Steiereck)」というレストランが、ただ1軒のみ存在することが分かった。

むろん「ミシュランの星」のはらむ客観性にも大いに疑問がある。しかし、2010年現在、ミシュランの星を獲得しているレストランが東京に197軒 (三つ星=11軒)、パリに64

軒(三つ星=10軒), ニューヨークに55軒(三つ星=3軒), ロンドンに48軒(三つ星=2軒), イタリア全土に273軒(三つ星=6軒)ずつ存在している¹⁶。これらと比べると, オーストリア全土で, たった1軒というのは, 余りにも少ないと言うべきであろう。

一方, ウィーンのレストラン状況を, 世界最大規模の「旅行口コミサイト」を自称する「トリップアドバイザー (<http://www.tripadvisor.jp/>)」のデータから推測してみる。すると2012年3月現在, まず同サイトが数え上げるウィーン市内のレストラン総数は1,192軒である。ただ, 実際に登録され, サイト上に表示されるのは678軒に限られている。

つぎにトリップアドバイザーは, レストランが提供する料理を, つぎの37種にカテゴリー化して, それぞれの軒数と, 個々のレストランに関する口コミ情報を紹介している。

「アイルランド」「アジア」「アフリカ」「アメリカ」「イタリアン」「インド」「カフェ(軽食堂)」「カリブ海風」「ギリシャ」「クレオール風」「コーヒー紅茶とパンの軽い朝食」「ステーキハウス」「スペイン」「スープ」「タイ」「デザート」「デリカテッセン」「ドイツ」「バーベキュー」「ピザ」「フレンチ」「ベジタリアン」「ベトナム」「ベーカリー」「メキシコ」「中華」「中近東」「北米・南部」「和食」「地中海風」「多国籍」「寿司」「居酒屋」「東欧風」「無国籍」「英国」「西洋風」

その結果には, 非常に興味深いものがある。詳細には立ち入らないが, まず目につくのは, ウィーンで最多のレストランが, 総数678軒の44%を占める268軒の「西洋風」という, 曖昧なカテゴリーで括られている点である。これについて多いのが, 14%を占める95軒の「イタリアン」で, 以下, 58軒の「アジア」, 48軒の「多国籍」, 45軒の「カフェ(軽食堂)」, 35軒の「中華」と「居酒屋」が続く。そして, そもそもそこには「ドイツ」「オーストリア」といったカテゴリーは存在しないのである。

さて, そこで……。世間話のなかでは, しばしばドイツ(ゲルマン)人の気質は「勤勉で真面目で頑固。料理は一般にまずい」などと言われる。それに対してイタリア人に代表されるラテン気質は, その対極にあつて「明るくて陽気。美食への関心が強い」といった捉え方がなされがちである。

いうまでもなく, これらの世評に客観性を伴った根拠はない。しかし, ドイツやイタリアを旅行した経験のうえに, ウィーンでの生活を重ねてみると, そこでの人々の生活感に, これらドイツ的要素とイタリア的要素が見事に混交しているという実感が呼び起こされる。

そんなことを考えていたところ, オーストリア生まれでユダヤ系の作家シュテファン・ツヴァイク(Stefan Zweig: 1881~1942)が, 同じオーストリア生まれの詩人・作家のフーゴ・フォン・ホーフマンスタール(Hugo von Hofmannsthal: 1874~1929)について, つぎのような言葉を残したという記述に出会った。

四分の一が上部オーストリア人で、四分の一がウィーン人、四分の一がユダヤ人、あとの四分の一がイタリア人であるホーフマンスタールは、こういう混血によって、どんなに新しい価値が生まれ、どれほどの繊細さと幸運な想像もつかぬことが、おこるものであるかを示している。散文であれ、詩であれ、彼の用いた言葉には、おそらくドイツ語の到達できた最高の音楽性があり、ドイツ精神とラテン精神のハーモニーがある。……(さまざまなもの)を受け入れ、吸収し、精神的融和によって結合し、不協和音をハーモニーに解決することなどは、まったく変わらないウィーンのコールドであった。¹⁷

この項の表題に記した「ゲルマンとラテンの『合いの子』都市」という表現は、もしかするとツヴァイクの思いをウィーンという都市に流れる空気に敷衍したものだと考えられるかもしれない。同時に、それがそのままウィーンという都市の持つ魅力となっている。

6. 19世紀以来の路面電車が「いま新しい」

前項で述べたように、路上で食事やワインが楽しめるのは、ウィーンの路上を走る自動車が少ないからであろう。これは滞在中、めったに交通渋滞に出合わなかった体験がもたらす実感でもある。

いうまでもなくウィーン市民の自動車保有台数は、決して少なくない。ウィーン市の統計¹⁸によると、2010年現在の保有自動車台数は約67万台、人口2.6人に1台の割合である。しかも、市域面積は414平方キロの広さを誇るが、相当部分が、いわゆる「ウィーンの森」やドナウの水面である。だから、どちらかというとな建築物が稠密に建つ市街地の面積は余り広いとはいえない。にもかかわらず、そこには、ほとんど自動車なんか不要だろうと思えるほど、公共交通が巧みに整備されている。

それらのうち、ウィーン市交通局 (Wiener Linien) が経営している交通機関には路面電車 (Straßenbahn) と地下鉄 (U-Bahn) と市バス (Autobus) がある。

まず、路面電車の路線は、ウィーン市街を縦横無尽に走っている。その淵源は1865年における馬車鉄道にさかのぼる。それが1883年に蒸気を動力とするものになり、さらに1897年に電化されるとともに、経営主体が市に移った。

以来、車両のデザインは、さまざまな変転を繰り返した。最近では、グレーの低床式新型車両が増えている。しかし、なかばは上半分を白色、下半分を赤色に塗った、かわいらしい電車である。その路線は33系統あり、総延長は180キロ余り。毎日の延べ運行距離は地球一周分の4万キロにのぼる。それが、今なお市民の足として重宝されている。

くわえて6系統の地下鉄 (総延長: 74.2キロメートル) と100路線近くを数える市バスが運行している。

これらを上手に使い、400平方キロメートル余りの市域のほとんどすべての場所に容

易に行きつける。しかも、料金が安い。1回乗車券は2ユーロ前後だが、1週間14ユーロ、1か月49.5ユーロ、1年間449ユーロの定期券を買えば、期間内なら何度でも市内の公共交通に乗れる。

その結果、人々の多くが、ふだんの暮らしに、つい公共交通を使うことになる。筆者自身も、半年間の滞在中、毎月の初日に1か月券を購入し、好んで路面電車に乗った。そして、その6か月の間に、路面電車と地下鉄の全路線に乗り、すべての終点を踏破した。その結果、窓からの風景を眺めながら、初めて通る市街を電車でゆっくり移動するのは、それ自体が面白くて楽しい観光の仕方であることが、よく分かった。

それだけではない。これらの交通機関を利用することで、一国の首都とは思えない豊かな自然資源の恩恵に浴することができる。そこで、つぎに旧市街の中央にそびえるシュテファン寺院を起点にして容易に訪れることのできる場所のいくつかを列挙しておく¹⁹。

自然保護区ロバウ

シュテファン寺院から地下鉄と市営バスでウィーンの北東へ約30分で自然保護区ロバウに到着する。それは、1995年に国立公園に指定されたドナウアウエンの一部で、22平方キロがウィーン市内に属している。ここの原生林にはイノシシ、ビーバーはじめ、さまざまな小動物や昆虫が生息している。事前予約をすれば、季節ごとに魅力あるテーマを掲げた、半日程度のガイド付き自然体験ツアーに参加できる。鬱蒼と茂る大自然に踏み込むと、そこが大都市と至近距離にあることを忘れてしまう。

ドナウインゼルのビーチ

オーストリアには海がない。しかし、シュテファン寺院から地下鉄に乗って6分で延長42キロのビーチに行ける。本来はドナウの氾濫に伴う水害防止のために、1970年代以降に造成された人工の島である。それが今では、広大な芝生広場や180万本の樹木に囲まれた自然公園になっている。夏なら、日光浴、水浴、ボート遊び、ビーチバレー、スケート、サイクリングやバーベキューなどが楽しめる。さらに2駅先まで足を伸ばすと、1907年にオープンしたゲンゼホイフェルなど、複数の水浴場が利用できる。

ラインツアー動物公園と「シシーの別荘＝ヘルメスヴィラ」

「ウィーンの森」の魅力を凝縮したこの動物公園にも、ステファン寺院から地下鉄と市電を乗り継いで40分で行ける。25平方キロの公園内には、樹齢400年を超えるカシヤブナの森が茂り、シカやイノシシ、キツツキ、サンショウウオなどのほか、3種類のコウモリが放し飼いにされている。もとはハプスブルグの狩猟場だった場所が

1919年、市民に開放され、1941年に自然保護区になった。朝8時から18時まで、6つの門が開かれ、入場料は無料。ヘルメスヴィラのレストランのほか、2軒のレストランではウィーン料理が楽しめる。

都市内のスキー場ホーエヴァントヴィーゼ

1966年、当時のウィーン市長が、オーストリアで初めて人工降雪機と夜間照明を取り入れて開設した人工スキー場で、リフトもある。ゲレンデは、1986年にワールドカップのパラレルスラロームが行われた本格派である。にもかかわらず、シーズン中は9時から21時まで。スキーを持参すれば、1回1ユーロのリフト代だけで本格的なスキーが楽しめる。ここにもシュテファン寺院からの地下鉄とバスを乗り継いで40分で行ける。

ちなみに、すでに触れたウィーン市交通局経営の路面電車・地下鉄・市バスの、約2ユーロの1回乗車券は、一方向1時間以内なら乗継可能である。だから、上記4つの施設で「都市内の大自然」に出会うのに必要なのは、往復4ユーロの交通費だけである。

これらに加えて、ウィーンとオーストリア各地をつなぐオーストリア連邦鉄道の路線も大いに利用価値がある。なかでも、そこで発行されるフォアタイムス・カード (Vorteliscard) という、鉄道料金が45%も割引される優待制度は、旅行者のみならず、同国の国民に広く利用されている。旅行者の場合、乗車券売り場にパスポートと顔写真と代金99ユーロ90セントを持参し、簡単な申込書に必要事項を記入して提出すれば、すぐに仮IDを発行してくれ、2、3週間後には正式のIDカードが住所地に送られてくる。有効期間は1年間——ウィーン市内のみならず、オーストリアの公共交通は利用者に非常に親切である。

付 記

本小論は、2011年度佛教大学教員研修の成果のひとつである。

謝 辞

この研究は、ウィーン大学 (Universität Wien) 文献学部 (Kulturwissenschaftliche Fakultät) 東アジア研究所 (Institut für Ostasienwissenschaften) に、その所長セップ・リンハルト (Sepp Linhart) 教授の好意により、客員教授としての滞在を許可されたことによつて可能となったものである。また、滞在中、同大学のローランド・ドメーニク准教授、ブランドル紀子講師、アンゲラ・クラーマ講師、「第三の男」博物館のカリン・ホフラ館長には、ひとかたならぬお世話になった。記して深甚の謝意を表したい。皆さん、ありがとうございました。

注

- 1) 世界経済フォーラム (World Economic Forum) は、ジュネーヴに本部を置く非営利財団で、スイスのダボスで開催される年次総会 (いわゆる「ダボス会議」) の主催団体である。知識人やジャーナリスト、経営者や政治指導者が集まるダボス会議は、世界が直面する重大な問題について議論する場となっている。
- 2) World Economic Forum (2009) *The Travel & Tourism Competitiveness Report 2009: Managing in a Time of Turbulence*, Geneva Switzerland
- 3) 国土交通省観光庁 (2011) 『平成 23 年版 観光白書』日経印刷株式会社
- 4) オーストリアの世界遺産を登録年順に列挙すると、つぎようになる (カッコ内は登録年)。
ザルツブルク市街の歴史地区 (1996 年)
シェーンブルン宮殿と庭園群 (1996 年)
ザルツカンマーグート地方のハルシュタットとグッハシュタインの文化的景観 (1997 年)
ゼメリング鉄道 (1998 年)
グラーツ市歴史地区 (1999 年)
ヴァッハウ渓谷の文化的景観 (2000 年)
ウィーン歴史地区 (2001 年)
フェルテー湖、ノイジードル湖の文化的景観 (2001 年)
- 5) そのカテゴリー別の内訳は、文化遺産が 704 件、自然遺産が 180 件、複合遺産が 27 件である (2011 年現在)。
- 6) ウィーン歴史地区に含まれる主な歴史的建造物を列挙すると、つぎようになる。
ホーフブルク宮殿、シュテファン大聖堂、ウィーン大学、ウィーン国立歌劇場、ベルヴェデーレ宮殿、オーストリア議会議事堂、ウィーン市庁舎、カールス教会、ブルク劇場、自然史博物館、美術史美術館、カールスプラッツ駅舎、郵便貯金局
- 7) 伊藤哲夫(2010)「ウィーンの都市空間と建築」『ウィーン——多民族文化のフーガ』大修館書店、p.56
- 8) 1857 年、いまだ中世都市の面影を残すウィーンでは大規模な都市改造が行なわれた。フランツ・ヨーゼフ 1 世 (在位: 1848 ~ 1916) の治世のもと、みずから近代都市に脱皮することを目指して、旧市街をほぼ円形に取り囲む市壁と堀を放棄して、幅 60 メートル近い環状道路が建設されたのである。
- 9) いうまでもなく「最後のオーストリア帝国、ハンガリー国王」は、1916 年におけるフランツ・ヨーゼフの死後、29 歳で即位したカール 1 世である。しかし、その 2 年後の 1918 年、チェコスロバキア、ハンガリー、ポーランドなどが共和国宣言をして、あえなく帝国は崩壊する。という意味においてフランツ・ヨーゼフを、ここでは「実質上、最後の皇帝」と表現した。

- 10) ジョンストン, W.M., 井上修一・岩切正介・林部圭一 (共訳, 1986) 『ウィーン精神 I : ハプスブルク帝国の思想と社会 1848 - 1938』みすず書房, pp.48-49
- 11) 伊藤哲夫 (2010) 前掲論文, p.94。なお, 文中の「市壁と稜堡」は「バスタイ」, 「グラシー」は「斜堤」という意味である。
- 12) 「世紀末ウィーン」に輩出して, 20世紀の芸術・学問などに多大な影響を及ぼした巨人は枚挙にいとまがない。名前と生没年をランダムに記しても, 画家のグスタフ・クリムト (1862 ~ 1918) やエゴン・シーレ (1890 ~ 1918), 建築家のオットー・ワーグナー (1841 ~ 1918), オーストリアの第2国歌ともいわれる「美しく青きドナウ」の作曲者ヨハン・シュトラウス2世 (1825 ~ 1899), 哲学者のルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン (1889 ~ 1951), 作家のヘルマン・ブロッホ (1886 ~ 1951), 医師にして劇作家のアルトウル・シュニッツラー (1862 ~ 1931), 「労働価値説」に対置して「限界効用説」を唱えた経済学者のカール・メンガー (1840 ~ 1921), 「遺伝の法則」を発見したグレゴール・ヨハン・メンデル (1822 ~ 1884), 物理学者のエルンスト・マッハ (1838 ~ 1916), ABO式血液型を発見した医師のカール・ラントシュタイナー (1868 ~ 1943), 精神分析学を打ち立てたジグムント・フロイト (1856 ~ 1939) といった具合である。
- 13) May, J. Arthur, (1968) *The Habsburg Monarchy 1867-1914*, W. W. Norton & Co., New York
- 14) 加藤雅彦 (2006) 『ハプスブルク帝国』河出書房, pp.118-119
- 15) ホイリゲは本来, ワイン醸造者が, 自分の畑で収穫したワインの新酒を提供する, 夏から秋にかけての数か月間だけ, 入口に松の枝を掲げて営業する店であった。そこで出すのは本来ワインだけだった。何かを食べながら飲みたい人は, 自分で食べ物を持参したものである。それが今日, 大きく変化した。通常のレストランと同様, 料理をはじめ, ビールやソフトドリンクも出すようになった。松の枝を掲げる習慣は残っているが, 多くは一年中営業しているし, 観光客が大型バスで乗りつける店もある。地元の人がワインの新酒を飲みに行く, 昔ながらのホイリゲはほとんど存在しない。
- 16) ここではイタリアのみ, 首都ローマではなくて全国を対象とするデータを提示した。それはイタリアの高級レストランが全国に散らばって存在しているからである。
- 17) 加藤雅彦 (2006) 『ハプスブルク帝国』河出書房新社, p.172
- 18) 資料出所 : <http://www.wien.gv.at/statistik/aktuell.html>
- 19) ここでの記述は, つぎの文献を参考に行っている。
アンゲラ・クラーマ (2012) 「ウィーン, もうひとつの楽しみ方: 原生林からスキーまで」『まほら』(71号) 旅の文化研究所, pp.20-21

ウィーンの 「ものがたり風」観光魅力 後編

高田公理*

Alluring Vienna: In the Mode of a Travel Narrative (Part 2)

TAKADA Masatoshi Yasutaka

要 約

「ウィーンの『ものがたり風』観光魅力（前編）」に続いて、この小論では、つぎのようなトピックを取り上げて、課題に関する考察を続ける。すなわち「音楽と絵画芸術の殿堂が放つ特異な光」「『ウィーン精神』と『世紀はじめのウィーン』」「『世界で一番住みやすい都市』に住んでみる」「『第三の男』ミュージアムと原子力発電所」が、それである。

こうした考察を試みた結果、「ウィーンの『ものがたり風』観光魅力」の焦点のひとつが「相反する資質の共存」にあるという過渡的な結論に達した。その要点の一部は、「ドイツ語圏なのに宗教はカトリック」「ウィーン市街に林立する建築群が醸し出す独特の景観」「ハプスブルグ帝国の旧首都にして自然に恵まれた都市」「けっして美味ではないレストラン料理と新鮮で価値ある料理食材」「多様な文化への寛容と偏狭なユダヤ迫害の歴史」などとなる。そのほか、「きわめて巧みに整備された公共交通」「第二次大戦後の日本と共通する歴史経験」などに触れることで、近い将来、これらの知見を、わが国における、いわゆる「観光立国のための諸施策」に活かす方途を考究する可能性が見えてきた。

1. 音楽と絵画芸術の殿堂が放つ特異な光

「前編」においては、定番の観光スポットには触れずに論を進めた。しかし、ウィーンといえば何よりも音楽、オペラ、演劇などの舞台芸術の盛んな都市である。

まずは、本格的なオペラが鑑賞できる国立歌劇場（Staat Oper）、オペレッタやミュージカルが楽しめるフォルクス・オーパ、ウィーン・フィル管弦楽団の拠点・楽友協会、その隣のコンチェルト・ハウス、ドイツ語圏内最高峰の劇場とされるブルグ劇場などがある。

* 佛教大学社会学部

数多あるカトリック教会に足を運べば、ウィーン少年合唱団はじめ、室内楽やパイプオルガンの演奏なども聴ける。こうした機会は枚挙にいとまがない。

実際、ウィーン観光局ツーリストインフォメーションで聞いた話によると、これら文化施設での催しを楽しむ人の数が、ウィーンでは毎日1万5000人余りに及ぶという。市民も観光客も、ここでは当たりまえのように、さまざまな舞台芸術の鑑賞に出かけるのである。

絵画などを展示する博物館も少なくない。まずは、栄華を極めたハプスブルグ家の王宮——ここでは絢爛豪華な夥しい数の銀器をはじめ、帝国最後の皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の妃エリザベト（愛称シシー）の波乱の生涯などが見られる。

王宮からほど近い場所に美術史美術館がある。美術館といえば、パリのルーブルやオルセー、フィレンツェのウフィッツィなどが話題に上ることが多い。それらに比べると、ウィーン的美術史美術館への注目の度合は、必ずしも高いとはいいがたい。ウィーンといえば、ついオペラやウィーン・フィル管弦楽団に関心が集中するからかもしれない。

しかし、ここには17世紀、バロック時代のスペイン絵画の巨匠ディエゴ・ベラスケスの「薔薇色の衣装のマルガリータ王女」をはじめ、彼女の成長を跡づけた4点の傑作が収蔵・展示されている。

つぎに、絵画史上、特異な光彩を放つ、いくつかの作品を参照しておこう。これらについてはウィーン大学の講師であるブランドル紀子氏に教えられたことが多い¹。

ラファエロ「草原の聖母」(1505)

人間の肉体を象徴するドレスの赤と神の精神を象徴するマントの青が、それらを共に具えていたマリアの存在を描き出す。そのマリアが慈しむ初々しい子供はイエスとヨハネである。幼児の描写に成功した例としては最古に数えてよい。また、その構図も秀逸である。マリアの頭頂と右足の先、左端の洗礼者ヨハネの右足を結ぶ大きな三角形、十字架の頂点とイエスとヨハネが形作る小さな三角形が、みごとな安定感を表現している。この構図に関してラファエロは、レオナルド・ダ・ヴィンチの指導を受けたのだそうである。もっとも、右前に伸ばされたマリアの右足は不自然である。ドレスの下のマリアの身体の様子を納得するのはむづかしい。

ペルジーノ——「異端」の「聖会話」(1492)

「聖会話（サクラ・コンヴェルティオーネ）」とは、幼児イエスを抱くマリアの周囲を数人の聖人が取り囲む、キリスト教絵画のモチーフのひとつである。この作品の場合の聖人は、天国の鍵を持つ聖ペトロ、闘いの剣を持つ聖パウロ、ブルガーダの聖書を持つ聖ヒエロニムス、十字架の洗礼杖を持つ聖ヨハネである。ただ、中央の幼児イエスの顔つきは、なんとも怖ろしげである。マリアと四人の聖人たちの表情が、「こ

のカミの子のおかげで我々は、なんと悲惨な人生を歩まねばならないのか」とでも言いたげな、苦しみと絶望に満ちているのは特異である。通常の「聖会話」の崇高な神々しきは微塵もない。注文主の教会が、無宗教・無信仰で知られた、この大画家の本意の所在を、まるで知らずに買い取っただけらしい。

カラバッチョ「ロザリオの聖母」(1607)

カラバッチョは特異な人であった。きわめて好戦的で、ローマで殺人を犯し、指名手配を逃れて各地を渡り歩き、ついにトスカーナのモンテ・アンジェンターリオで熱病のために、わずか38歳で死んだ。

そのカラバッチョが、ナポリ逃亡中に描いたこの作品は、教会への寄贈を拒否された。無理もない。マリアのモデルは当時のローマの有名な娼婦フィリデで、その子供がイエスのモデルだという。幼子連れの女性信者を押しつけ、ロザリオをもらおうと汚い両手を祭壇に突き出す髭面の乞食男三人の裸足の足裏は汚れて真っ黒。マリアを見上げる聖ドミニクは、ロザリオを両手に下げたまま途方に暮れている。

しかし、光と闇の強烈なコントラストに浮かぶ写実的な人物と臨場感あふれる劇的な画面構成は、ルーベンスなどに高く評価され、最終的にはハプスブルグのコレクションに加えられた。



図1 ラファエロ「草原の聖母」



図2 カラバッチョ「ロザリオの聖母」



図3 デューラー「若い男」(左が表, 右が裏)

デューラー「若い男」(1507)

北方ルネサンスの巨匠の作品。この肖像画の依頼主は、絵が完成すると難癖をつけて、約束の代金を支払わなかったという。そこでデューラーは絵の裏面に、金の袋を抱えて薄気味悪く笑う、乳房の垂れ下がった歯抜けの老婆を描きこみ、紙で覆い、けちな注文主をコケにしたのだそうである。

これらのほかにも魅力ある絵画コレクションは多い。なかでも、16世紀の農民の生活を活写したベルギー人画家ブリューゲル作品の世界最多コレクションの印象は強かった。「雪の中の狩人(1565)」「農家の婚礼(1568)」「バベルの塔(1563)」,そして何よりも「謝肉祭と四旬節の喧嘩(1559)」が、いとも簡単に一覧できる。

今ひとつ、驚かされるのは、17世紀オランダの画家フェルメールの「絵画芸術(画家のアトリエ)1666」である。この作品をめぐって、シュールリアリズムの巨匠ダリは、こんな意味の言葉を残した。

もし世界中で、たった1点の絵画しか残せないのなら、私はフェルメールの『絵画芸術』を選ぶ」「アトリエで仕事するフェルメールを10分でも観察出来るなら、この右腕を切り落としてもいい。

ちょっと大げさすぎると思うが、確かに「絵画芸術」には不思議な力が備わっている。さらに「世紀末ウィーン」を象徴する、いわゆる「分離派」のリーダー、グスタフ・クリムト(Gustav Klimt:1862~1918)、彼を師匠と仰いで実に個性的な作品を残したエゴン・

シーレ (Egon Schiele : 1890 ~ 1918) の作品を収蔵・展示する美術館もある。

こうしてみると「音楽の都ウィーン」は、同時に「絵画芸術の都」としての相貌を併せ持っていることが、あらためて明らかになる。

2. 「ウィーン精神」と「21世紀はじめのウィーン」

ほかにも面白い博物館は少なくない。「音楽館」「病理・解剖学博物館」「葬儀博物館」「フロイト博物館」「『第三の男』博物館」などである。

「音楽館」はモーツァルト、ベートーベン、シュトラウスなど、ウィーンゆかりの作曲家の生涯を分かりやすく展示している。いずれの展示にも好感が持てる。しかし、面白いのは、コンピュータ技術を駆使した体験型展示である。たとえば入館者が、ウィーン・フィル管弦楽団の演奏を映すテレビ画面に向かって指揮棒を振る。すると、その上手下手に反応して、演奏そのものが変化する。こんな展示は見たことがない。

都心からは距離があるが、「軍事史博物館」も興味深い。ここには、第一次大戦のきっかけとなったサラエボ事件の際に、セルビア人青年に暗殺されたフェルディナンド大公夫妻の乗っていたジープが展示されている。

ウィーン大学の敷地内にある「病理・解剖学博物館」は昔、精神科病棟として使われた円柱型の建物である。ここには、世紀末ウィーンの医学・解剖学の成果なのであろう、さまざまな病気に侵された、おびただしい数の身体各部が展示されている。それらを眺めると、病気の影響で人間の体が「ここまで変形するか」という感慨を新たにさせられる。

今ひとつ、ウィーンの葬儀会社バスタトゥンク・ウィーンの附属博物館「葬儀博物館 (Bestattungsmuseum)」も興味深い。この会社は1907年、ウィーン市当局が葬儀サービスを提供する必要性から、当時80社以上を数えた民間の葬儀会社を統合して発足した葬儀会社である。その会社の附属博物館には、葬列に用いられた正装や旗、骨壺や棺桶などが展示されている。

案内してくれた人の話によると、ウィーンの葬式は宗教色よりも、むしろ死者の社会的地位を見せびらかす機会としての意味が大きいという。だから昔は、棺桶などにも死者の威信を示す役割が仮託された。逆に、墓穴の上で底板を開閉させ、死骸だけを下に落とすことで、何度でも使える工夫を凝らした質素で不思議な棺桶もあった。余り豊かとはいえない庶民たちに愛用された模様である。

病気や死をテーマにした博物館を紹介したついでに、市街地の南に位置する広大な中央墓地についても少し触れておこう。それは、路面電車の停留所で4区間にわたる面積240ヘクタールの広さを誇っている。随所に巨木が林立し、その間に芝生や花壇をちりばめた墓地は、散歩するのに快適な公園のような風情を漂わせている。

その一角、「第32区A」と名付けられた区画には、名だたる音楽家をはじめ、さまざま

まな領域で偉業を達成した人々の墓が集めてある。モーツアルト、ベートーベン、シューベルト、ブラームス、ヨハン・シュトラウスをはじめ、建築家や鉄道技術者などである。

むろん、ウィーン以外でも、興味を引かれる偉人の墓を訪れる人は少なくない。しかし、ウィーンの中央墓地は、少なくない観光客を呼び込む一種の観光スポットの様相を呈している。それに、先に触れた「病理・解剖博物館」や「葬儀博物館」などを含めると、ウィーンという都市のイメージの深層には「病や死」への想像力を喚起する何かが秘められているような気がする。

その背景には、もしかすると17世紀に、おびただしい数の死者を現出させたペスト流行の歴史が影を落としているのかもしれない。むろんペスト流行に伴う被害は、ひとりウィーンに限ったことではない。それはヨーロッパの都市に普遍的な体験であった。ヨーロッパの都市の多くに、いわゆる「ペスト記念塔」のあることが、そのことを物語る。

ただ、ウィーンの場合は、グラールベンという最も繁華な目抜き通りに、バロック時代の典型的な構築物とされる壮麗なペスト記念塔が偉容を誇っている。そしてそれが観光名所のひとつになっている。このような都市は必ずしも多くない。都市の記憶に、ペストの恐ろしさとそれを克服した際の喜びが、色濃く刻印されているということなのであろう。

不思議はない。とくに1679年におけるペストの流行の際には、膨大な数のウィーン市民が犠牲となった。そのことに関して『ウィーン ペスト年代記』²は、つぎのように記す。

1679年のペストによる死者の正確な数は、今日ではもはや確定されえない。……人によってそのあげる数がはなはだ異なるからである。(実際、記録に残る最大ものは15万人近い数字を挙げている)……これらの数には……かなりの誇張が見られるとあってよいが、それもペストの流行を、そしてまた多くの死体を目のあたりにした同時代人の激しい恐怖心を考えるならば、十分理解できよう。……(当時の)ウィーンの都市部や周辺部の人口は、17世紀末でおよそ8万人から10万人だった。……(そして)1973年に学位論文を書いたF. オルボルト(によると)……死者は少なくとも1万2000人になろう、と述べている。

こうした未曾有の災厄を乗り越えた1686年、当時の皇帝レオポルド1世は、ペスト流行の終焉を神に感謝してペスト記念塔を建造した。

ただ、その直後、ウィーンは20万人を越えるトルコの軍隊に包囲される。当時の城壁内の人口はわずか2万4000人——ペストに続いて、文字通り危急存亡の時を迎えた。こうした明暗が交互に訪れる歴史経験を、ほかの都市に比べて何度も繰り返して経験してきたからであろうか。この都市の人々の生活感には、徹底して人生を楽しむと同時に、病や死への恐れを内に秘めた気風が、ふたつながらに底流しているように思われる。

そのことを、再び加藤雅彦(2006, 前掲書)³を参照すると、つぎのように捉えている。

世紀末ウィーンの市民生活をみるに、その一つの特徴は、楽しむことに最大の価値をおく生き方が支配的であったことである。そしてその一方では、生への倦怠と厭世の空気もただよっていた。……(そうした)享楽の空気のなかで、ペシミズムに傾く作家や詩人が少なからずいた。……代表的なのは、アルトゥール・シュニッツラー(1862～1931)や、フーゴ・フォン・ホフマンスタール(1874～1929)である。シュニッツラーは、デカンダンスと愛欲の世界、そしてその結末としての死を通して、はかなくも、うつろいやすい人生を甘味に描いた。また、ホフマンスタールも、彼独特の繊細な感覚を通して、生への倦怠と憂愁を巧みにとらえ、死への憧れを美しくうたった。

そういえば、世紀末ウィーンに生きた、精神科医師にして精神分析学の創始者ジグムント・フロイト(Sigmund Freud: 1856～1939)にも、こうした両面性が秘められている。シュールレアリズムなど、20世紀の芸術や文化に巨大な影響を及ぼした彼の業績は「性理論」「自我・エス・超自我からなる精神構造論」など多岐にわたる。そして晩年には、エロス(生の本能)に根ざすリビドー(生のエネルギー)理論に加えて、人間の精神に内在するタナトス(死の本能)に言及するようになった。

そんな人物の住居を保存しつつ、彼の写真や遺品を展示しているのが「フロイト博物館」である。規模は大きくないが、訪れてみて入館者の多さに驚かされた。

こうして、さまざまな博物館を訪れると、ウィーンの気風の深みのようなものが見えてくる。そのことを、前掲の加藤雅彦(前掲書)とは少し異なった視点から描写した、つぎのような文章がある⁴。少し長くなるが、それを引用しておく。

「アトランティック」という、タイタニックの沈没をテーマにした映画がある。1929年に公開された、ドイツ最初のトーキー映画である。主演は、のちに「未完成交響楽」などの作品で日本でも人気を博したウィーン生まれのウィリー・フォルスト。歌手でもあった彼は作中、広く知られるようになる、こんな歌を歌った。

♪ ワインはこのころが 我らはいなくなる
だから愉快的時間が続く間は 人生を満喫しよう

ヨセフ・ホルニクの歌詞に、ルートヴィヒ・グルーバーが曲をつけて1896年に誕生したこの歌を、「カフェー文士」として知られたペーター・アルテンベルグが絶賛

した。いわく、「もっとも感動的で含蓄のあるウィーンの歌で、ウィーン人の可憐でいじらしくて軽々しい生き方、そして、いつか死んでしまうという悶々たる思いをよく表現している」と。

確かに「21世紀はじめのウィーン」は、陽気にワインを飲みながら「世紀末ウィーン」が創出した多様な芸術・文化とその継承を楽しんでいる。しかし、その深層には、ペストをはじめ、中世から近世に蔓延した致命的な病気、オーストリアを巻き込んだ戦争、そこに跋扈した多様な死の相貌への怖れが、密かに投影されている。

3. 「世界で一番住みやすい都市」に住んでみる

ここまで、ときにオーストリア全土に言及しつつ、ウィーンの観光魅力について、さまざまな視点から考察を加えてきた。そのウィーンが、ニューヨークに本拠を置く総合コンサルティング企業マーサー社 (Mercer Ltd.) の『2011年世界生活環境調査 (Quality of Living reports-2011edition)』⁵において第1位に選ばれた。その根拠は、世界の215の都市を39の指標に基づいて数値化したデータに基づいている。個別の指標は省略するが、比較のための枠組は、つぎに列挙する10個のカテゴリーにまとめられる。

政治・社会環境 (政情, 治安, 法秩序など)

経済環境 (現地通貨の交換規制, 銀行サービスなど)

社会文化環境 (検閲, 個人の自由の制限など)

健康・衛生 (医療サービス, 伝染病, 下水道設備, 廃棄物処理, 大気汚染など)

学校および教育 (水準, およびインターナショナルスクールの有無など)

公共サービスおよび交通 (電気, 水道, 公共交通機関, 交通渋滞など)

レクリエーション (レストラン, 劇場, 映画館, スポーツ・レジャー施設など)

消費財 (食料, 日常消費財の調達状況, 自動車など)

住宅 (住宅, 家電, 家具, 住居維持サービス関連など)

自然環境 (気候, 自然災害の記録など)

ところで、本小論の冒頭に記したように、オーストリアは『旅行・観光競争力レポート2011』においても最高位に近い世界第4位に位置づけられている。実際、オーストリアを訪問する観光客は年間2,136万人で、世界の国際観光客数の2.4%を占め、それに伴う観光収入も、同国のGDPの5.2%を及んでいた。

にもかかわらず、オーストリアを訪問する日本人観光客の数は、2009年の場合、20万人たらずに過ぎない。同じ年に、主な外国⁶を訪問した日本人の数が2,160万人であるこ

とを考えると、そのシェアはわずか0.9%に過ぎないことが分かる⁷。

もとより、オーストリアは遠い。だから日本人の多くが、より近くの中国・韓国・香港などのアジア諸国に出かけがちなのは当然である。だからだろう、これら2国と1地域への訪問日本人数は760万人弱で、全体の34%を占めている。しかし、より遠いアメリカに292万人、さらに遠いヨーロッパのフランスに70万人、ドイツに54万人が訪問している。とすると、オーストリアを訪問する日本人の数は、いかにも少ないように思われる。

べつだん筆者が、オーストリアへの日本人観光客を増加させる役割を果たさねばならない理由はない。しかし、半年間の滞在を振り返ってみると、オーストリアとその首都ウィーンの秘めているさまざまな魅力を紹介したいと考えても不思議はあるまい。しかも、この国とその首都は、「旅行・観光競争力」や「生活環境」といった、より普遍的な価値に関する比較調査においても非常に高い評価を受けているのである。

ただ、その魅力は、訪問すれば、すぐに関知できるという性質のものではないように思われる。最近、公刊された書物の冒頭にも、似たようなことが記されている。つまり「思うにウィーンというのは、何の予備知識もなく訪れて、すぐに魅力がわかる町ではない。少なくとも私にとっては、そうではなかった⁸」という。

もとより、同書の著者の意図は「ウィーン・フィルの『過去をめぐる』歴史散歩」にある。しかし、それ自体が芸術作品のようなイタリアの古都、ベルリンやパリなどのメトロポリスなどと比べて、一目でそれらを凌駕する魅力がみつきりがたいという意味のことを記している。このことは、わずか半年とはいえ、同地で過ごした筆者の感想とも一致する。

つまり、こうしてウィーンの、さまざまな相貌を眺めてみると、そこを2、3日の駆け足で通り過ぎるのは、なんとしてももったいない。むろん誰でも、使えるお金と時間には限度がある。しかし他方、訪れる都市ごとにふさわしい過ごし方がありもする。どうやらウィーンは、観光名所だけを短期間に周遊して楽しむ街ではないように思われる。

理由のひとつは、この街の、むしろ欠点に由来するのかもしれない。というのも、エスニック料理には優れた店があるのに、おいしい西洋料理店を見つけるのが容易ではないように思われるのである。

ところが、である。海のない国ゆえ海産物の入手はむづかしいものの、牛肉を除いた豚肉、鶏肉、羊肉、バターやチーズといった乳製品、ベーコンやソーセージやハム、そして野菜や果物などは新鮮で品質が良く、非常に適切な価格で手に入る。しかも、日を定めて、農村地帯の生産者が自らの産品を商う市が、市内の随所に立つ。それらに足を運び、うまそうな素材を仕入れ、自分で調理し、キレのいいワインと共に食事を楽しむ。こんな風にして過ごしてみると、一転してウィーンは「美食の都」に姿を変える。

だからこそ2011年、ウィーンがマーサー社「世界生活環境ランキング」で「世界で一番住みやすい都市」に選ばれたのだろう。だから、1週間でもいい。ここで「住んでみる旅

と観光のかたち」を体験してみよう。そのために、これほどふさわしい都市は、ちょっとほかにはありえないという気がする。

4. 「第三の男」ミュージアムと原子力発電所

それだけではない。オーストリアと日本との間には、ある種の類似性がある。それは第二次大戦後、ともに連合国の支配下に置かれて苦難の戦後期を味わったという共通体験である。いや、日本を占領したのはアメリカ1国であった。それに対してオーストリア、とくにウィーンは、米・英・仏・ソ連の4か国に分割統治され、戦後におけるその独立は、1952年に独立を回復した日本より3年も遅い1955年にまでずれ込んだ。その間、ウィーンという都市は、折から激しくなった東西冷戦の現場として蹂躪され続けたのである。

そうした状況下のウィーンを見事に描き出した名画がある。イギリス人作家グレーム・グリーン⁹の脚本を、監督キャロル・リードが現実感に満ちた映画として制作した「第三の男」である。それに、いまだ若かったオーソウン・ウェルズはじめ、ジョセフ・コテン、アリダ・ヴァリ、トレバー・ハワードなどの名優たちの名演技と世界的に流行したアントン・カラスの演奏するチターの名曲「ハリー・ライムのテーマ」が強烈な魅力を添えた。

この映画は、1949年にイギリスで初公開され、同年にカンヌ映画祭のグランプリを、翌1950年に米国、ドイツ、オーストリアなどで封切られてアカデミー賞（白黒撮影賞）を受賞した。その後も1999年には英国映画協会の手でイギリス映画ベスト100第1位に選ばれる。つまり、全世界で成功を収めた「第三の男」は映画史を飾る名画なのである。

ところが、ロケ地のウィーンでの評価は低かった。この映画が、1938年の「併合」でドイツの一部となったオーストリアの、第二次大戦後に、なかば廃墟となったウィーンで撮影されたからである。そのため1950年に、いざ映画がウィーンで封切られると、オーストリア人は強いショックを受けた。ウィーンの街はきたならしい風景を露わにし、そこに住む人々は、ゴミのような食物を食べ、闇取引に血道をあげ、警察への協力を拒む墮落した人間として描かれていたのである。だから新聞も、この映画を酷評した。その結果、わずか数週間で上映が打ち切られるに至る。

ただ、それから5年、1955年にオーストリアは独立国として再生した。さらにその8年後、1963年にドイツ語バージョンの「第三の男」がリリースされる。このころには大戦の記憶も遠のき、ようやくウィーンでも「第三の男」が、ある種のカルト映画として認められるに至ったようである。しかし、今なお「第三の男」の世界的な大ヒットに、ウィーンの人々は釈然としない思いを抱いているのかもしれない。

さて、同じ敗戦国の日本も、オーストリアより少し早い1952年、サンフランシスコ講和条約の発効で独立を回復する。その年に「第三の男」が日本で公開されて大成功を収めた。

理由の第一は、この映画芸術が優れていたからにほかならない。しかし、外国の軍隊に

占領されたという同じ経験を持つ日本の観衆が、ウィーンと日本の状況を重ね合わせた結果でもある。同年の『キネマ旬報』は「第三の男」を外国映画ベストテンの第2位に選び、1999年には外国映画オールタイムベスト100の第1位に選んでいる。日本では「第三の男」が大成功を収めたのである。

そんな「第三の男」の記憶を伝えるミュージアムが、ウィーンにある。2人の映画愛好家¹⁰の個人コレクションを基に2005年にオープンしたものである。そのミュージアムについて、館長のカリン・ホフラ氏は、つぎのように語ってくれた。

その構想から完成まで、すなわち、コンセプト、デザイン、展示、マーケティング、図録・ホームページ制作、そして来観客への対応を、すべてを私たち二人が担ってきました。最初それは趣味として始まったのですが、今では生涯の事業になったというほかありません。合計13室に展示されている2000点に及ぶ収蔵品は、ロケ中に使用された脚本、アントン・カラスが演奏したチター、初公開の際の映画ポスター、スチール写真、プログラム、400曲を超えるテーマ曲のカバーバージョン、予告記事など、すべてオリジナルです。そして収集場所は、アメリカ、アルゼンチン、オーストラリア、デンマーク、イギリス、日本、スウェーデン、スペイン、メキシコ、ニュージーランドなど20か国以上におよんでいます。

筆者のウィーン滞在中、このミュージアムに「第三の男」の舞台となった戦禍の傷跡も生々しいウィーンを記録した資料の展示室が新たにオープンした。そこでは「第三の男」の記憶を通して、占領下ウィーンの状態とオーストリアの現代史を展望することができる。それを同じ時代の日本の状態の記憶と重ね合わせて眺めると、ユーラシア大陸の西の端に近い場所で、奇しくもよく似た運命に翻弄されたオーストリアとウィーンへの親しみの感情が沸き上がってくる¹¹。

今ひとつ、思い出すべきは、ウィーンの西50キロに建つ原子力発電所である。それは、2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故の洗礼を受けたわれわれ日本人に、強い印象をもたらす存在だと思う。そこで、ウィーン滞在中が終わりに近づいた2011年9月12日、筆者はツベンテンドルフ(Zwentendorf)にある原子力発電所を訪れた。

鉄道とバスを乗り継いで2時間余り、到着したツベンテンドルフは、ドナウぞいに開けた美しい小さな村だった。そこから、緑の色濃い林とドナウ河にはさまれた遊歩道を歩く。ほとんど人影はない。ときにサイクリングを楽しむ数人のグループが通るだけである。随所にベンチと、そこに出没する動物や昆虫の立て札がしつらえてある。

そんな道を1時間たらず歩いたところで、木立の向こうに無表情なコンクリートの巨大な建物と高い煙突が見えた。それが沸騰水型の原子力発電所であった。



図4 ツベッテンドルフ原子力発電所と「現在の太陽光発電量」を示すパネル

その着工は1972年、日本最初の原子力発電所が操業を始めた1963年の9年後のことである。それが6年後の1978年に完成し、燃料棒が搬入された。ところが国民の間に、運転に反対する運動が澎湃として起こり、その可否が国民投票によって決せられることになる。その結果、投票者の50.47%が原子力発電所の運転に反対する票を投じ、約3万票の差で運転は行なわれないことになった¹²。

その敷地は10ヘクタールの広さがあり、建設のための投資総額は当時の価格で約14億シリング、現在のユーロに換算すると約1億ユーロ、つまり約100億円に及んだ¹³。しかし、1972年の完成後40年間、一度も稼働することなく、これまで、SF映画の撮影現場として使われたり、「失敗した技術の博物館」、あるいは美術品の倉庫、ガス火力発電所、VIP用のディスコなどとして活用しようという計画がなされたりしたという。そして結局は「完成したばかりの廃墟」として、2010年以後、見学者を迎え入れるようになった現在では、わずか140キロワットの太陽光発電の実験的プラントとして使用されている。

それは不思議な光景であった。ただ、20世紀に未曾有の発展のあとを辿った人類の現代文明の運命を、あらためて考えさせる希有な存在であるのかもしれない。そんな感慨を呼び起こす風景でもあったように思われる。

5. 相反する資質の共存——ウィーンの「ものがたり風」観光魅力

ここまで、筆者自身の滞在体験を契機にして、ウィーンの多面的な観光魅力を「ものがたり風」に記してきた。そこで翻ってみると、そこには「相反する資質の共存」というダイナミズムが秘められているという思いが呼び起こされる。

まず、ウィーンはドイツ語圏に属している。そのため人々が信仰する宗教は、ついプロ

テスタントだと思われがちである。プロテスタント教会の源流に位置するマルティン・ルターがドイツ人だったからであろう。しかし実際はカトリックである。いわば、文字通り「ゲルマンとラテンの合いの子」だということになる。

それだけではない。いわゆる「世紀末ウィーン」を招来した時代の皇帝フランツ・ヨーゼフ1世自身が、みごとに相反する資質を帯びた人物であった。彼は「近代的なるもの」を拒否する頑固な保守主義者であった。にもかかわらず、時代の趨勢のもと、実際の治世に関しては「ウィーンの近代化」を先導する役割を果たした。

その結果、19世紀から20世紀にかけて整備されたウィーンの都心とその周辺の建築は、ネオ・ゴシック、ネオ・ロマネスク、ネオ・ルネサンス、ネオ・バロック、モダンなど、実に多様なデザインに彩られることになる。それは、無秩序で俗悪なものに墮する可能性をはらんでいた。しかし、実際のウィーンの都市景観は不思議なハーモニーを醸し出すことに成功している。

それは、かつて栄華を誇ったハプスブルグ帝国の首都として、すぐれて「都市的な都市」であった。しかし、その都市域には広大なブドウ畑が拓かれ、少し郊外に出ると、深い「ウィーンの森」をはじめ、豊かな自然がもたらす野生の息吹に満ちている。それに、ウィーン市街の随所で、たとえばシュタイアーマーク州の農民たちによる大規模な物産展が開催されたりもする。その際には「オーストリアの田舎ぶり」が、直截な形で首都ウィーンに浸透してくるのである。

ところで、ウィーンは、世界的な広がりを持つ「音楽の都」と呼ばれる。しかし実際には、同時に優れた美術品を擁する、より広い意味での「芸術の都」でもある。

そんな都市で人々は、まだ陽の高い内からワインのグラスを傾け始め、この世の生を大らかに謳歌する。そう思っていると、他方では、かつてのペスト禍への歴史記憶のゆえか、病や死への恐れを内に秘めた心性を、深く底流させてもいるのである。

今ひとつ、ウィーンでは、実に多様な料理を食べさせる飲食店が営業している。その多様性は、他の国々の都市と比較しても著しい。背景には、これまた、かつて多様な文化を身につけた人々が混住したという歴史が作用しているのであろう。

ところが、である。一部のエスニック料理のレストランを除くと、その多くが美味しい料理を提供しているとはいいがたい。このことは、本文でも述べたように、ひとり筆者の主観的な評価に基づくものではない。そうではなくて、一定の普遍性を帯びた傾向だといえる。それは、ウィーンの市場で提供される食材の多くが新鮮、かつ良好な資質に恵まれていることを考えると、かなり不思議だという気がする。ここでいう「相反する資質の共存」には、こうした説明のむづかしい「矛盾」の存在にも由来している。

こうした事例は、もしかするとウィーンの人々の気質を形成する類まれな「大らかさ」と、やや意外だといえる「偏狭」の併存にもあてはまるかもしれない。というのも、か

つてウィーンは、多様な民族の混住する都市であった。しかも「世紀末のウィーン」では、フロイトやヴィトゲンシュタインなどのユダヤ人知識人が、その学術や文化の創造に大きな役割を果たした。それを可能にした「大らかさ」と同時に、ナチスに占領されて以後のウィーンは「注 31」において簡単に触れたように、彼らを迫害する「偏狭」を露わに示しました。その大らかさと偏狭の共存には、非常に興味深いものが底流しているように思われる。

さて、そこで……「相反する資質の共存」というタイトルからは少しずれるが、これらに加えて第二次大戦後、オーストリアが辿った日本と類似する運命にも、ある種の親近感を呼び起こす理由がある。そのことは映画「第三の男」について記したところに示唆しておいた。また、2011年3月11日における東日本大震災とその後の原発事故の影響を振り返るとき、オーストリアの原子力発電への対応の仕方にも、われわれ現代の日本人が考えるべき問題点が、さまざまな形で含まれているのではないか。

さて、原発の運転中止は、もっぱら国民の意思の表明の結果もたらされたものであった。背景には、国民の安全への希求を何よりも優先するというオーストリアという国の指向性が表明されているのかもしれない。

そこで思い出すべきは、上記の「相反する資質が共存」するオーストリアの社会と文化それ自体が、そこを訪れる観光客のみならず、むしろオーストリア人、とりわけウィーンに住む人々によって楽しまれ、彼らの快適な生活を保障する条件になっているという事実である。

春、暖かくなりはじめた澄明な気候のもと、花と緑の豊かな公園や市街地の路上に並べられた椅子とテーブルに集い、ワインやビールのグラスを、くつろいだ風情で楽しむ人々の姿が、そのことを象徴している。毎夜、ウィーンを訪れた観光客と共に、多数の市民がオペラやコンサートなどに出かけるという事実も、この都市における生活の快さを物語っている。さらに、世界の先進国水準の自動車普及率を誇りながら、きわめて安価で便利な公共交通網が整備されていることも、同様の文脈で捉えることができよう。

つまり、この都市では、快適で楽しい生活が、非常に適切な価格で、容易に手に入る。だからこそ2011年の秋、マーサー社は「世界生活環境調査」において、ウィーンを「世界で一番住みやすい都市」に選んだのである。

そう。わが国やわが街に、観光客を誘致するには、絵はがきになりそうな観光資源にばかり目を注いでいては駄目なのである。そうではなくて、長い間、そこに住んでいる市民自身が、快適に楽しみながら生活できる条件を整えることこそが肝要なのである。そんな強い実感を、心身の全体で受け止めたことこそ、わざわざウィーンにまで出かけ、そこで滞在を体験したことの最大の成果なのだと思う。

そこには「観光立国」をめざす現代日本にとって「他山の石」とすべき点が少なくある

まい。それやこれや、ウィーンを中心としたオーストリアにおける観光をめぐる状況の多くが、2009年に施行された「観光立国推進基本法」のめざす日本の国づくりに、さまざまな形で参考になるように思われる。

そこから何を、どのように学び、わが国の「ものがたり観光」に活かすのか。この点に関しては他日を期すことにして、本小論を閉じることにしたい。

付 記

本小論は、2011年度佛教大学教員研修の成果のひとつである。

謝 辞

この研究は、ウィーン大学（Universität Wien）文献学部（Kulturwissenschaftliche Fakultät）東アジア研究所（Institut für Ostasienwissenschaften）に、その所長セップ・リンハルト（Sepp Linhart）教授の好意により、客員教授としての滞在を許可されたことにより可能となったものである。また、滞在中、同大学のローランド・ドメーニク准教授、ブランドル紀子講師、アンゲラ・クラーマ講師、「第三の男」博物館のカリン・ホフラ館長には、ひとかたならぬお世話になった。記して深甚の謝意を表したい。皆さん、ありがとうございました。

注

- 1) ブランドル紀子（2012）「ウィーン美術史博物館の名画をめぐる小裏話」『まほら』（71号）旅の文化研究所，pp.16-17。なお、図1，2，3の写真も、同じ論考に載録されていたものを用いた。
- 2) ヒルデ・シュメルツァー（1985）新堂美智・訳（1997）『ウィーン ペスト年代記』白水社，pp.118-119
- 3) 加藤雅彦（前掲書）p.158-161
- 4) ローランド・ドメーニク（2011）「ウィーンとワインの不可分の関係」『まほら』（71号）旅の文化研究所，pp.14-15
- 5) その詳細は、つぎのURLで参照できる。<http://www.mercer.co.jp/>
- 6) ここで「主な外国」とは、1年間に5万人以上の日本人が訪問した39か国を指す。
- 7) 同じ年の日本人の海外旅行者数は1,547万人である。しかし、1回の海外旅行で複数国を訪れる観光客が少なくない。その結果、上記の「主な（39か）国」を訪問した日本人観光客数は、これより多い2,160万人になる。
- 8) 岡田暁生（2012）『楽都ウィーンの光と陰：比類なきオーケストラのたどった道』（小学館）pp.12-13

- 9) ここでの記述は、つぎの文献を参考にしている。

カリン・ホフラ (2012) 「名画『第三の男』の記憶を訪ねて」『まほら』(71号) 旅の文化研究所, pp.18-19

なお映画「第三の男」のプロットを簡単に紹介しておく……アメリカの三文作家ホリー・マーチンスは、旧友ハリー・ライムに呼ばれて、廃墟となった四国支配のウィーンにやってくる。が、ハリーは自動車事故で死んでいた。で、その葬式でイギリスのMPと知り合い、ハリーが闇屋であったと聞かされる。しかし、信じられないホリーは、ハリーの恋人だった女優のアンナと共に、ハリーの死の真相を探ろうと、彼の宿の門衛に話を聞くと、彼の死の現場に2人であるとされてきた男が3人いたと証言。まもなく門衛は何者かに殺害され、アンナも偽の旅券所持が発覚してソ連のMPに拉致される。それを知らないホリーは、彼女の家を訪れたあと、街の物蔭に死んだ筈のハリー・ライムを見つける。すでにハリーが、薄めたペニシリンの闇取引で多くの人々を害したことを知っていたホリーは、そのことをイギリスのMPに急報。アンナの釈放と引きかえに彼の逮捕の助力をするよう依頼される。やがてマーチンスはハリーとメリーゴーランドの上で会い、あらためて彼の実像を知り、自ら囮となってハリーを呼び寄せる。そして、ホリーの前に姿を現したハリーは、逮捕網に包囲されていることを知り、下水道に逃げ込む。そこでは激しい銃撃戦が展開され、追いつめられたハリーがマーチンスの一弾に倒れる。こうして「第三の男」すなわちハリーの埋葬が行なわれる。そこでマーチンスは、心を寄せ始めていたアンナに出会うが、彼女は固い表情のまま彼から歩み去っていくのであった。

- 10) その1人は、ウィーン観光ガイドでこのミュージアムの館長カリン・ホフラ氏であり、もう1人は「第三の男」関連展示品コレクターのゲルハルド・シュトラスグシュワントナー氏である。なお、このミュージアムの詳細は、ネット上の www.3mpc.net で見られる。
- 11) やや蛇足めくが、増谷英樹 (1993 『歴史のなかのウィーン:都市とユダヤと女たち』日本エディタースクール出版部) が指摘する「不都合なことはすべて忘れてしまうという、オーストリア国民の『特殊な才能』と、それに伴う「ある種の運の良さ」も、われわれ日本人に、どこか似ているのかもしれない。つまり、同書によると、「(1930年代の) オーストリアは第三帝国における『ユダヤ人』迫害の教練場となり、1939年の終わりにはウィーンのユダヤ教徒はすでに22万人から7万人に減少していた。結局ここで終戦を迎えられたユダヤ教徒は200人に過ぎなかった」(p.36)。にもかかわらず、「戦時中オーストリアを(ナチの)ドイツから切り離し、味方につけておきたかった連合国は、1943年のモスクワ宣言によって、1938年の『(ドイツとの)合邦』を無効とし、自由で独立したオーストリアの再建を確認した。……(このことは)オーストリア独立を維持する役割を持つとともに、『オーストリアはナチスの最初の犠牲者である』とする、戦後オーストリアにおける国民的神話を成立させた。……オーストリアはナチス犯罪の熱心な共犯者から、何の罪もない犠牲者の地位へと巧みに変身してしまったのである」

(pp.38-39)。非常に興味深い論点であるが、この点に関する考察は他日を期したい。

- 12) このとき、Atomsperrgesetz 法（「国民投票なしに原子力発電所を建設・運転してはいけない」ことを定めた法）が、1999年には、Bundesverfassungsgesetz für ein atomfreies Österreich（「核のないオーストリアのための連邦憲法的法律」）が成立した。
- 13) 資料出所：http://en.wikipedia.org/wiki/Zwentendorf_Nuclear_Power_Plant

旅する学びで考えたこと

李 有師*

Reflections on "Travel-Learning"

LEE Yuuji

筆者が営む小さな宿ペンションは、日本一長いとされる大阪・天神橋筋商店街の真横。ほぼ毎日昼夜共に落語が聞ける定席・天満天神繁昌亭の真向かい。さらに、天神祭で有名な天満天神社、その江戸期までの境内地にある。すべてが古色蒼然に感じるがそうではない。少子高齢と低成長下【表1】の日本では、この全てが新しい観光価値への基底になる。それは、地域の中で重層する「職住混在型ビジネス」、芸能や創造活動の「表現力」、地場の宗教性を感じとれる「市井文化」、この三要件が混然一体化する場所の姿だ。それは都会か田舎か、観光地であるか否かにかかわらず、この各地それぞれの独自性を「地域経営」にまで称揚することができれば、今日この地においても、これら三要件を基底に次世代型観光¹を育むことが可能になっている。

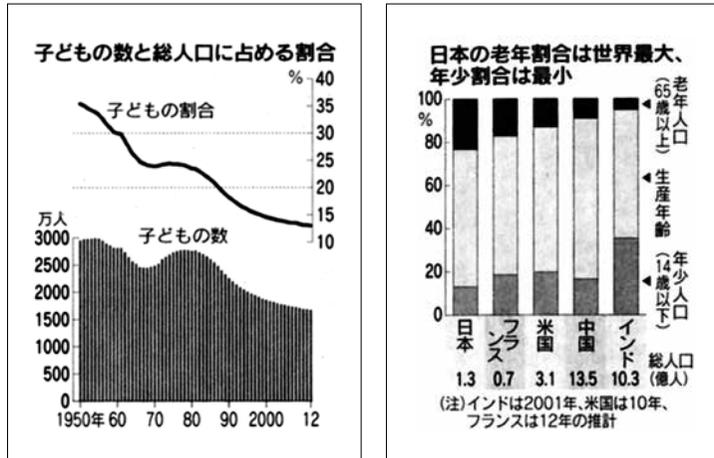
これは、パソコンなかんづくITシステムの広範な普及期に重なったこと²で「小さな宿」の日常が、まるで「これからの観光」を考える“参与観察”の現場になったことに起因し、さらに4年前、その参与観察の主張や論考³がもとで、短大で「観光」を教えることになり、次世代型観光を育む学び、そのものを実証できる機会を得たことに由来する。ただし大学では、卒業後の進路分野に直結する既存の観光業種と関係する学びが重きを占め、「次世代型観光を育む学び」への筋道は不明確であった。三要件と関連した次世代型観光を学ぶためには、何をどのように構成すればよいのか。先例が少なく躊躇する場面もあったが約10年前、筆者自身が立ち上げた「新しい観光を探るNPO法人⁴」での活動経験などから、それは、従前の「観光の様子」をなぞるのではなく、学舎を飛び出し「試み」を重視する学びにあるということに行きついた。「試み」とは、①職住混在型ビジネス ②表現力 ③市井文化、この次世代型観光を育む三要件が可視化できる現場に入り、見て・触れて・体験する、地域生活者とのやり取りが可能な「行動する学び」のことである。

この行動する学びを重ね、地域それぞれの価値を対比的に見比べ、これを客観的に表現

*大阪千代田短期大学

することが可能になれば、それは「地域の力」へと昇華する。このような手法を「旅する学び」と称することにした。

以下は、その中間報告的な小論、「旅する学びで考えたこと⁵」である。



【表1】少子化と生産年齢人口（15歳～64歳）左表 2012.5.5
右表・同 4.18 いずれも日本経済新聞より出典

1. 大河ドラマと観光の学び

(1) 手探りのスタート

大阪千代田短期大学では、2009年4月から総合コミュニケーション学科という学科内に「観光コース」という、新しい学びのジャンルを開設すべく計画されていた。しかし一定の「ひな型⁶」があるとはいえ、コース開設にあたってのオリジナルといえる構想は存在しなかった。幸い、2008年8月から8ヵ月間の準備期間があったので、まず最初にIT社会の進展・定着で、21世紀に入り急速に変容した「観光の現場」を見届けつつ、その意味や意義について、根源的な部分に光を当て解説を試みているテキストを探すことにした。もうひとつの準備作業、それは学外授業のコンテンツづくりだった。

実務系の学びにおいて、例えば幼児教育や看護・介護福祉系の学びにあっては、「実習」と称して現場に出向き、相当期間をその「現場実習」に費やすことは一般的な常識である。それらは当然のごとくカリキュラムに位置付けられており、欠くことのできないたいへん重要な学びの要件であるとだれもが認識している。

「次世代型観光を育む学び」においても、「現場実習」は欠くことのできない、たいへん重要な学びの要件であると考えられた。しかし近年、ホテル業体験や模擬的な旅行商品企画体験という名目で『学び』の営業品目化が進んだ関連業界では、これらを一括的に

請け負うビジネス手法の整備が進み、「次世代型観光を育む学び」への「ありのままの現場」を見つけ出すことには、たいへんな難儀が伴った。

観光という、ある意味では「遊びを学ぶ」領域であるがゆえに、お金のやりとりが学生に既知された場合、その学びが「旅行商品」と勘違いされ、「お客様化」を招きかねない危険性がある。これでは「学びとしての領域確保」が崩壊しかねない。かといって、予定調和を全く排除して学生と共に学外授業を構想することは膨大な手間と、何かしらの危険も予期される。「ガチンコの学外授業（現場実習）」をどこまで、どのように導入すべきか。この案分の計測が必要になったが、その方針を決めかねるうちに2009年4月一期生を迎え、新年度がスタートした。

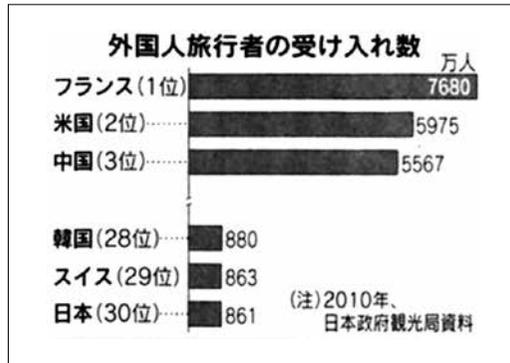
(2) 不人気の理由とテキスト選び

今年のNHK大河ドラマ、平清盛は視聴率が上がりず史上最低の不人気をかこっている。その原因については各種報道で明らかとなっているが、視聴者の声は概ね次の2点に集約されている。曰く、画像を荒く見せる演出のためドラマ全体が汚い。曰く、登場人物が多く複雑でストーリーが難解だ。

概ねこのようなものだが、より本質的な原因が他にあるように感じられる。

その本質とは、この国のドラマシーンが韓流ブームの到来以降、恋愛をメインに据えたラブストーリーを起点、はじまりとして、いまでは韓国や中国の歴史的大ドラマ（日本的にはNHK大河ドラマが独占してきたジャンル）さえ気軽に視聴できるようになり、壮大なブームを巻き起こし、これが近年頻発する「経済産業的な出来事」……象徴的には「ニッポンのお家芸」だった、パナソニック、シャープ、ソニーなど、日本の「超優良家電企業」が、それら国々の後発家電メーカーに追い抜かれてゆく姿などと共鳴して、フィクションとリアルな世界が混然一体化しているかのような社会現象のことだ。つまり、場面展開が小気味よいフィクションの世界……隣国の「大河ドラマ」と、リアルな経済世界とが過大に反応しあって「日本が置き去りにされてゆくかのような感覚」に至る、劇中劇のような社会現象だ。

このような傾向は、グローバル化とIT化が一気に進んだ日本のバブル経済崩壊期以後と歩調を重ね、隣国の世界戦略にも乗りどンドンと増幅されてきた。しかし日本では、この深刻な社会現象を延々とかう解釈し続けてきた……80年代のバブル経済とその崩壊がもたらした「失われた90年代さらにその延長」であり、ブームそのものが「日本固有の問題⁷⁾」である、と。



【表 2】 観光政策の立ち遅れ＝外国人旅行者の受け入れ数による比較
2012.5.3 日本経済新聞

例えば、今この時点でも、いまだに「日本だけの韓流ブーム」とみる傾向は強いのである。ところが現実はもっと深刻で、韓国・中国と比較してみた場合、観光政策の立ち遅れも目立ち【表 2】、これらが重なり合って「日本は歴史が動かない国。だから大河ドラマも成立しない」という観念が増幅される一方で、韓国や中国は（事の好し悪しは別として）、実際に歴史が大きく動いているように見えるので「こっちの大河ドラマこそ本物だ」という評価を深化させ、日本の大河ドラマがくすむ条件整備が着々と整備されてきた。

大河ドラマを受け入れるためには、歴史を経て現在に至る「時代性への合意」が大前提として備わっていなければならないが、「失われた 90 年代とその延長」などとする社会合意は、見方を変えれば、時間軸や歴史性そのものを透明化させ無力化させているわけで、このような社会合意が“失われた 90 年代”から概ね四半世紀も続き、さらに継続中の日本では、「歴史と自分を重ね合わせる行為」それ自体への根気が激しく棄損されている。

換言すれば、大河ドラマに載せて次から次へと額縁に陳列するかのような形で歴史を扱っても、すでに「歴史を見る」根気自体が失ってしまった日本では、まったく逆効果になってしまい、結果的に「視聴者の見る意欲」が著しく低下することが考えられる。今般の大河ドラマの歴史的不人気の本質は、画面の荒々しさやストーリーの難解さなどではなく、「ニッポンの大河」そのものに夢がもてない急所の痛み、そのように感じられるのである。使用するテキスト選びでも、このような点に最大限の注意を払った。すなわちそれは、成功体験や自慢話を額縁に飾ったように次から次へと羅列する、タブロー主義⁸から逃れることだった。

代表的には、「あの“観光名所”がこんなブームで蘇った」「こんな観光商品が大ヒット中」「このイベントで大儲けした」といった類の羅列である。これらの多くは近年、「着地型観光」という業界言葉に集約され、学びの場面でもそれらを追体験できる「商品化」が流行りとなってきたが、このような事象の類似ケースは近年の雇用環境にも通底している。

それは、概ね次のような共通した書き出しで対比することが可能だ。

- 観光シーン 大規模観光の時代が終焉→本物や匂に触れることのできる地方生活者の「小さな観光的価値」を繋ぎ合わせ→観光商品として造成→これを全国各地で大量に構成し旅行商品の主力に据える→「着地型観光」の類型と概観
- 雇用シーン 工場の国外移転やグローバル化、IT化などにより国内雇用環境が悪化→ただし、小規模化しても国内労働力は必要→緩衝材的労働力を派遣労働や契約社員などに一群化→これを法制度化させる→今日の労働環境の類型と概観

いま二十歳を迎えようとする若者は、おおよそ90年代初頭の生まれであり、生まれながらにしてこのような状況下で育ってきた。観念的には「モノを欲しない若者の時代」であり、「夢を持つとしない若者の時代」として、一方的に大人の側がそう評価⁹する若者世代だが、時代の移り変わりが早いこと驚くほど早期に「賞味期限切れ」し、「現在」がすぐ「過去化」される一過性の時代に、消費財としての「着地型観光」を次から次に見せられても、それはあたかも「派遣労働」と相似形のような「使い捨て」にしか見えざるを得ずタブロー主義的自慢話の羅列にも近い。これでは、若者をさらに白けさせ、創造の境地へと誘うべき「教材」としては不適切であるように考えられた。

このような時代と社会性を総合的に勘案しつつ、使用するテキストを選定したが¹⁰、そこに共通したものは、形而上学的な意味における「考える」という鍛錬に対する備えの有無であり、既得権者が振りかざす、若者を排除するためのレトリックのひとつ「成功体験（自慢話）」の羅列が、注意深く排除されているかどうかについてであった。

(3) 「気配の惑星」との自問自答

観光という学びの領域は、2003年の「観光立国宣言」や2008年の観光庁の新設によって注目されるに至り、その前後から大学や短大でも、学部や学科に「観光」を冠した新しい学びを急増¹¹させてきた。ここで注目すべきは、これらとまったく同一歩調で、主にはIT化の進展・定着によって旅や旅行の形態が激変し、観光シーンが急激な変容を遂げ、旅行会社から「代理店業務」を奪取しつつあったことだ。それは、宿泊系では「予約サイトからの直接予約」、航空機や鉄道などのチケット販売では、供給側と消費者を直接結ぶ「ネット予約」が主流になってゆく様、社会現象に顕著に表れた。このことで、大手旅行会社は当初予期していた以上の激しさで「代理店業務（口銭ビジネス）」という、伝統のビジ

ネスモデルを失うことになる。

このことが旅行会社の再構築を先導した。2006年には、日本で群を抜く業界最大手JTBが、旧体制を脱ぎ捨て15の事業会社群に分社化し、ホールディング化の下に新しい経営体制に移行¹²し、長じて業界第2位の位置を占めてきた近畿日本ツーリストは、遂にその地位を降りざるを得なくなった¹³。また、宿泊施設でも“旅行代理店”を介さない「直接予約」で価格競争が一気に進み販売価格が猛烈な勢いで低下した。これは、高度成長期以後の産業界のリストラや雇用形態の変化による、団体客の激減という長期間にわたる、この国の宿泊業界の宿命的凋落現象と相まって、より深刻な事態を巻き起こした。数多くのホテル・旅館が閉鎖や事業会社の変更を余儀なくされ、さらなる価格破壊¹⁴が信じられない速度と規模で進んだからだ。

こうした観光業界全体を巻き込んだリストラが、近年（概ね2000年以降）この分野全般に大きな雇用収縮をもたらしてきたことは明白な事実であるのだが、その状況下、あたかも火中の栗を拾うかのように、“大学業界”では観光学部や観光学科の新設・整備が進んできたのである。

しかし今日の大学では、専門領域の学びに併せ「出口保証（就職先確保）」という言葉が、ごく普通に流通し大きな位置を占めるようになってきている。これは「学び」と同時に、就職支援領域の担保を教員に求める言葉としても有効に機能している。この圧力は、まるで「気配の惑星」のような異次元のパワーを持ち、いつも頭の中を駆け巡り脅迫的に迫ってくる。「出口保証」という圧力は、それほど大きな圧力だ。

この担保には、「学び」と「就職」の親和性を高めること以外、効果的方法はない。

「観光の学び+出口保証=今日的観光の学び」

必要とされている、この公式は理解できたが今生の観光業界を考えると「気配の惑星」は益々圧力を高め、憂鬱な日々が続くばかりだった。

2. 見て・触れて・体験する

(1) 走らなければ分からない「現場を踏む」ということ

地域・地区、さらに過去、現在、未来を対比的に見比べ、歴史的な価値観を照射して、現代社会と共に未来を見つめる。「観光学」とは、このような社会学上に照らされた教養教育の一類型であるとも考えることもできるのだが、最適と思われるテキストを選ぶことはできたが、「出口保証」を迫られると、「気配の惑星」の圧力が増すばかりで、それは日増しに増圧される。「何か足りない」そのような思いが高まった。

そこで、現代社会を日々見通すことが主要な仕事である旧知の新聞記者に相談してみることにした。この毎日新聞社会部の編集委員とは、(前出のNPOを構成・法人化するに際して)2002年1月からの半年間、週一回のペースで大阪を舞台に「次世代の都市型観光」をテ

ーマにした長期連載¹⁵を共に企画し、協働取材した間柄だった。「不足」について、何をどのように補うべきか、記者と何度も語りあった結果は、その時代や社会とのリアルな同軸性と共に、地域単位の「何らかの造作行為」に踏み込まなくてはならない、ということであった。

したがって、観光を基軸に据えた学びである以上、全国各地いまこの時代の動きの中で地域そのものが、何をどのように進化させようとしているのかについて、まず自らが実際に知っておくべき必要性を強く感じたのである。これらのことは「ネット情報」という形ですでに膨大に流通しているわけでもあるのだが、その少なくない数が、今日では「受益者による流通物」という、タブロー主義に通底する危避の対象物¹⁶のようにも感じられた。「見て・触れて・体験する」やり取り可能な行動する学び……その答えのヒントは、スクラップ&ビルドによって消費スタイルの更新を「これでもか、これでもか」と迫られる大都市部より、地域・地方の表層部により多く“出土”しているのではないかと、という仮説に行きついた。

そこで、「訪ねたい『旅・まち・発見』」という、旅の連載企画を毎日新聞・大阪本社・夕刊編集室の主筆と共に、筆者がプロデュースする形でこの連載を推し進めることになった。初回2009年3月、香川県小豆島からスタートして、最終回2011年12月沖縄県石垣諸島・竹富島で締めくくられた連載は全29編、掲載回数83を数えた（番外編、3回を含む）。この内、筆者が直接旅に出て取材したものは18編、54回であった（詳細以下）。

◎毎日新聞「訪ねたい『旅・まち・発見』」の全行程（◆印：筆者担当編）

- 1 ◆小豆島編（香川県）5回：09年3.30「オリーブ園」 4.6「オリーブ農園」
4.13「尾崎放哉の庵」 4.20「エコツアー」 4.27「ものづくりを見る」
- 2 ◆大分編7回：09年5.11「フェリーに乗って」 5.18「江戸内の景」 5.25「原尻の滝」
6.1「岡城址とメロディーロード」 6.8「竹田の姫だるま」 6.15「温泉ざんまい」
6.22「湯けむり散歩」
- 3 京都編3回：09年6.27「氷室神社」 7.6「氷室跡」 7.13「光悦寺と源光庵」
- 4 ◆五島列島編（長崎県）5回：09年8.3「堂崎教会」 8.10「自然満喫コース」 8.17
「おいしき探索」 8.24「茶畑と歌碑」 8.31「ごみ拾いボランティア」
- 5 甕島編（鹿児島県）3回：09年9.7「カノコユリと大明神」 9.14「海と若者たち」
9.28「夢あるドクター」
- 6 ◆北海道編3回：09年10.05「不思議な湖」 10.19「渡辺体験牧場」 10.26「阿寒湖
アイヌコタン」
- 7 ◆十津川編（奈良県）5回：09年11.2「谷瀬のつり橋」 11.9「武蔵地区」11.16「小辺路」
11.30「玉置山」 12.7「玉置神社」

- 8 伊勢神宮編 4回：09年 12.14「新調の宇治橋」 12.21「五十鈴塾とおかげ参り」
12.28「微古館と農業館」 10年 1.4「御塩浜と朝熊山」
- 9 ◆石川編 4回：10年 1.18「百年水と加賀魔除虎」 1.25「お茶屋体験」
2.1「座禅体験」 2.8「能州紬」
- 10 ◆宇和島編（愛媛県）2回：10年 2.15「伝統的町家とシラウオ」 2.22「闘牛と段畑」
- 11 ◆沖縄北部編 3回：10年 3.1「今帰仁城跡」 3.8「古宇利島」 3.15「伊是名島」
- 12 ◆岡山編 2回：10年 3.29「中世夢が原と美星天文台」 4.5「星尾神社と鬼ノ城」
- 13 近江八幡編（滋賀県）2回：10年 4.26「ヨシの原広がる西の湖畔」
5.10「八幡山と近江商人の町並み」
- 14 ◆新潟編 2回：10年 5.31「日和山住吉神社と地獄極楽小路」 6.7「金毘羅神社と新潟西港」
- 15 福岡編 2回：10年 8.2日「姪浜」 8.9「能古島」
- 16 岩手遠野編 2回：10年 8.30「曲がり家とデンデラ野」 9.6「カッパ淵」
- 17 ◆琵琶湖編（滋賀県）2回：10年 10.18「セールボート体験」 11.8「沖島」
- 18 尾道編（広島県）2回：10年 11.8「お好み焼き紀行」 11.15「同・続編」
- 19 ◆大山編（鳥取県）2回：10年 12.6「妻木晩田遺跡」 12.13「ペンション村」
- 20 ◆高知編 2回：11年 1.17「龍馬をゆく」 1.24「カツオの国」
- 21 津編（三重県）2回：11年 2.14「うなぎ」 2.21「ギョーザ」
- 22 ◆豊後大野編（大分県）2回：11年 5.9「老舗蔵元と絶景」 5.16「伝統芸能と伝説」
- 23 ◆与論島編（鹿児島県）2回：11年 6.6「城跡と民俗村」 6.13「イイムツケダナと星砂」
- 24 越前編（福井県）2回：11年 7.4「越前そば」 7.11「ボルガライス」
- 25 ◆山形編 2回：11年 8.8「寒河江の種吹きとぼし大会とブドウ園」 8.15「芭蕉ゆかりの立石寺」
- 26 姫路編（兵庫県）2回：11年 9.5「産業観光と昭和の食堂」 9.12「第1発電所&くじゃ焼き」
- 27 ◆福岡編 2回：11年 10.17「宗像 沖ノ島信仰の女神を臨む」 10.24「柳川 掘割巡り&有明海の幸」
- 28 天川村編（奈良県）2回：11年 11.14日「洞川温泉」 11.21「女人禁制の山上ヶ岳」
- 29 ◆竹富島編（沖縄県）2回：11年 12.12「西塘御嶽と安里屋ユンタ」 12.19「二つの文化財と`のはら荘」
- 番外編：09年 7.27「ものがたり観光シンポジウム」
- 番外編：10年 6.28「シンポジウム・フジヤマから瀬戸内へ」
- 番外編：10年 7.5「あこがれ・セールトレーニング」

全行程の最終回では、沖縄・竹富島の登録文化財「西棧橋」から夕陽を眺めた。ここで足掛け3年にわたる連載を終えることになった。次の短文は、不思議な魅力を放つ、いまにも朽ち果てそうな、その古ぼけたコンクリート製の棧橋上で記した。それは、これらの旅の全般を通じて感じたニッポン観光の実相である。

——沖縄県石垣諸島・竹富島にて……「根気と文化の塊」小さな観光続ける——

【毎日新聞・大阪本社夕刊・2011年12月19日付け】

一昔前、リゾートブームの崩壊を経験した日本の観光潮流は、海外旅客頼みの大規模観光と、地域の営みと産業が一對になった「小さな観光」に二極化しつつあるようだ。大規模は「大金」が見え明快。他方、地域産業や文化を身の丈のサイズの小さな観光に育てるには、地域で生活している側に根気がある。40年ぶりに訪ねた竹富島には昔も今も根気と文化の塊がある。その人間臭さに心が躍り、小さな観光に畏敬した。

(2) 大観光時代との比較

この毎日新聞の連載で筆者が担当した18シリーズ、18地域（この内、大分県豊後大野市については第2回と第22回で2度の取材を試みた）のほぼ半数の地域については、昭和40年代の後半から昭和50年代にかけて、なにがしかの一人旅（筆者10代後半から20代前半にかけて）で訪ねた地域と重複していたが、その時代からすでに40年前後の時が経過しているので「再訪」と表現するには、適切さを欠く。また、「観光」の形そのものもこの間、大きな変化があったので、どの地域のいかなるものも同様、同質に語れるものはない。しかしその一方で、1970年代の世相を反映した観光的風景が、当時から伝わる残滓的メッセージとして、「地域の声」を発し続けていることも事実だった。

70年代の一大イベントといえ、その初頭を飾った大阪万博が挙げられる。期間中（70年3月～9月の約半年間）の入場者は6千4百万人余、月間換算1千万人超、1日あたり換算でも35万人を超える動員力は40年余の時が経過した今日でさえ「金字塔」と称えられている。さらに、この空前絶後の来訪者を数えた国家的イベントは、この時期の国鉄に、これを持ち切るための輸送力確保と、それとは真逆の大阪万博終了後の旅客確保という余条件を課していた。

これに大きな役割を果たすのが「ディスカバー・ジャパン¹⁷」という呼びかけで展開された国鉄の大キャンペーンである。これは、同様もしくは近似的表現で今日いまだに継続されているが、その端緒は大阪万博が記録的大成功を遂げる1970年から、バブル絶頂期の80年代に象徴的に表れ、高度成長期のフィナーレを飾るかのような「国民総観光の時代」の象徴でもあった。

それはこの間に、新幹線が岡山や博多に延伸開業された時期（72年および75年）と

重なり、an・an（70年創刊）やnon-no（71年創刊）による「アンノン族」現象、さらに70年代半ばからは脱サラ志向によるペンションブーム¹⁸など、多種多様な「観光による社会現象や地域現象」を引き起こした。

この国民総観光の熱気は、女性か男性かの性差をも打ち破っていった。それまでの時代には若い男女が同一グループで旅行を、しかも頻繁に企てることなど不可能であったが、この間にスキーやテニスが観光旅行と合体し、男女混交のグループ旅行が社会的に認知され、飛躍的に伸びたからだ。また、家族単位や中高年世代でも国内外を問わず気軽に旅行するようになってゆく。さらに、大企業や中小企業の区別なく職域単位で繰り広げられた慰安旅行という観光形態も、この時期ピークを迎えた。すなわち、1970年から80年代全般にかけては、国内のあらゆる地域に老若男女が出向いた一億総観光の「大観光時代」であったと捉えることができる。しかし、このような志向性の多くは90年代に入りバブル崩壊後の雇用環境の激変と共に衰退したものが少なくない。また、世界経済のグローバル化とIT化が進んだ今日では、旅行会社などの供給側ではなく個人（旅行者側）それぞれによって観光の質を構成し選択する時代へと向かわせている。

3. 個人それぞれの観光の時代「ものがたり観光行動ノススメ」

個人それぞれの観光の時代とは、地域それぞれの「小さな観光の時代」と理解することができる。これは、地域産業や地域産品の創造活動やブランディングと一対になった、地域の総体をセールスするかのような「地域を育てる観光」への移行である。温泉旅館やスキー場の規模、ペンションだけが延々と立ち並びテニスコートの面数やマリニリゾートの豪華さなどを競った、供給側本位の大観光時代の観光の姿とは、その質感が大きく異なっている。

このようなあり様は、毎日新聞の現地取材でも各地で確認できたが、これら地域それぞれの挑戦は、特に3.11以後の価値観や求められる人間性の中でさらに明確化しつつある。それは、主には次の5項目で客観視することが可能となりつつあるが、この5項目のそれぞれは、冒頭で指摘した、①職住混在型ビジネス ②表現力 ③市井文化、この次世代型観光を育む三要件を満たした場所の姿に通じるキーワードでもある。

——小さな観光の時代：5つのキーワード——

- ① 地域で継承されてきた産業（あるいは起業）と共に萌芽する物語性の再評価
- ② 地域生活者の存在そのものが「観光関連従事者」であるという位置づけ確認
- ③ 地域戦略的観光プランと人口増加策の合体
- ④ 地域のファンやリピーターが真の観光客であるという共通認識
- ⑤ 情報発信と集客は「自前でやる」という覚悟

このような「地域を育てる観光」の光景を、ひとつの町の単位、地域の表情として客観視させることに成功したエリアでは、それはあたかも「地域や地方の自発による『小さな観光の時代』」の到来を告げる現象であるかのように見えた。これは、「大観光時代」の通過発散型の観光地の表情とは明らかに違った。

この、地域の営みに彩られた「小さな観光」は、地域を舞台に例えることができる。それは多様な地域の可能性を共に読み込み、ある時はその（地域という）ステージ上で共に演者となり、またある時は（リピーターとして）客席側から拍手を送る側に回ったりするような、個々人それぞれの関係が成立するからだ。このような情景は「消費者とサーバントの関係」を固定的かつ延々と強いて、地域の物語を共有するスキを与えなかった大観光時代とは、まるで違う情景を地域にもたらしはじめている。

それはあたかも、地域や地方の物語に共感・共鳴して、定住者と観光客という枠を飛び出して、まるで「ものがたり観光行動」ともいえる、地域の物語に寄り添った、次世代の地域未来を構成するための、一員としての“観光行動”そのものであるように感じられる。

4. 旅する学びで考えたこと

このように、毎日新聞の旅の連載で各地を巡ったことによる発見は、「ものがたり観光行動ノススメ」ともいうべき発見であった。それは、それぞれの地域が若者を迎え入れることによって、地域と若者の相互が新しい適性や可能性を発見し表明することを可能性にさせる「学びの地」としての表明でもあった。このような発見から2011年度において、短大の最終学年である2回生（女子学生1名）を、有名観光地の別府温泉や竹田市に挟まれた観光後進地、大分県豊後大野市にインターンシップ生として派遣した。（「まちぐるみインターンシップ交流制度」として、成果提案¹⁹⁾）

このような交流から、この地が前項で挙げた「小さな観光の時代：5つのキーワード」そのすべてを保有し、ゆっくりではあるが根気よく前進しつつあることを確認した。このことから2012年度においても、同じく豊後大野市に1回生（女子学生1名）を派遣する計画である。この1回生は経験を積んだ“コスプレ”の愛好者【図1】で、このことを強く意識してインターンシップ生として派遣する。

これは、コスプレそのものは、都会的な趣味嗜好であると認識される傾向が強い半面、実は若者レイヤーには、地域・地方の表現者としての可能性が（例えば、地域や特産品をセールスする際の今日の“ゆるキャラブーム”は、その一類型と考えてよい）期待できるからだ。また最近では、もっぱら都市部を生活圏に持つレイヤーのみが強調されて、田舎を「レイヤーの聖地」と見なして、単なる場所——「表現のための道具としての田舎」——として、地域・地方を“消費するだけの場面”に出くわすことも多い。しかし、レイヤーの可能性は消費にあるのではなく、実は「地域を創造する行為」そのものであると考えてよい。



【図1】大分県豊後大野市でポーズを決めるインターンシップ生と地元レイヤー。

偶然のことではあったが事前の調査で、豊後大野市のケーブルテレビの某スタッフが経験を積んだレイヤーであることが判明した。

「ものがたり観光行動ノススメ」——この規範によれば、地域・地方を観光行為の消費地として扱う項は存在しない。ジャパंकールとしての資質に富むレイヤーは、その存在やアイデンティティーそのものが（訪米的なものより）元来は、日本的な文化や風景に位置する²⁰ものである。したがって、その存在は主体に近づけば近づくほど、「地域ブランド」や地域そのものを表現する手法としての役割が期待できるはずである。

この仮説から今回のインターンシップ期間中、10代の短大1回生の“よそ者”と、地域在住の若者、この女子2名（レイヤー2名）によって地域自らによる情報の発信・創造を計画・実行することになった。これは前出の【「小さな観光の時代：5つのキーワード」中、項目⑤——情報発信と集客は「自前でやる」という覚悟】からのコンセプト・ワークでもある。

——中間報告的小論のまとめとして——

「旅する学びで考えたこと」それは、大都市だけが主役であり続けた20世紀モデルの価値観、その明朗な終焉についてであり、若者が活躍できる舞台を地域自らの創造と行動によって準備し、互いが切磋琢磨して時代の閉塞を突破する、その確かな手ごたえのようなものであった。これは、次世代観光学への突破口でもあるように感じられた。

参考文献（一部，注）

1. 朝日新聞（2012）6.16『フロントランナー』によれば、山崎亮は「コミュニティデザイナー」という視点から、次世代型観光を育む視点と同義的に地域へのアプローチを試みている。
2. 李有師（2011）ものがたり観光行動学会誌 第1号『観光の地域産業化』「1. 変容の序章」
3. 李有師（2010）朝日新聞「私の視点」2.25『ニッポン観光——瀬戸内海の多島美を生かせ』など、主として新聞紙上での書き下ろし論考による。
4. <http://tabiclub.org/> に詳しい。筆者は設立準備期間を含め、5年にわたり初代理事長を務めた。
5. 堀田善衛（1957）『インドで考えたこと』岩波新書。本論の題名「旅する学びで考えたこと」は、この世紀的な名著のネーミングに習った。
6. 全国大学実務協会 実務教育委員会（2007）『観光ビジネス教育を担当する教職員の研修会報告書』などを当初の参考とした。
7. 三浦展（2005）『下流社会』光文社新書。急速広範なグローバル社会における様々な社会現象は「この国だけ」の視点で断じると極端な論理で推移することが多い。その代表例が隣国の戦略的文化輸出（韓流ブーム等）を矮小化して捉えたり、今日の文明史的必然とも考えられる若者の新たな層を「下流社会」と評した傾向にみられる。
8. 松岡正剛（2008）『季刊 政策・経営研究』vol.3。「編集されてゆくグローバリゼーション」の項、この中谷巖との対談で、美術用語的な視点からはタブロー主義者を自任する松岡正剛が、グローバリズム・ツールとしてのパワーポイント等を比喩的に援用し、「本来そうではないものまで“完成度が高い”と錯覚させる危険性がある」と指摘している。
9. 安部真大（2007）『働きすぎる若者たち——“自分探し”の果てに』NHK出版。三浦展らが「下流社会」と評した若者層に対し、バイク便ライダーやケアワーカーなどの具体的な仕事からアプローチして、「社会システムの行き詰まり」がその根源と指摘している。
10. 岡本信之・編（2001）『観光学入門』有斐閣アルマ／佐々木一成（2008）『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版。主にこれらの著書を用いた。
11. 李有師（2011）ものがたり観光行動学会誌 第1号『観光の地域産業化』「4. 職業と観光」に詳しいが、平成23年度を境にすでに減少傾向に転じたと見られる。
12. 千葉千枝子（2008）『JTB 旅をみがく現場力』東洋経済
13. 一橋総合研究所（2012）『業界地図ダイジェスト』高橋出版
14. 2000年代に入り、高級旅館や有名な温泉旅館が集客や価格競争力の面で立ち行かなくなり転売され、超低廉な宿（1泊2食付き8千円程度の価格帯）にリ・メイクされる事例は枚挙にいとまがない。「湯快リゾート」や「大江戸温泉」などがその代表的な新ブランドで、すでに全国展開されている。
15. 毎日新聞（2002）『大阪・街角・虫めがね』。上期半年間にわたり大阪本社・朝刊面で連載された。

16. 2012年1月に発覚し、社会問題化した「食べログのやらせ事件」は、その代表的な事例である。
17. 白幡洋三郎（1996）『旅行ノススメ』中公新書
18. 『旅』（1977年6月号）日本交通公社。この「特集：ペンション百科」や、同（1979年6月号）「特集：全国430のペンション」では、当時の社会現象でもあったペンションブームが詳しく紹介され、全国各地の「ペンション村」開発も紹介している。
19. 李有師（2011）ものがたり観光行動学会誌 第1号『観光の地域産業化』「5. 観光の地域産業化へのアプローチ」
20. 奥野卓司（2007）『ジャパंकールと江戸文化』岩波書店

黎明期の遊覧バス旅行における 「ものがたり」の生成

—— 宮崎・観光バスガイドテキスト『遊覧説明』（岩切章太郎, 1932年）の分析

長谷川 司*

The Formation of "Narrative" at the Dawn of Sightseeing Bus Trips:

An Analysis of *Yuransetsumei* (Local Description) Texts (1932) by Iwakiri Shōtarō for Tour Bus Guides in Miyazaki Prefecture

HASEGAWA Tsukasa

本論は、昭和戦前期の宮崎におけるバスガイドの遊覧説明について考察するものである。宮崎市街を遊覧バスが走り始めたのは、1931（昭和6）年11月1日のことである。このバスは宮崎バス会社——現・宮崎交通株式会社の前身——によって運営されていた。行く先は、神武天皇をまつる宮崎神宮、宮崎市街を一望できた天神山公園、平家の落人藤原景清をまつる生目神社、南国情緒ゆたかな青島、4時間半の周遊であった。車内では女性遊覧車掌が、車窓風景を説明していった。この遊覧説明の原稿を書いたのが、宮崎観光の父、岩切章太郎である。岩切の回想によれば、当時の遊覧説明は、地方宮崎の「ダイジェスト」であったという。つまり、遊覧バスは宮崎市を概観するものであり、単なる名所案内にとどまるものではなかった。宮崎の観光史において、1931年の遊覧バスのはじまりは、宮崎の観光ブームへの布石と記されている。宮崎の観光地は、遊覧バスコースを中心に展開されてきた。しかし、遊覧バスがどのようなものであったかについては具体的に検討されてこなかった。そこでまず、遊覧バス黎明期である1932（昭和7）年当時の遊覧説明について分析する。遊覧車掌のテキスト『遊覧説明 昭和七年一月』を取り上げ、その内容を検討する。宮崎・遊覧バスのはじまりにおいて「ものがたり」はどのようにして生まれたのだろうか。さらに、その説明はどのようなものだったのだろうか。本論では、現存する開始当初の遊覧説明テキストを題材に宮崎県内の観光地形成に深い関係を持つ遊覧バスの語りについて論述する。

1. 観光宮崎の父・岩切章太郎

岩切章太郎（1893-1985）は、宮崎県で活躍した実業家の一人である。岩切は、昭和期の宮崎観光を主導した。バス観光で一時代を築いたこの宮崎県人は、1893（明治26）年に地元の実業家呉服商の倅として生まれた。東京帝国大学で学び、住友総本店での修行

* 関西学院大学大学院総合政策研究科

を終えると帰郷し、地元事業に携わっていたのだが、1926（昭和元）年に、宮崎市街自動車を設立し、路線バス事業を始めた。このバス会社は、現・宮崎交通の前身である。

宮崎観光の黄金時代として振り返られるのが、新婚旅行ブームである。昭和40年代（1965-1974）の新婚旅行者たちが宮崎に大挙して押し寄せた。「新婚旅行といえば宮崎」という時代である。戦後宮崎の観光における名声は、地元バス会社、宮崎交通株式会社とともにあった。そして、宮崎交通の創業者こそ、岩切章太郎その人であった。

戦後宮崎の観光キャッチフレーズは、「南国宮崎」である。宮崎は、人びとがこぞって訪れる一大大衆観光地になった。こうした宮崎観光の礎を築いたとされるのが、観光宮崎の父・岩切章太郎である。彼の功績の評価は宮崎県内に限らず、日本の観光サービスにおけるホスピタリティの先駆的提唱者と呼ぶ人もいる。現代宮崎においても、「第2の岩切」を待望する声も多い。宮崎において、岩切章太郎は、立志伝中の人物である。宮崎の書店や図書館の郷土コーナーに行けば、岩切執筆の社内報をまとめた『無尽灯』それに彼の半生を自伝的に記した『心配するな、工夫せよ』が並ぶ。これらの本は、いずれも岩切の業績を称え、彼の人となりを記した評伝である。郷土宮崎の人びとの岩切章太郎への愛着をうかがわせる。

ただ、次のことは、見過ごされてきたのではないか。岩切の観光思想や接客理念のエピソードには事欠かない。ところが、岩切が彼の生涯において何をしたのか。さらに、岩切・宮崎交通の観光事業の内容はどのようなものであったのか。これらのことについて、その検証となると意外にも少ないのである。

生前の岩切は、自らの観光思想を「大地に絵を描く」と述べた（岩切、1997：418）。宮崎県の大をキャンパスに見立て絵を描くように観光開発を展開していったのである。では、いったい彼はどのような「絵」を描いたのか。本研究の関心は、まさにここにある。岩切は、宮崎を訪れる人びとに何をさせようとしたのか。本論文では、この問いかけに答えを出そうとする一つの試みである。宮崎への旅行者たちは何をみてきたのか。旅行者たちのまなざしは、どのような「ものがたり」を通じて、宮崎をいかに捉えたのか。

岩切・宮崎交通の観光の検証を通じ、考えてみたい。そこでまず、取り上げるのが、岩切・宮崎交通の観光業のはじまり、宮崎バス時代に始められた宮崎名勝遊覧バスである。

2. 宮崎・遊覧バスのはじまり

現代宮崎の観光業をさかのぼれば、1931（昭和6）年の宮崎名勝遊覧バスにたどり着く。岩切章太郎は次のように述べている。

「私が初めて観光に乗り出しましたのは、宮崎交通で遊覧バスを始めた時からでございます。」（岩切、1990：116）

だが、多くの観光プロジェクトがそうであるように、宮崎観光もまた事業者の発案の産物ではなく、その事業を可能にし、産業的に制度化する歴史的な文脈が存在しない限り、誕生しなかったにちがいない。宮崎名勝遊覧バスの始まった1931年当時の定期遊覧バスを考えてみる。観光バス旅行史をひもとけば、日本国内での遊覧バスは、東京で始まった。1925（大正14）年には、東京乗合自動車のユーランバスが女性車掌を採用し、東京名所遊覧を始めた（江戸東京博物館編，2005）。さらに1928（昭和3）年には、京都、大分でも定期遊覧のバスが運行していたことがわかる。

とはいえ、大正末昭和の始めは、遊覧バスの黎明期であり、まだまだ目新しいものだった。遊覧バスといえば、車掌の語りである。わけても、油屋熊八の亀の井自動車が「地獄」すなわち湯の源泉をまわる別府地獄めぐりのバス遊覧を始め、バスガイドといえおなじみの七五調の少女車掌が人気を博し始めていたところである。宮崎で遊覧バスを走らせるにあたり、岩切もこのことを意識していたことがわかる。他の遊覧バスを知った上で、宮崎バスの遊覧バスを運行しているのである。では、宮崎バスの遊覧バスとは、どのようなものであったのか。

3. 岩切章太郎の回想

東京、大分府で始められていた遊覧バス観光の延長線上に、宮崎バスの宮崎名勝遊覧バスを位置づけることができる。ただ違いもある。東京は政治経済文化の集まる中枢の大都会、大分府は温泉行楽地であった。それに対し、宮崎は大都会でもなければ、人気の行楽地でもなんでもなかった。

宮崎よりも以前に遊覧バスを始めた場所は、いずれもすでに名の知れ渡る名所であったとすることができる。字の通り、「名所」は、名の知られた場所である。遊覧バス旅行といっても、東京や別府の遊覧バスは、いわば既知の場所を訪れる旅である。写真や絵で見たことのある、あるいは、新聞や本で読み知った、すでに見聞きした場所の風物を再確認する名所めぐりである。それらの場所とは異なり、遊覧する人びとにとって、宮崎は無名の地であったことだろう。宮崎名勝遊覧バスは、未知の場所の事物を発見する旅行であったのではないか。宮崎の遊覧バスは、ここ宮崎が、どのような場所であるかを伝えなければならなかった。こうした事情が、独特の遊覧説明のスタイルを生んだと考えられる。はたして、そのようなことが可能だったのだろうか。岩切は、宮崎の遊覧説明について次のような回想をつづっている。

「亀の井の遊覧バスの案内は七五調で、向こうに見えるあの山は何々山と申しまあーす、といういわゆる亀の井バス調である。別府は地獄巡りの遊覧バスだから、あれでいいのだが、宮崎の場合、あれではいけない。普通の話し方がいい。しかし、困った

ことには宮崎にはこれとって指差す物が非常に少ない。どうしても物語が中心になる。それでは退屈するかもしれない。」(岩切, 2004: 91)

遊覧バスを始めるにあたり、岩切を悩ませたのは、「これ」と指差し説明するものが少ないことであった。名所の遊覧ガイドは、指を差し、旅行者の注意を対象に向ければよい。温泉名所の別府であれば七五調, 7音, 5音で繰り返す定型的なリズムとテンポの案内で良い。ところが宮崎はそうではなかった。宮崎への旅は名所めぐりではなかった。バスガイドの案内で、遊覧者たちの視線を向けさせる対象が少なかったのである。

バスで遊覧すると言っても、あったのは宮崎市内の古式ゆかしい伝承を残す、神社や旧跡くらいであった。かつて日向国と呼ばれた宮崎で語り継がれてきた「物語」中心になる。「物語」の多くは、『古事記』『日本書紀』の日本神話であった。これでは指差し案内する物が少ない。バスの乗客に遊覧させるにも、目を引く観光資源が少なかったのである。遊覧バスの車窓越しに広がっていたのは、たんなる地方の風景であったに過ぎない。名所や大都会のような説明ではいけない。そこで岩切は、新しい案内形式を用いたのだという。だとすれば、宮崎名勝遊覧バスとは、そのバスに乗れば、ありふれた地方都市が新鮮な場所に見えてくるのではなかったか。

「何かいい方法はないかと考えた結果、遊覧バスというものは何も名所旧跡の案内だけではないはずだ。産業文化そのほか全部をひっくるめて、ちょうど、一巻の書物のような遊覧バスの案内はつくれないものだろうかと考えてみた。そして、宮崎は一つこれでやってみようと思いがついたそれで農事試験場や、県庁等に行き、いろいろ産業の話等を聞いて廻って、何でもいから日本一のものはないかといつて捜し廻ったら、あるある、日本一がたくさんある。それでこれはしめたと思って、これをうまく折り込んでみた。そして遊覧バスに乗れば、宮崎の観光は勿論だが、宮崎の歴史、産業、文化全て一通りのことはわかるというふうに原稿をまとめてみた」(岩切, 2004: 92)。

「それで説明の中に産業文化その他を入れて、遊覧バスに乗ればその地方のすべてがダイジェストとして一通りわかるというふうに説明内容を組み立てた。そのため今までの遊覧バスの説明とはかなり趣の違ったものになって、これならこの町でも遊覧バスができるということになった。」(岩切, 1992: 248)

岩切章太郎みずからガイド原稿を書いた。もちろん名所を案内するだけのものではなくなった。岩切は、この「地方」宮崎のことが「一通りわかる」原稿を目指した。出来上がったのは、宮崎地方の名所だけではない、産業や文化を記した「一巻の書物」のように、

宮崎地方を説明するものであったという。遊覧時間に、地域を「ダイジェスト」として案内する説明文である。

回想からすれば、岩切は、新たな遊覧説明方法によって、神話、伝承といった物語中心のそれまでの宮崎観光を転換しようとしたというのである。岩切章太郎と宮崎名勝遊覧バスが、それ以前の遊覧バス旅行以上に重要なのは、宮崎という地方の抱えた条件が生み出した説明方法のためである。いわば宮崎で始められた遊覧バスは、いまだ知られぬ観光地をただ紹介したのではなかった。新しい観光地を造り出したのでもない。遊客の目にする土地を他の名所遊覧バスにはない、遊覧プログラムによって見せたと行ってよい。宮崎・遊覧バスのオリジナリティは、車内における説明文すなわち「ものがたり」にこそあったと考えられるのである。

4. 宮崎名勝遊覧バスの運行

1931（昭和6）年11月1日、宮崎名勝遊覧バスが走り出した。この定期遊覧バスを運行したのは、市内路線を担っていた宮崎バス、現・宮崎交通の前身である。宮崎バスの本社があった大淀駅前（現・南宮崎駅）、ここに遊覧バスの乗車場があった。遊客の集合時刻は朝の8時半、約4時間半の市内周遊の始まりである。宮崎神宮、天神山公園、生目神社、青島、4つの降車地を周遊するルートであった（図1-4）。

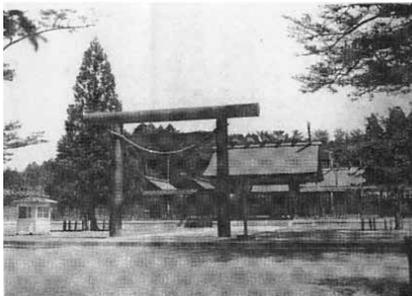


図1 宮崎神宮（『宮崎県写真帳』宮崎県，1930年）

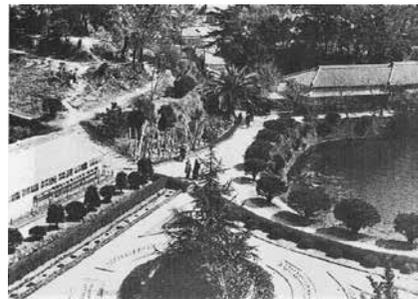


図2 天神山公園（『宮崎県写真帳』宮崎県，1930年）



図3 生目神社（絵はがき，宏文館書店発行）



図4 青島の遠景（絵はがき）

最初の行き先は、宮崎神宮（図1）。バスは北へ向かい大淀川を渡り、神武天皇を祭るこの神社で参拝し、次の天神山へ行く（図2）。天神山公園で宮崎市街を一望するパノラマ的風景を眺めた。つぎは、生目神社である（図3）。源平合戦で活躍した平家の落人、悪七兵衛景清をまつり「目の神様」としても知られる、この神社で参拝した。ここから最後の目的地、青島へ向かう（図4）。白砂青松の砂浜、海に浮かぶ島には常緑の木々が茂る。青島は周囲約1キロメートルで小さい。この小島には、対岸では見られない亜熱帯植物が群生している。島全体は、青島神社の神域である。神社には日本神話の「海幸彦山幸彦」の伝承が残り、彦火火出見命、豊玉姫、塩筒大神がまつられている。とくに、1913（大正2）年の宮崎軽便鉄道の開通後には、にわかに旅人の数も増え始めていた（宮崎市観光協会1997：21）。



図5 青島自生熱帯性植物園のしおり
（日向青島宣揚会，1931年）



図6 青島のピロー樹（絵はがき，吟松亭発行）

大正期以降の青島で注目されたのが、島内植物である。大正期になると、島の植物が「南国」の植物であると認識されるようになり、植物園があったことから推測されるように、「南国」の植物を観賞する旅行者が多く訪れるようになっていた（図5，図6）。亜熱帯植物の生い茂り南国情緒あふれる青島が宮崎名勝遊覧のクライマックスであった。青島での降車遊覧の後、バスは終点、大淀駅に向かった。

5. 遊覧車掌テキスト『遊覧説明 昭和七年一月』

バスの車内において、どのような「ものがたり」が語られたのだろうか。

宮崎交通株式会社は、これまでの遊覧バス車内の乗務員テキストを保管してきている。さきに述べたように、岩切章太郎が遊覧説明用の原稿を書いた。そして、できあがったのが、これらのテキストである。この原稿を遊覧バス車内で、女性車掌が乗客にむけて暗唱した。ここに、一冊のテキストがある。表紙を開くと、『遊覧説明 昭和七年一月』という題名が記されている。「昭和七年一月」というと、昭和6（1931）年11月1日の遊覧バス営業開始から2ヶ月後である。保管されるテキストのうちで最も古い。題字の下には、

女性の署名がある。このテキストで説明を練習した遊覧車掌の一人であろう。調べると、昭和初年代に活躍した車掌であることが分かる。

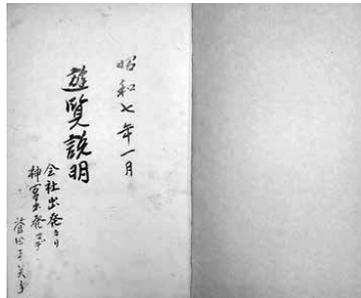


図7 『遊覧説明 昭和七年一月』（宮崎交通株式会社、所蔵）

『遊覧説明』は、開始当初の遊覧行程〔宮崎バス本社—宮崎神宮〕〔宮崎神宮—天神山—生目神社〕〔宮崎バス本社—青島〕に合わせ、3部で構成されている。テキストの説明項目だけをあげると、次のようになる（①—③）。

① 会社出発ヨリ 神宮出発マデ

挨拶／1町名 2道順と哩数時間 3古い町と新しい町／1橋橋 2本町橋 3旅館町、料理屋町、新地遊郭 4川口 5一ツ葉／一ツ葉 日州新聞社 会議所丸三 常盤屋デパート／橋通二丁目 一四七銀行 日向中央 道幅、高島屋／橋通二丁目 県庁、市役所、小戸神社、町口／橋通四丁目 大火の跡 上水道 広島通高女／橋通五丁目 大火跡 バス紹介 貸切 ガスタンク 水道／橋通六丁目 清水町 高千穂劇場 人口 市施行／江平町／神宮参道／宮崎神宮／拝殿

② 遊覧説明 自 神宮出発 至 生目往復本社

宮崎城跡／船塚町 高農牧畜、日向南瓜／花殿町／清水町／黒迫町／上野町／丸ノ内／本町／本町橋 1橋橋南口模様説明 2双石山と日向ライン 3夏の大淀川と地藏祭／太田町／中村町 1西郷戦争で焼かれた 2当町の繁栄 3現況／淀川町／天神山 1山上の説明 2大淀川 3赤江港 4竹林 公園計画／福島町 1二百七十年前の大津波／大塚町 1古墳 2大塚土持 3髪長姫／戰場坂 1市の境 2源為朝 3宮崎市の弓／生目村 1生目の農業 2日向米の宣伝／浮田生目八幡の由緒と景清／生目神社神殿前 生目神社の霊験／帰途 景清廟の話／浮田帰り途 1日向木炭 2日向椎茸／大塚帰り／園芸部 1大体説明 2日向蜜柑／斜線 技芸と第三農法、会議、鐘紡、農協／有明町

③自 本社 青島往復 至 本社

駅前／城ヶ崎町／八重川以南／赤江町／本郷／郡司分／江佐原／木崎町／杉の話
／島山／曾山寺／知福／青島（温泉の少し東ヨリ）／青島／出発／木崎 千切大根
／帰途／帰着

岩切の考証により集められたエピソードが次々と挙げられている。説明文中において、とくに興味深いのは、1932年の宮崎のものがたりが、どこにでもありそうな地方都市の土地土地のエピソードを重ねて丁寧に描かれていることである。

建物が新商品や県の産業事情と合わせて説明され、車窓に映ったであろう田畑をさしては農業の最先端技術が紹介される。デパートやカフェー、活動写真館、料理町、色町、商店街の新店舗、銀行、学校さらには田んぼの稲から畑の南瓜、大根、林の杉まで、数々の事物が説明されている。

まず、出発したバスは北へ向かい、本町橋で大淀川を渡り、宮崎神宮へ至るルートを走る。バスの窓には、さまざまな地方都市の風物が映っては消えた。川下の料理屋町、三味線の音色がさんざめき白粉の香り漂う置屋、遊郭のつづく色里が見える。その先は「市民のパラダイス」、茶店が軒を連ねた一葉の浜である。旭通りの日州新聞社を目にしながら右折する。間もなく、橋通である。拡張され、舗装もされた。アスファルトの道路を遊覧バスは走る。拡張された道路に沿って真新しい店舗が建ち並び商店街を形作っていた（図8）。宮崎の中心市街、メインストリートを通る。宮崎駅の正面、西にむかつてのびる高千穂通、十字方向に交差しすなわち南北に橋通、2本の通りを中心に、宮崎市街は近代都市としての相貌を整えていった。そのような市街地にあって、人びとの賑わいの核をなしていたのが橋通である。



図8 昭和初年代の宮崎市街（『宮崎工事事務所60周年のあゆみ』
建設省九州地方建設局宮崎工事事務所，1987年）

一歩街に入れば、モダンな都市の風物が見られた。メインストリート橋通は、宮崎市街の新しい中心であった。演劇場、活動写真館さらには銀行、郵便局までもが紹介されている。呉服店から転身をはかりつつあった百貨店、デパート、美しい女給が手招きするカフェー、市内の劇場と新たな娯楽として定着しつつあった活動写真、遊覧バスの車窓に映っていたのは、新興都市らしい風景であった。

車掌は、過去の風景を乗客に伝えた。かつては、「キツネ」の住んだ場所も、今は街の一角になっている。道すがら、新しい店舗のある土地は「大火の跡」である。こうした大きな火事も今後は少なくなっていくことだろう。上水道が通ったことで消火設備も整った。市内には、ガスも電灯も普及しつつあった。水道、ガス、電気といった生活インフラも普及し、市民の生活も近代化してきていた。当時の九州、宮崎県もモダンな雰囲気は少なからず漂わせていた。田舎の町並みや市民の生活が近代的なものに変わりつつあった。宮崎は「文化都市」となり、「面目」を整えつつあった。遊覧説明は、宮崎市における都市変容の様相をつぶさに捉えている。

とはいえ、遊客の視界に広がったのは、地方小都市の風景であり、単調でごくごく日常的なものであったにちがいない。大都会の東京や大阪と比べれば、一つ一つの事物は小さく、その数は少なかっただろう。しかし、小さなエピソードの伝える地方都市の点景描写が重層的に積み重ねられ、1932年現在の宮崎が浮かびあがるかのようなようである。こうした記述こそ、まさに、岩切のいう「ダイジェスト」だろう。

遊覧バスの始まった当初、宮崎市街は、とりわけて先進的に発展していたわけではなかったし、全国的な名勝地だったわけでもなかった。遊覧客の眺める車窓に映り、女性バスガイドが説明していったのは、発展のただ中にあった新興都市、当時の日本国内の地方都市ではありふれた風景であったにすぎない。そこで考えられたのが独特の遊覧説明文であった。

遊覧者たちが興味をもったのは、日本全国で当然のごとくなりつつあった近代的な地方小都市の風景を女性バスガイドの語りを聞きつつ、眺めていく経験にあったのではないか。1932年当時の遊覧の降車地となったのは、官幣大社宮崎神宮や生目神社、天神山公園それに青島といった神社や景勝地である。これらの場所で、乗客を降車させ、景色や風物を楽しませるものだった。しかし、遊覧のセットを結ぶ道中にこそ、見せるべきものがあつたのである。そうした一つ一つはささやかなエピソードを多く積み重ねた道中説明にこそ、名所案内にはない、宮崎名勝遊覧バスの遊覧説明の特徴があつたと考えられる。

6. 橋橋の建設風景

遊覧説明文は、宮崎地方をダイジェストで伝えるものであつた。さらに加えて、もう一つの特徴がある。それは説明文の作成された当時の宮崎市街が活写されていることである。この点において注目されるのは、昭和初期の宮崎市街を代表した橋橋の工事風景の描写である。

大淀川を渡る遊覧バスは、本町橋を渡った。それは橋橋が架設工事中だったからである。遊覧バスが始められた当時、橋橋は、渡られるものではなかった。1932年1月現在において、橋橋は眺められるものだったのである。バスの左手では、橋橋の架設工事が行われていた。橋橋は、1932年の4月30日に完成する。すなわち、遊覧バスの始まった1931年11月そして遊覧説明テキストの作成された1932年1月は、架設工事のまっただ中だった。

遊覧車掌は橋の工事風景を説明している。工程の進む橋の幅は「9間」、竣工すれば「九州一」の長さになる。鉄筋コンクリート製のアーチ式で建設中の橋は、出来上がればモダンゴシックの一大偉観になる。説明文では、日を追いだんだんと完成に近づくコンクリート建築が当時の工事風景そのものにクローズアップされ、完成時の偉観が都市の発展と合わせて展望されているのである。



図9 橋橋の架設工事風景（『宮崎工事事務所60周年のあゆみ』
建設省九州地方建設局宮崎工事事務所，1987年）

ただ、新築とはいえ、あくまでも架け替え、造り替えであった。素材を新しくするものであった。木造建築物であった橋が、コンクリート造ゴシック様式で同じ名前で生まれ変わる。しかし、このことは何も、その装いや施設の新機能によるものだけではなかった。建物が人びとに新しい印象を与えたとすれば、あったものが生まれ変わる、それぞれの建物が転身し変容していく出来事それ自体であったのである。

古い町は新しくなり、市民の生活は近代的なものに変わりつつある。ただ、それだけではなかった。なぜなら、宮崎市内には、日本神話にちなんだ地名も残り、神武天皇をまつる宮崎神宮もあったからである。当時の宮崎は新興都市であっただけではない。日向・宮崎は、皇祖ゆかりの古い土地でもあった。

7. 「最も古く最も新しい町」

ありふれた地方都市の車窓風景に趣を添えていったのが、もちろん遊覧車掌である。彼女たちは地元の江陽女子高等学校を卒業したての19歳の少女車掌たちであった（『宮崎

新聞』1931年10月2日、第7面)。説明文中、大淀川にさしかかったバスの車内で、車掌は興味深い口上を述べている。

「宮崎市は最も古い町で最も新しい町だとよく申します。我日本の国のそもそもの始まりで御座いますから、これより古い町はない譯で御座いまして色々古跡がございます。丁度市の真中を流れて居る川が大淀川で御座いますが、其大淀川の川下は神代の物語や祓の祝詞で有名な筑紫の日向の小戸の橋の阿波岐原でございます。此の阿波岐が原と申すのは伊弉諾尊が黄泉の国からお帰りになって禊祓を遊ばした處でございます。又、天照大神や月読命、須佐之男命がたの御生れになりました靈地で御座います。又之から参拝いたします宮崎神宮は神武天皇御宮居の跡で御座いまして此の宮崎市の一帯は一木一草悉くに神代の香りがただよって居ると申してもよろしい程に由緒ある尊い土地柄でございます。然し神武天皇御東征の後には年と共に中央から離れる事になりまして。遂には日本の北海道とまで云はれる程になって仕舞って居たのでございますが、最近になりまして再び非常な進歩を致しまして市内到る所新興の氣に充ち溢れて居ります。どうぞ皆様には古い宮崎を御覧下さると同時に新しい宮崎いや是から発展いたそうとする、宮崎をも併せて御覧下さいますようお願い致します。」

(『遊覧説明 昭和七年一月』宮崎交通株式会社所蔵)

最も古い町でありながらも最も新しい町、宮崎とはまさにそうした町であった。市内、大淀川を日向灘へと下れば、阿波岐原町がある。古事記によれば、「筑紫国日向の小戸の橋の阿波岐原」で、黄泉の国からもどったイザナギノミコトがケガレを祓うために禊ぎし、アマテラス、ツクヨミ、スサノオが生まれた。そして、市内には神武天皇をまつる宮崎神宮もある。ここは、日本神話の第一代の天皇、神武天皇がここに宮を構えた場所と伝えられる。

「日向」は宮崎地域の旧名である。そして、日本神話の舞台「筑紫の国日向」において、アマテラスが生まれ、神武天皇が東へ出発した。天皇制国家であった当時の日本において、日本神話は皇祖の物語であり、日向・宮崎は起源神話の地として「最も古い」土地柄である。

さらに、宮崎は「最も新し」くもあった。神話にしたがえば、日向・宮崎は古都である。かつては都であったが、いまはそうではない。神武天皇は、ここから旅立った。神武が「東征」すればするほど、都は東へと移動し、日向・宮崎は西の隅になり、中央から遠く離れた辺境の地になったのである。しかし、長らく辺境地方であった宮崎も、「進歩」してきている。地方都市のありとあらゆるところに「新興の氣」が充ちているというのである。

ここでのキーワードは、「祖国日向」と「新興都市」である。神代の古くは都であった場所、天皇家の祖先の国であった日向、こうした日向を「祖国日向」と呼ぶ(坂上ほか、1999: 312-315)。「祖国日向」は、かつて都であったが、今となっては辺境になりはてた。そう

した日向・宮崎が今まさに“新興都市”として発展しようとしている。遊覧バスの旅で展開されたのは、「最も古く、最も新しい町」日向・宮崎の「ものがたり」であった。

遊覧説明の口上は、1932年当時の宮崎の雰囲気をつまえている。「最も古く最も新しい町」とは、宮崎遊覧の謳い文句であるだけでなく、1930年代宮崎を表す共通表現でもある。これまでに見てきたように、岩切章太郎によれば、遊覧バス説明の本意は、宮崎という地方をダイジェストで説明することにあった。宮崎市は天皇制国家日本の発祥の地であり、新たに勃興しようとする都市でもある。宮崎市の要約をここに試みたものと言えよう。

宮崎市内の一角が日本神話の天照大神や神武天皇の登場する皇祖神話の伝承地であることが語られる。さらに神話に依拠した天皇制国家の起源地という、いにしへの雰囲気に対して、市街中心部の舗装された目貫の橋通、再架されつつあった橋橋のまわりには新しい街の雰囲気が流れている。最も古く最も新しい町であった宮崎の「ものがたり」を伝えるこの遊覧説明文は、宮崎の市街地が急速に変貌をとげ、近代していく昭和初年度の宮崎市街の一コマを見事なまでに描き出している。

8. 最も古く最も新しい・宮崎の遊覧バスの「ものがたり」

宮崎名勝遊覧バスについて、岩切章太郎の回想と彼の作成した『遊覧説明』を題材に論じてきた。宮崎の遊覧バスは、地方都市のありふれた風景の“現在”を描写的に記述し、乗客たちに宮崎という地方をダイジェストとして説明するものであった。宮崎遊覧バスの車内において、女性バスガイドが語ったのは、最も古く最も新しい宮崎の「ものがたり」であった。こうした「ものがたり」の生成過程は、現代の地方観光、さらには観光と社会の関係を考える際、数多くのヒントを含んでいるように思われる。

1931（昭和6）年に運行を始めた宮崎名勝遊覧バスは、1933（昭和8）年の祖国日向産業博覧会、1934（昭和9）年の神武天皇御東遷二千六百年記念祭といった毎年のように相次いだ地方イベントにおいて、有力華族や帝国議会議員、大学教授といった名士たちにたたえられ、人気を博していったという（宮崎交通社史編纂委員会、1997）。宮崎市内周遊で始まった遊覧バスコースも、その後、戦前・中そして戦後期をつうじてコースを拡大していくことになった。遊覧バスコースの拡大は、宮崎県内の観光地化を意味した。宮崎県は、「観光立県」を標榜するまでにいたる。では、こうした宮崎の観光地化のプロセスにおいて、バスガイドの語る「ものがたり」はどのように変容していったのだろうか。つづく研究において考えてみたい。そしてさらに、遊覧バスの「ものがたり」の考察を通して、「旅行」「観光」の概念で限定するのではなく、遊覧バスから当時の宮崎社会について考察することも可能であろう。遊覧バスの「ものがたり」から、一地方としての宮崎の姿が見えてくるにちがいない、そう指摘し本稿を閉じたい。

参考文献

- ・岩切章太郎（1990）『自然の美 人工の美 人情の美』鉾脈社
- ・岩切章太郎（1997）『無尽灯』鉾脈社
- ・岩切章太郎（2004）『心配するな，工夫せよ——岩切章太郎翁半生を語る』鉾脈社
- ・江戸東京博物館編（2005）『美しき日本——大正昭和の旅展』江戸東京博物館
- ・坂上康俊，長津宗重，福島金治，大賀郁夫，西川誠（1999）『宮崎県の歴史』山川出版社
- ・長谷川司（2011）「〈資料紹介〉宮崎バス『遊覧説明』（昭和7年）——遊覧バスの乗務員テキスト」『関西学院大学大学院総合政策研究科 院生論文集』関西学院大学大学院総合政策研究科，pp.29-44
- ・宮崎交通社史編纂委員会（1997）『宮崎交通70年史』宮崎交通株式会社
- ・宮崎市観光協会（1997）『みやぎきの観光物語』宮崎市

資料

- ・『遊覧説明 昭和七年一月』宮崎交通株式会社所蔵
- ・『三州日日新聞』都城市立図書館マイクロフィルム，1931年11月12日，第1面
- ・『宮崎新聞』宮崎県立図書館マイクロフィルム，1931年10月2日，第7面

聖書の世界を旅することの意味

——自然を取り巻く人々の物語を探して——

古畑正富*

Travelling the Biblical World: A Search for the Tale of the Human Environs of Nature

KOBATA Masatomi

要 旨

本稿の目的は、① 静寂 ② 縮景 ③ 光と影 ④ 雷 ⑤ 歴史と物語 ⑥ 観光、のようなキーワードを設定し、自然を取り巻く人々の物語を通して、「聖書を旅することの意味」を考察することである。その際、イスラエルの風土だけを取り上げるのではなく、日本人の視線とも重ね合わせながら検討を進めてゆく。なるほど、日本人にとって、イスラエルは遠い国だが、静→動→静の複合的なサイクルにより、歴史と物語を紡いできたという点で、両者は類似しており、どこか不思議な身近さを感じさせる。

日本の作家たちが描き出す「光と影」の回り灯籠——こうした2面性を伴う様相は、日本人による「縮景」の考え方に流れる通奏低音と考えられる。たとえば、フランスの詩人ヴェルレーヌの『秋の歌＝シャンソン』を、上田敏『落葉』（『海潮音』所収）が非常に簡潔な、かつ凝縮された文体で翻訳したことは、我々がまた、ゲーテの詩の織りなすリズムに心を惹かれた事実と符合する。そこに表現されたのは、浮き沈みのある人間模様や精神の旅の憂情であり、拡散と収斂の形式を文学的に昇華させる感性といえよう。

興味深いことに、聖書に記述された自然現象、とくに神の属性と結びつく「雷」の本質に照らしてみれば、上記の風景が鮮明なりアリティをもって迫ってくる。だから本稿は、断章にすぎないが、ドイツ——（日本）——イスラエルという3層構造をあえて議論したのである。最後になるが、環境保護を主眼にした新しい観光の姿を模索するため、観光における「果てしない物語（The Neverending Story）」を、人間の動静と循環的時間のなかに創るべきであると、本稿は主張したい。それは、グローバリゼーション⇔グローカリゼーションという（ディアスポラ）の図式に依拠した戦略的な視座であり、我々自身に今後への課題を与えてくれるはずだ。

* 京都外国語大学非常勤講師・京都ラテンアメリカ研究所客員研究員

1. はじめに

17世紀の九州における思想的風土とキリスト教の動静を探求した、遠藤周作『銃と十字架』(1979年)は、次のように印象的な言葉を紡ぎ、静寂に包まれて終幕を迎える。「……いつ来てもこの廃墟は静かだった。訪れる人影もなかった」。ここには、静→動→静の複合的なサイクルで想像力を働かせ、愛しさがいや増す哀しき物語(エレジー)を独自に創り上げる、日本人の美意識と詩的構造が介在したように感じられる¹。なぜなら、夢幻能の「嵐山」も然り、その「名乗りの条件」から類推すると、日本人の脳裏において、単なる離散とは言い切れない、桜花や紅葉にみる拡散の動きには、しんとした静的イメージが秘められ、そこから文学の虚構空間がやおら生まれてくるからである²。

フランスの社会史を研究する鹿島茂によれば、山田風太郎『明治波濤歌』(1981年)は、「歴史」と換骨奪胎された「物語」の波間を渡っていく主人公たちの「歌」とみなすことができる。換言すると、歴史のなかの闇へ沈んだ「異界」、すなわち「歴史(histoire)」ならぬ「物語(histoire)」を浮かび上がらせる手法が駆使されている³。そうしたアプローチは交換可能性を是認し、「ものがたり観光」という立場へ接近する道も切り開いてくれよう⁴。したがって、本稿の目的は、日本人に対し合わせ鏡として働く聖書の世界について考察し、「宗教と観光」へ寄与する見識を示すことである。確かに、ウィリアム・ワイラーの史劇『ベン・ハー』(1959年)が浮き彫りにするとおり、小さな星もしくは渡り鳥たる人生の意味を噛みしめれば、イスラエルの自然を取り巻く人々の物語には、市井に生きる我々を魅了して、「遠くて近い国」を実感させる本質が垣間見えるのだ。

2. 日本人による「縮景」の考え方

翻訳詩集をも含めた、日本人の文学世界を鳥瞰した場合、しばしば問題になるのは、視聴覚的な「縮景」という考え方が色濃く観察される点であろう⁵。興味深いことに、フランスの詩人ポール・ヴェルレーヌ(1844-1896年)の『秋の歌=シャンソン』(1866年)は、堀口大學の訳文が伝えるように、激しい動きの伴う風景や息吹を描き出す。そのデッサンは、「…… 落葉ならぬ/身をば遣る/われも/かなたこなた/吹きまくれ/逆風よ」といった具合である。ただし、「近代」の日本人の精神へ浸透した、『海潮音』(1905年)所収の上田敏『落葉』における非常に簡潔な、かつ凝縮された文体では、人生行路に残された足跡が鮮明なりアリティをもって写生され、「…… げにわれは/うらぶれて/ここかしこ/さだめなく/とび散らふ/落葉かな」という短調で口ずさむリズムが、静的イメージのうちに点々と刻まれたことを忘れてはならない。それはおそらく、風に吹かれて鳴り響く「時の鐘」を背景とした、正岡子規(1867-1902年)の俳句「柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺」(1895年)を想起させる旅路の物語にも比較されるだろう⁶。

旧約聖書学者の池田裕は、万葉集の歌（巻9:1757）とその作者の洩らした感慨に基づき、創世記に描かれた旅人たちにとって、「精神の旅の憂情」が彼らの原風景へ繋がり、やがて永遠の同伴者に化したことを指摘する。「……理由はともあれ、旅が深い憂情に包まれている点でどれも同じである。聖書の旅の舞台はだいたい水や緑に乏しい荒地であり、水や緑の豊かな日本の情景とは正反対であるが、作者の『草枕 旅の憂へを慰むる 事もありやと』の思いには、彼らの誰もが共鳴するであろう」⁷。こうした経験的モデルは古代史の人々のみならず、殺伐とした「近代」を歩み続けた松本清張（1909-1992年）も、自ら感得していたと推測される。彼の発表した作品数は夥しく、とくに初期の『火の記憶』（1953年）、『張込み』（1955年）や連作『黒い画集』に収録された『天城越え』（1959年）は秀逸だが、本稿ではどこか「なごり雪」に似た余韻を与える、『投影』（1957年）について言及しよう。「太市は、東京から都落ちした。……」から筆を起し、「……彼は気づかないうちに涙を流した。ホームに見送ってくれた二人の影がまだ眼に残っていた。しかし、こみ上げてくる感情は、彼と頼子が、何か月間か、この土地へ残した自分の影への愛惜ではなかったか」という言い回しで終わるこの短編は、往きて還りし物語（There and Back Again）としてトラベル・ミステリーへ昇華される内容とたたずまいを有している。

次に取り上げる事例は、1925年の松本卓夫聖地旅行日記「聖地の旅」⁸に現われた、イスラエルの夜空についての描写である。松本卓夫はエルサレム滞在中、東は死海、ヨルダン川、エリコ方面にまで足を伸ばした。だが、最も劇的な場面に遭遇したのは、エルサレムへ上る前に訪れた、ゲゼル遺跡（エルサレム北西30キロメートル、ソロモンが建てた要塞の1つ）に程近いラムレ村だろう。そこで、みすばらしい陰気な宿屋に泊まり、彼は言う。「……夜毎には、空にきらめく星のみが、凝視の対象になるのである。永遠の静寂が支配するかと感ぜられる砂漠のよる、あの雨のごとき盛んな星の群れを仰ぐ時、私たちは押しつけられる様な、森厳極まりなきサブリミティーの感にうたれる」（原文ママ）⁹。

ここで、全体の文脈を鑑み、学術報告の範疇を超えた「巡礼記」として松本卓夫日記を理解すれば、日本人が抱いた遙かなる聖地への思いを、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749-1832年）に沈潜した憂愁と重ね合わせることができる。なるほど、ゲーテの詩『夜の思い（Nachtgedanken）』において、彼の眼前に渺茫と広がるのは、美しい満天の星だが、詩の冒頭で「いたましや、不幸なる星よ」と歌ったことは重要である。ことによると、ゲーテにとって、星天はクリスタルの放つ光のように不安定で、明らかに「生成と消滅」が交叉した、儂く曖昧な存在にすぎなかったかもしれない。こうした言説のパターンは、星の輝く夜空が結局、小さな光⇄影の集合体に他ならず、嵐の前の静けさと形容される凧の状態にあり、その前途には警告とともに、異様で、ぎしぎしと身体の軋む、耐えられないほどの緊張が待つことを暗示する¹⁰。スタンリー・キューブリックはもとより、ヴォルフガング・ペーターゼンの映画『U・ボート』（1981年）同様、これが無駄

な説明的シーンを削ぎ落とし、観客の想像力をむしろ浮上させた、優れた監督の効果的な編集テクニックであり、彼らは沈黙の時から絶えず、泡立つ雲流や波濤の変化をもたらす場面転換へ向かったといっている。

あたかも渚に佇立し、純粹で、つぶらな瞳の奥に遠い雲、あるいは拡散された苦しみの影をはっきり映すかのごとく、ゼロの焦点を射抜くゲーテの視線（カメラ・アイ）は、降り積もる雑多な星の光を収斂しつつ、繊細であえかな愛の像へと結晶させたことは間違いない。人間の衝動で、くるりくるりと入れ替わる光と影——これは主として、一幅の水墨画に通底し、日本人による「縮景」を形成した濃密な雰囲気だったと考えられる。要するに、ゲーテの詩の味わいが日本人に受け入れられ、庭園の「宴」というべき記憶の場に留められるのも、決して理由のないことではない、と本稿は強調したいのである¹¹。

3. 聖書の自然描写に関する断章

スウェーデンのノーベル文学賞作家パール・ラーゲルクヴィスト（1891-1974年）の歴史小説『バラバ』（1950年）によると、イエスの復活を証拠立てようとして殺された女の遺体を運ぶため、主人公の盗賊バラバは陰翳に彩られ、鋭くそげた彫りの深い相貌で、エルサレムの街を離れ、時おり砂塵舞い散る荒涼としたユダの荒野を越えた。そして、死海の彼岸の山々を静かに眺め、宵闇がその山々の上に降りてくるのを凝視したという。この作品において、バラバは極端な形ながら、まるで周縁（edge）に置かれ、現実世界の片隅でより多くの光を求めざるを得ない、きらりと煌きつつ漂う落葉のような「孤独の気配を滲ませた人間」、つまり「夜の国の旅人」として捉えられている¹²。

ところで、遠藤周作『イエスの生涯』（1973年）は、ユダの荒野（ヘブライ語：ミドバル）を、ユダヤ人たちにとって不安と恐れ地域だったが、同時に、そこは彼らが神を考え、孤独になり、瞑想する場所であったと述べる。ワジと呼ばれる潤れ川の跡が走るように、夏の乾季、「死海のほとり」には凄まじい暑さが続く。だが、日付を指示する用語はないものの、「史的イエス」の受難物語と合致する新約聖書の伝承から判断して、バラバがモアブの山影を見つめていた頃は、およそ紀元30年の春でなければならない。イエスが死んだとされる時点は季節の変わり目にもかかわらず、依然として雨季（秋→冬→春）を踏まえ、過越祭の暗闇のなかには夜の冷気が立ち籠めていたであろう¹³。

この状況を語るうえで、新約聖書学者の滝澤武人が、シナイ山（ジェベル・ムーサー）へ3月上旬登ったとき、（密雲より猛然と）雷鳴が轟き、稲妻が走り、雹が降り、山頂付近にはうっすらと雪さえ積もっているのを見聞したことは意味深長である（出エジプト記19-20章を参照）¹⁴。かくして、イスラエルに雨季の到来を告げる自然現象はいくつか挙げられるが、そこで雲の果たす役割を黙過することは到底できない。実際、17世紀の俵屋宗達『風神雷神図屏風』からも窺えるとおおり、雲は風に乗って多様に変化し、良きにつけ

悪しきにつけ、人々の夢見る力を育て真実の開示へと導く妙材料になるからである¹⁵。

それでは、エルサレムから旅立ち、各地を流れゆくバラバの眼前を何が消え去ったのか。夕日が巨大な火球となって地平に尽き、波濤に似通った赤く煙る雲（ヘブライ語：アーナーン）がうねり、やがて紫色へ移った蒼茫の空が果てしなく広がるとき、彼のまぶたには突然、一塊の、重苦しく静まりかえる、虚しく黒っぽい灰色の、ただ茫漠とした雲（ヘブライ語：アナーナー）を切り裂く雷の影像と角笛のごとき雷鳴が迫って、見まがうすべもなく通り過ぎたのではあるまいか¹⁶。この場合、バラバの内面と交響するフレーズが旧約統編に登場することに、改めて注意を払いたい。それは、知恵の書／ソロモンの知恵 5 章 9-12 節であり、漂泊する雲水にみる心象景観と遜色ないイメージを伝えてくれる¹⁷。

知恵の書／ソロモンの知恵 5 章 9-12 節（旧約統編）より

- 9 すべては影のように過ぎ、
うわさ話のように消え去ってしまった。
- 10 波を切って進む船のように、
通り過ぎるとその跡は見えず、
竜骨で分けられた波間はその跡形も残さない。
- 11 空を舞う鳥のように、
飛び行くあとには何も残らない。
鳥は軽い空気を羽で押しやり、
飛び進む力がかき分け、
羽ばたきで打ち散らす、通り過ぎたしるしは後には何も見られない。
- 12 あるいは、的に向かって放たれた矢のようだ。
切り裂かれた空気はすぐ元に戻り、
矢の通った道は分からない。

いかにも詩的修辞の横溢した華麗な文体であるが、どのような形象が骨子になっているかが判然としない。ただし、雷と稲妻の矢、それらが巻き起こす海陸の嵐の襲来を印す同書 5 章 20-23 節の並行部分を分析することで、ここには、古代ヘブライ人の魂を領していた知恵がぎっしり詰まっていることがわかる¹⁸。

雅歌のテキストから察知されるとおり、エルサレムの歴史は基本的に、山国の民の生きた証であり、「山を越え、丘を跳んでやって来る」人間と風に揺らぐ恋の炎を刻む（雅歌 2 章 8 節他を参照）。それゆえ、古代ヘブライ人が、臍たけたスズメ（鶯）のような山の精霊（sprite）が「山母」から化身し、時に恐ろしい「山姥」へ豹変する様子を理解して

いたのは疑いない¹⁹。彼らにとって、エルサレムを包む山々を飛翔する鳥の正体は、「雷の鳥 (Thunderbird)」に等しいものであったろう²⁰。しかし、古代ヘブライ人は、長い移動と定着の過程で獲得した歴史的記憶により、エルサレムと反転した世界である、荒れ狂い咆哮する海の情景も充分看取することが可能だった。——彼らが空を海に見立てたとしたら、その物語は確かに、旧約聖書の旅する伝統とその系譜へ遡らなければならない。

真鍋俊照によれば、秘奥の世界を描いた密教美術の美の観念のなかには、動的なもの（観想によって得られる憤怒像など）と静的なもの（観想によって得られる如来・菩薩像など）が連続して認められ、チャールズ・ディケンズ(1812-1870年)が遺した『二都物語』(1859年)を髣髴させるように、これらの〈二分心〉は表裏一体となり、双方の身体を固着させて互いに纏れ合いながら、暗黒の宇宙で「虚空の舞」を踊るように意識される²¹。こうした想念に照らしてみると、ユダヤ人が「近代」に接して見舞われた大いなる悲劇は、それ自体、ドイツ語の「ブリッツ (Blitz)」—電光や雷撃に遭遇したような出来事であったが、彼らが青天の霹靂たるその恐怖を見据え、しぶとく戦い抜き、ついに冥府（ヘブライ語：シェオール）からの脱出をかなえた所以は、光と影を伴う雷の2面性に通暁する、古代ヘブライ人の知的遺産に相違なかった²²。

4. おわりに —— 聖書の世界を旅することの意味 ——

さて、山田風太郎『夜よりほかに聴くものもなし』(1962年)に載せられた『一枚の木の葉』(第7話)には、観光地という一定の景色へ凝縮される人間模様を好む日本人の傾向性が、旅行と結合してシンボリックに表現されている。本稿の第2節では、このような日本人の考え方を、あえてヴェルレーヌ的な「縮景」と名づけ、ゲーテの詩を吟味することにより、そこに「生成と消滅」が交叉した、光と影の様相が発見されることを議論した。

上記の前提に立ち返り、本稿の第3節では「雷」を通し、聖書の自然描写の断面を記述してみた。その結果、イスラエルの自然とそれを取り巻く古代ヘブライ人、乃至ユダヤ人の物語にも類似した特徴を炙り出すことができた。したがって、光と影が媒体となって、ドイツ——（日本）——イスラエルという3層構造に環境面で深く関与したことは明らかだろう。本稿の著者はエルサレム滞在中（1988-1996年）、ヤド・ヴァシェムのあるヘルツルの丘で、激しい稲妻が走るのを目の当たりにし、そんな風に感じたが、もしも留学生の生活を広義の観光と考えれば、観光はやはり、人間の心の旅を映し出す鏡なのである。

最後になるが、「世界遺産」などの登録を含めた、観光行政と誘致活動のありようは示唆に富む。たとえば、スイスに本拠を置く財団が運営するウェブサイト「新・世界の7不思議」の発表によると、インターネット投票で、イスラエルの死海は最終選考（2011年11月）に漏れたけれど、イスラエル観光省の目指した“アピール”が営利目的の宣伝ばかりでなく、むしろ、「聖書の世界を旅することの意味」を伝達する意図に貫かれてい

たことにも留意しなければならない²³。それは、文化人類学の概念を応用した方法論だが、グローバリゼーション⇔グローカリゼーションという（ディアスポラの）図式に依拠した戦略的な視座であり、環境保護を主眼にした新しい観光の姿を模索するため、日本でも今後の課題にすべきだろう²⁴。その際、有効な糸口となるのは、観光における「果てしない物語（The Neverending Story）」のドラマトゥルギーであり、寓意に満ちた児童文学で有名なミヒヤエル・エンデが描くとおり、人間の動静と循環的時間のなかに〈ビオトープ〉を探そうとする、我々自身の真摯でひたむきな努力が、今こそ求められることを肝に銘じたい。

注

1. 司馬（1994）、156–157頁は、「…… 禅がしきりにとなえて日本の武道に影響をあたえた静中動あり・動中静ありといったたぐいの思考法も、華嚴経から出た」と述べる。
2. 剣法（陰流／新陰流）の奥義に能の世界をリンクさせた時代小説として、山田風太郎『柳生十兵衛死す』（1992年）が面白く、本稿もその発想や筋立てから刺激を受けた。
3. 山田、鹿島（2010）、34–38頁および62–64頁。
4. 「ものがたり観光」の定義に関しては、高田（2011）を参照。たとえば、高田（2011）、55頁は河合隼雄（ユング心理学）の見解を引き合いに出し、「事実についての説明だけでは、聞く人の心が動かない。そこに話し手の『思い』が投影された『語り』が加わることで初めて、事実への興味と関心が呼び起こされる」と主張する。
5. 本稿では、視覚的なアングルの「縮図」より広義の概念を設定している。司馬（1994）、104頁他を参照。ある意味で、この種の趣向は、手塚治虫『聖女懐妊』（1970年）にも流れる通奏低音だろう。
6. 死生観を司る（見えざる）音の世界は、ヨーロッパの人々を結びつけ、彼らの生活に馴染んだ大事な絆であった。たとえば、「疾風怒濤期（Sturm und Drang）」にも活躍した、ドイツの劇作家フリードリヒ・フォン・シラー（1759–1805年）に「鐘の歌」という詩があるが、その冒頭にはいみじくも「生ける者に呼びかけ、死者を悼み、嵐をくじく」と記されている。阿部（1993）、296–307頁を参照。
7. 池田（2012）、305頁を参照。旧約聖書に登場する「使者たち（angels）」の所作に関しては、Rofé（1969）が詳細な分析を行なっている。
8. 池田（2011）を参照。松本卓夫聖地旅行日記に関しては、すでに池田（2007）、58–67頁でも紹介されている。松本卓夫（1888–1986年）は青山学院大学神学部教授を務め、1925年7月、2度目の米国留学からの帰り道に聖地を旅行し、そのときの日記の抜き書きを翌年、同神学部発行『學友會誌』（1926年12月号）に掲載したのが「聖地の旅」である。当時、イスラエルは乾季に相当し、雲のない夜空が見えたはずである。加えて、ゲーテの詩

『真夜中に (*Um Mitternacht*)』を参照。

9. 池田 (2011), 136-137 頁; 池田 (2007), 62 頁。
10. 回り灯籠のような「生成と消滅」の様相について、哲学者アリストテレスの所論が知られているが、シュテファン・ツヴァイク (1881-1942 年) も「近代」のウィーンで、この命題を作品に反映させた作家と考えられる。「昨日の世界」に思いを馳せた、彼の代表作『人類の星の時間』(1927 年) に関しては、Zweig (2010) を参照。光 ⇄ 影という交換可能性に関しては、古畑 (2008), 29 頁, 34 頁 (注 46, 注 47) を参照。
11. ウルトラセブン第 49 話『史上最大の侵略 (後編)』(1968 年) によると、「私が愛したウルトラセブン」は最終的に、単なる美しい明星でなく、一筋の、より鮮やかな星の光として、いまだ夜空であった西の方向へ飛んで行く。これは古く新しい、日本的なるものを見事に蘇らせた名作だろう。関連認識として、白幡 (2000) が有意義である。
12. この問題に関しては、ラーゲルクヴィストの詩集『夜の国 (*Aftonlandet*)』(1953 年) が注目に値する。ラーゲルクヴィスト (1974), 179-182 頁 (解説補遺) を参照。まことに奇しき因縁と思うが、山田風太郎『女死刑囚』(1950 年) も瀬戸際に立ち、千々に乱れる人間の心理を、おぼろな曇りガラスを通して叙述する。そんな愛の暗さを帯びた感性について、本稿は、Brinkman (1983) から知見を得た(コリントの信徒への第一の手紙 13 章 12 節を参照)。
13. 滝澤 (1997), 210 頁。本稿は、雅歌 2 章 11 節を修正して考えている。
14. 滝澤 (1997), 171-172 頁。さらに、雅歌 4 章 8 節を参照。ヘブライ語で雷はラアム、稲妻はバラク (バーラク) と呼ばれる。ことに、バラクという同名の英雄が登場する、士師記 5 章 (デボラの歌) の自然描写は躍動感にあふれ、その 4-5 節も「…… 地は震え、天もまた滴らせた。雲が水を滴らせた。山々は、シナイにいます神、主の御前に、イスラエルの神、主の御前に溶け去った」と声高らかに喝破している。
15. イスラエルでは 4 月頃から乾季へ入ってゆくが、9 月頃から雲が出現しはじめ、11 月頃に「ヨレー (矢を射る者)」と称される強い風雨が訪れ、本格的な雨季を迎える。
16. 古畑 (2005), 70 頁 (表 1) は、雷 ⇄ 空 ⇄ 風 (男性名詞) だけでなく、雲 ⇄ 海 ⇄ 波 (女性名詞) という同値の形式も検討している。バラバはイエスの処刑現場で、全地が暗くなるのを目撃したが (マルコ福音書 15 章 33-38 節他を参照)、その原因を雷雲などの天変地異に帰すことは可能である。
17. 紀元前 1 世紀、アレクサンドリアで成立したと解釈される、知恵の書 / ソロモンの知恵に関しては、日本聖書学研究所 (1977), 15-65 頁を参照。
18. 原型としてのギリシア神話、とりわけホメロス『オデュッセイア』の痕跡を考慮する必要があるが、サムエル記下 22 章 8-16 節 (詩編 18 編 8-16 節) を根拠に旧約聖書と関係づけるのは自然な成り行きであろう。事実、人間の投げやりな振舞いに対する寂寥感や暗澹たる気分を、エレミヤ書 8 章 7 節と対比することができる。

19. この問題に関しては、諸星大二郎の短編集『闇の鷲』（2009年）を参照。
20. 古代ヘブライ人と聖山との関係について、Emerton（1993）が端的に説明する。古代オリエントの知恵文学『アヒカルの言葉』でも、人間に制御できない鳥の〈力〉が表象されていた。ギリシア神話の雷神ゼウスと共通する、古代オリエントの雷神（嵐の神）ハダド＝テシュブの属性に関しては、池田（2002）、9頁を参照。詩編68編5節では、ハダド神の修飾句「(雨)雲を駆って進む者」がヤハウエ神に対して用いられている。
21. 真鍋（2002）、321-323頁を参照。「稲妻の矢」と覚しき、男女の性愛にまつわる感覚的比喻に関しては、小松左京『あなろぐ・らう——または、“こすもごにあII”——』（1976年）が、真鍋（2002）の補完情報を提供してくれる。詩編と〈二分心〉の仮説に関しては、本村（2005）、168-182頁以下を参照。なお、空海の『即身成仏義』には「是の如き等の身は縦横重重にして、鏡中の影像と燈光の渉入との如し。……」と記され、密教と禅宗の相同性が片雲の風に誘われるように出てくる。梅原（1980）、71頁。その点、司馬（1994）、145頁が伝える智積院の修法は示唆的なエピソードといえよう。
22. シェオールに関しては、イザヤ書5章14節を参照。詩編90編5-6節やフレデリック・フォーサイス『オデッサ・ファイル』（1972年）を丹念に読むと、ひっそりとした草花のごとく、悲哀漂わせ変遷してゆくヘブライ的人間の在り方を知ることができる。
23. この記事に関しては、『みりとす』第119号（2011年12月号）、40-41頁を参照。
24. 歴史的概念としての「ディアスポラ」に関しては、駒井（2009）を参照。

参考文献

- ・阿部謹也（1993）『中世の窓から』、朝日選書。
- ・池田裕（2002）「風の足跡——北シリア、アイン・ダラ神殿に寄せて——」、『筑波大学地域研究』第20号、1-17頁。
- ・池田裕（2007）「序章——旧約聖書のこころ——」、池田裕、大島力、樋口進、山我哲雄編『新版総説 旧約聖書』、日本キリスト教団出版局、16-67頁および512-513頁。
- ・池田裕（2011）「松本卓夫聖地旅行日記1925」、青山学院大学神学科同窓会『キリスト教論集』第54号、129-145頁。
- ・池田裕（2012）「草枕——人と聖書と自然（Grass for Pillow : Man, the Bible and Nature）」、手島勲矢編『近代精神と古典解釈——伝統の崩壊と再構築』（高等研報告書1102）、財団法人国際高等研究所、297-310頁（Epilogue）。
- ・梅原猛（1980）『空海思想について』、講談社学術文庫。
- ・古畑正富（2005）「思想化される大地と歴史文学論——何故、大地は海のごとく、女性形で表

- 現されるのか？ 印欧語の自然形象の意味を探る——, 古今書院『地理』第50-8号, 67-75頁。
- ・古畑正富 (2008) 「オクタビオ・パスの作品に見るメキシコ民衆の心性——『孤独の迷宮』をめぐる問題を踏まえて——」, 『京都ラテンアメリカ研究所紀要』第8号, 23-38頁。
 - ・駒井洋監修・編, 江成幸編 (2009) 『ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ』(叢書グローバル・ディアスポラ4), 明石書店。
 - ・司馬遼太郎 (1994) 『空海の風景 (上)』改版, 中公文庫 (原著: 中央公論社, 1975年)。
 - ・白幡洋三郎 (2000) 『花見と桜——日本的なるもの再考』, PHP新書。
 - ・高田公理 (2011) 「『ものがたり』に触発される観光行動」, 『ものがたり観光行動学会誌』第1号, 52-60頁。
 - ・滝澤武人 (1997) 『人間イエス』, 講談社現代新書。
 - ・日本聖書学研究所編 (1977) 『聖書外典偽典2』(旧約外典II), 教文館。
 - ・真鍋俊照 (2002) 『邪教・立川流』, ちくま学芸文庫。
 - ・本村凌二 (2005) 『多神教と一神教——古代地中海世界の宗教ドラマ』, 岩波新書。
 - ・山田風太郎, 鹿島茂 (2010) 『鹿島茂が語る山田風太郎』, 角川文庫。
 - ・ラーゲルクヴィスト, ペール (1974) 『バラバ』(尾崎義訳), 岩波文庫。
-
- ・Brinkman, J.A. (1983), “Through a Glass Darkly: Esarhaddon’s Retrospects on the Downfall of Babylon”, *Journal of the American Oriental Society* 103, pp.35-42.
 - ・Emerton, J.A. (1993), “The ‘Mountain of God’ in Psalm 68:16”, in Lemaire, A. and B. Otzen eds., *History and Traditions of Early Israel: Studies Presented to Eduard Nielsen*, Leiden/New York/Köln, pp.24-37.
 - ・Rofé, A. (1969), “Israelite Belief in Angels in the Pre-Exilic Period as Evidenced by Biblical Traditions”, Ph.D. dissertation, Hebrew University of Jerusalem (Hebrew).
 - ・Zweig, S. (2010), *Sternstunden der Menschheit: Vierzehn historische Miniaturen*, Frankfurt am Main.

観光資源としての万葉歌碑

—— 新潟県佐渡市の場合 ——

市瀬雅之*

Manyô Poem Epitaphs as Tourism Resources: An Example from Sado City, Niigata

ICHINOSE Masayuki

『万葉集』に収められた歌（以下、「万葉歌」と呼ぶ。）は、風土論¹の隆盛によって、詠み込まれた地域に受け入れられてきた。顕彰して建てられた歌碑は、全国に1,200基を超える²。ただし、万葉歌に残された地名は、諸説があつて定説をみないことがある。具体的な場所が特定できないまま歌碑が建てられている場合もある。無条件に読むと、歌がそこで詠まれたかのような錯覚に陥る。これは関連する歴史にも同じことがいえる。

例えば、新潟県佐渡市畑野町にある物部神社の境内には、

万葉歌人／穂積朝臣老邸跡

天地を歎き乞いの禱み幸くあらばまた還り見む滋賀の唐崎

畑野町長 河原俊秋謹書

と表書きされた歌碑が、1993（平成5）年に建立された。「穂積朝臣老邸跡」と記されたままに読むと、作者がここに住みながら、滋賀県の唐崎を思いやった風景が思い浮ぶ。とはいえ、ここに当時を認めるのは躊躇われる。また、「穂積朝臣老」が都人であり、歌に詠み込まれた地名が「滋賀の唐崎」を表すことを鑑みると、奈良の都との往還を顧みないまま、佐渡市にだけ目を向けるのは、部分だけを切り取り、全体を見ないような物足りなさを残す。

本稿では、当該歌碑が表す内容を確認した上で、佐渡市内のドライブコースをひとつ提案しておく。また、当時の都が存在した奈良市から北陸道を経由して、佐渡市の万葉歌碑と古代史を周辺地域のそれと関連づけることで、地域相互の話題の活性化を目指す。

* 梅花女子大学 文化表現学部 日本文化創造学科

1. 万葉歌碑の読み方

はじめに当該歌碑（図1）を一覧しておく。「穂積朝臣老（以下「老」と呼ぶ）」が「万葉歌人」と記されたのが目につく。「老」が特別にそう呼ばれていたり、そのような職業があったわけではない。今日の私たちが、「万葉集に歌を残した人」たちをそのように呼んでいる。

「老」の配流については、『続日本紀』の722（養老6）年1月20日条を開くと、正四位上の多治比真人三宅麻呂が謀反の誣告をした罪により、正五位上の穂積朝臣老が天皇を名指しで非難した罪により、それぞれ斬刑に処せられた。ただし、皇太子（首皇子、後の聖武天皇）が死一等を減じて、三宅麻呂が伊豆に、「老」が佐渡に配流されたとある。「老」が帰京を許されたのは、740（天平12）年6月15日であった。18年近くもの長い時間を、佐渡国に過ごしたことが知られるのだが、『万葉集』には、「老」の詠んだ歌が他に残されていない。

これは、「老」が直ちに佐渡国で歌を詠まなかったことを意味しない。『万葉集』には、北陸道の往来に、越前国より先を詠む歌を多く残さない傾向が認められる。奈良の都に住む貴族たちを中心に編まれた歌集であることを鑑みると、集められた歌には、都の関心が反映している。越中国に詠まれた歌が多く残されたのも、都から、746（天平18）年に守として赴任した「大伴家持おおとものやかもち（以下「家持」と呼ぶ）」の影響が大きい。

当該歌碑も、記された歌（巻13・3241番歌）の内容だけを見ると、「老」が「天地（の神）に（自身の身の上を）嘆いて乞い祈り、無事であったらまたかえりみよう滋賀の唐崎を」と詠んでいる。移送される佐渡国での暮らしをあれこれと案じることより、唐崎まで生きて戻ることを願っている。ここに至れば、都まで帰ることができるとの思いが背後にあつてのことであろう。一見すると佐渡市には無縁な歌のようにも思われる。こうした歌碑が、佐渡市の中でも畑野町にある物部神社の境内に建てられた。それが何を表しているのかが問われる。



図1 万葉歌碑

物部神社（図2）の名は、平安時代の『延喜式』を開くと記されている（式内社）。『続日本紀』の791（延暦10）年9月条には、従五位下を叙された記事が残されている。当該歌碑は、この神社を「邸跡」としている。『畑野町史』³を開くと、1821（文政4）年に「穂積孝（隆）雄」⁴という人物が、物部神社に扁額を寄進したことに機縁が求められている。扁額を奉納した穂積氏が、神社名となっている物部氏と「宇摩志麻遲命」⁵を同祖にすることから、穂積氏に属する「老」が、物部神社の創建者にみなされていったという。『畑野町史』が指摘するように、ここから「老」と物部神社との関わりを史実として説くことは難しい。



図2 物部神社

注目すべきは、奈良時代の史実を追究することではなく、1821（文政4）年の扁額奉納をきっかけに、物部神社の側が、由緒に「老」の姿を見出してゆくところにある。そこには物部神社を守る側が見出す「老」の存在が認められる。もう少し積極的な言い方をすると、物部神社の「老」が新たに誕生したといつてよい。

佐渡市外からこの地を訪ねる者たちにとっては、従五位に叙せられ、式内社に数えられた物部神社の静かなたたずまいを楽しむだけでなく、1821（文政4）年から地域に見出された「老」を知ることができる。誕生した「老」には、風土的な親しみが感じられる。歌碑はその象徴的な存在といえる。

物部神社には、「老」の享受史を辿ることができた。これが当該の万葉歌碑を訪ねた成果になる。ただ、碑に刻まれた歌を詠んだ、奈良時代の「老」を探そうとしてみると、見つけることができないのが心残りだ。どこに住んでいたのかなどを探す手立てはないのだが、「老」が過ごした時代を、市内にもう少し訪ね考えておく。

2. ドライブコースの提案

物部神社の境内に建てられた万葉歌碑には、1821（文政4）年の扁額奉納にはじまり、神社の側が創建者とみなしていった「老」を訪ねることができた。

ここでは、碑に刻まれた歌の作者として、あるいは722（養老6）年から18年近くを過ごした「老」を求めて、奈良時代を辿ることのできる史跡をいくつか訪ねておく。

今回は、フェリーで両津港に到着したところから出発してみる。先に述べた物部神社は、公共の交通機関で行くのが難しい。車を利用し、県道65号線を畑野町方面に進む。畑野中学校を目安に、畑野駅前の交差点を県道161号に入りしばらく行くと参詣することができる。

ここにひとときを過ごしてから、県道65号まで戻り、真野方面に進むと田園の広がる道沿いに、国府の関連史跡として下国府遺跡^{しもこう}を訪ねることができる。さらに、県道190号線に入っていくと国分寺跡を見ることができる。

『続日本紀』を開くと、国分寺の建立は、国分尼寺とともに、聖武天皇が741（天平13）年3月に詔したとある。史跡（図3）は、佐渡市も一国としてこれに応じた結果を表す。とはいえ、佐渡国は、743（天平15）年2月11日に越後国へ統合される。作業は順風とはならない。752（天平勝宝4）年に入ると、9月24日に渤海使が島へ漂着したことが重く受け止められたのか、同年11月3日に一国へ戻され、守一人と目一人が任ぜられている。国分寺の完成には、それなりの時間が費やされた可能性がうかがわれる。こうした動きに先立って、721（養老5）年8月19日には、佐渡国が越前按察使の管轄に含まれてゆく記事が認められる。古代律令社会を支える一国としての整備が進めばこそ、先の万葉歌碑で話題にした「老」の配流が、その翌年に実施可能になる。仏教政策も、例えば737（天平9）年3月3日条には、国ごとに釈迦仏像や挟侍菩薩を造り、大般若経を写すことを命じた記事が残され、翌738（天平10）年4月17日には、国家の隆平を願って最勝王経の読経が命じられたとある。国分寺や国分尼寺を建立する詔は、その先に表されている。



図3 佐渡国分寺跡

このようにみると、「老」が過ごした佐渡国は、奈良の都から遠く離れた地ではあったが、孤立していたわけではない。古代律令社会を担う一国として整備が進む歴史とともにある。配流という表現が、よい印象を与えないのかもしれないが、「老」が佐渡に過ごした史実も、その過渡を語る重要な話題のひとつになる。

「老」が帰京する740（天平12）年には、聖武天皇によって、都が平城京から恭仁京に遷されている。翌年には、東大寺の盧舎那仏建立が目指された。「老」は、帰京した後も、慌ただしい状況の変化に追われ続けることになる。

国分寺跡から、県道350号線に車を向けると、『続日本紀』の721（養老5）年4月20日条に、雑太郡から賀茂郡と羽茂郡が分けられたとあることが思い返される。佐和田方面でも羽茂方面でも、車を走らせれば、それぞれに個性を備えた海と町を楽しむことができる。



図4 清水寺

ただ、ここでは一度にそこまで足を伸ばすのを控え、85号線へ戻り新穂の「清水寺」（図4）をまわるルートを提案しておく。

清水寺は、表記だけではなく外観からも京都の清水寺をモデルにしている様子がうかがわれる。由緒には805（延暦24）年の創建とあるのだが、恐らくそれを大きく下る。

しかし、ここにも創建時の史実そのものを問うばかりではなく、都との往還が繰り返される中で、都の文化が風土としてどのように受け止められ、映し出されてきたのかに目を向けてみるのが重要なのであろう。

清水寺の境内に、奈良時代から平安時代以降への移り変わりを静かに受け止めてゆくことで、以後の享受史と展開も改めて辿ってみたい気持ちに誘われる。

今回は、このまま古代史を離れ県道81号を選びとキの森公園を訪ねることを提案しておく。佐渡市を訪ねるタイミングとしては、朱鷺ににぎわう今も見ておきたい。さらに県道850号にてで両津郷土博物館を見学しながら両津港に戻ることができる。

3. 佐渡市を目指して

物部神社の万葉歌碑を新たな話題にしなが、両津港を起点にして、「佐渡の万葉歌碑と古代史」をめぐるコースのひとつを提案した。近くにあるという理由で、地域の名勝や史跡をまわるのもよいが、時代や話題を絞り訪れる先を括ることで、メリハリのある観光ができると考えている。また、時代を分けることで、視点を変えて同じ地をくり返し訪れることが可能になる。学術のための臨地研究というより、観光を重視して、訪れる時点の話題も加味しながら、柔軟なコースを示した。

ここではもうひとつ、旅をする人を迎える側ではなく、旅にでかける側から、佐渡市に着くまでの道中にも目を向けておく。というのも、物部神社境内の碑に刻まれた歌には、『万葉集』中に次の長歌が対で記されているためである。

おほきみ みことかしこ
大君の 命 恐み 見れど飽かぬ 奈良山越えて 真木積む 泉の川の 早き瀬を
棹さし渡り ちはやぶる 宇治の渡りの 激つ瀬を 見つつ渡りて 近江道の 逢
坂山に 手向して 我が越え行けば 楽浪の 志賀の唐崎 幸くあらば またかへ
り見む 道の隈 八十隈ごとに 嘆きつつ 我が過ぎ行けば いや遠に 里離り来
ぬ いや高に 山も越え来ぬ 剣 大刀 鞆ゆ抜き出でて 伊香山 いかにか我が
せむ 行くへ知らずて (13・3240)

碑に刻まれた歌は、この歌の反歌としてある。左側に記された注(=左注)によると、校合された「或本」が短歌のみを「老」の歌と伝える。

長歌の内容をみると、大君の仰せが恐れ多いので、いくら見ても見飽きるこのない奈良山を越えながら、木津川の速い流れを船で渡る様子が詠まれている。宇治川の激しい流れが瀬まで届いているのを見ながら渡り、山科へ出て、近江路に逢坂山を目指すルートが選ばれている。都のあった奈良市から JR を使って出発すると、奈良線の車窓にこれらを楽しむことができる。京都駅からは特急に乗り換えて進む路線に、古代の北陸道を重ねられる。

京都市から近江(滋賀県)に入ると、歌碑にも詠まれていた唐崎を眺めることができる。ここに無事な帰京を祈ると、当該歌碑の内容にもっとも近い。列車に揺られながら琵琶湖の西側を進むと、長歌には、「老」たちが線路の傍ら近くの道を、曲がり角にあうたびに、嘆きながら過ぎゆく姿が表されている。ずいぶん遠くまで故郷を離れてやってきてしまった、山を越えてここまで来てしまったことが思い返されている。その先には、剣を鞆から抜く表現を交えながら、伊香山に自身の不安を重ね閉じられている。伊香山の所在には諸説あるが、賤ヶ岳あたりを目安にすると便利だろう。当該歌碑に記された反歌は、その先を詠むことなく、長歌に「楽浪の 志賀の唐崎 幸くあらば またかへり見む」と表した

思いを繰り返す。

JR 北陸本線にその先を求めてみると、武生駅の東側には味真野苑が造られ、歌碑にこの地に配流された中臣宅守（以下「宅守」と呼ぶ）とこれに応える娘子の贈答歌を読むことができる。先に「老」が送られた佐渡国が遠流地であれば、越前国は近流地として知られている。「宅守」がいつ配流されたのかはわからないが、『続日本紀』では740（天平12）年6月15日に出された恩赦の対象から名指しで外されている。送られてまだそれほど時間を経っていなかったと考えられる。佐渡国に送られた「老」は、この時に帰京が許された。恩赦は、翌741（天平13）年9月8日にも出されており、「宅守」はこれによって帰京したと考えられている。「宅守」が数年の配流であったのに対して、「老」の18年は、近流と遠流の差異を際立たせる。

もちろん、本稿は佐渡市への旅が目的なので、ここで下車して味真野苑を訪ねることを勧めているのではない。越前市にみる万葉歌と古代史については、機会を改めて記す必要がある。

ここでは、奈良時代の文学と歴史をキーワードに、越前市の万葉歌と古代史を楽しんだ人たちが、機会を改めて佐渡市を訪れるきっかけを求めている。もちろんそれは、逆も想定してのことである。

佐渡市への旅には、道中の車窓にこうした話題を提供することで、「老」を訪ねる準備を進める。或いは越前国を先に訪ね、次に佐渡国を訪ねるなど、JR線や北陸高速道路を使った旅を重ねる提案をしたい。

JR 武生駅の西側には、国府跡の候補地がいくつか推定されている。「宅守」や「老」が配流された年次を少し下ると、747（天平19）年に越中国から越前国へ転出した「大伴池主（以下「池主」と呼ぶ）」が、万葉歌に館で催した宴の様子を伝える。その多くが、746（天平18年）に越中守として赴任した「家持」との贈答歌になっている。

「家持」が赴任した越中国の国府は高岡市にある。ここでは万葉のふるさとであることを話題の中心に据えて、年間を通じて様々なイベントが催される。その中核になる施設として、高岡市万葉歴史館が大きな役割を果たす。ここを起点に歌碑巡りをするだけでも市のガイドマップ「いま、高岡は万葉に燃えている」には、周辺に41基もの歌碑を紹介している。これはこれで、市全体がひとつの大きなテーマパークのようになっており、ゆっくりめぐりたいとの思いを抱かせてくれる。

また、「家持」と「池主」の交流を鑑みると、越前市から佐渡市への旅の間に、高岡市を挟んでみるのも楽しい。地域別に万葉歌や古代史を語るのもよいが、これらを積極的につなぎ合わせてゆくことで、古代という時間の中にみえる北陸の和歌と歴史を大づかみに捉えながら、佐渡市なら、それがどのような位置を占めているのかを思い描けるように訪ねたい。

高岡市を過ぎ富山市に入ると右手に立山連邦が広がる。『万葉集』を開くと、747（天平19）年4月27日の日付で、越中国に守として赴任していた「家持」が、高岡市の雨

晴^{はらし} 海岸からであろうか、遠く立山を見やり次のような歌を詠んでいるのが思い返される。

立山の賦一首 并せて短歌 この山は新川^{にひがほのこほり} 郡にあり
 天^{あまぎか}離^{ひな}る 鄙^{ひな}に名かかす 越^{こし}の中 国内^{くぬち}ことごと 山はしも しじにあれども 川はしも
 さはに行けども 皇^{すめかみ}神^{うしは}の 領^{うしは}きいます 新川の その立山に 常^{とこなつ}夏^{なつ}に 雪降り敷きて
 帯^{かたかひがわ}ばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに 立つ霧の 思ひ過ぎめや あり通ひ
 いや年のはに よそのみも 振り^き放^{はな}け見^みつつ 万^{よろづよ}代の 語らひぐさと いまだ見ぬ
 人にも告げむ 音のみも 名のみも聞きて ともしぶるがね (17・4000)

立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし (17・4001)

片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む (17・4002)

長歌には、都に対置する表現として鄙に名高い越中国の各地に山は数々あるが、川はたくさん流れているが、国つ神の鎮まりいます新川郡のあの立山には、一年中雪が降り敷かれ、その裾の片貝川の清い瀬に朝晩ごとに立つ霧のように崇める気持ちが消えようか、道を行きながらずっと毎年遠くからでも、振り仰いで見て、万代の語りぐさとしてまだ見たことのない人にも話そう、噂だけでも聞いたなら羨ましがるであろうと、立山を名勝として伝えようとしている。第1反歌にはその理由が、立山に振り置いた雪は一年中見ても飽きないその神々しさのゆえであろうとされ、第2反歌では、片貝の川の瀬も清く行く水のように絶えることなく通い続けて見ようの思いが詠まれている。

車で北陸高速道路を進むなら、蓮台寺PAの下り線に立ち寄ることをお勧めする。『古事記』上巻で、八千矛^{やちほこのかみ}神(大国主神の別名)が求婚^{ぬなかわひめ}した沼河比売^{ぬなかわひめ}の銅像が立てられている傍らに、

沼名河之 底奈流玉 求而 得之玉可毛 拾而 得之玉可毛 安多良思吉 君之老
 落惜毛

と原文で記された万葉歌碑が立てられている。これを書き下すと、

沼名川の 底なる玉 求めて 得し玉かも 拾ひて 得し玉かも あたらしき
 君が老ゆらく惜しも (13・3247)

のようになる。冒頭の「沼名川」は地名ともそうでないともいわれている。歌碑は、糸魚川市の姫川を想定して建てられている。その川の底にある玉は、苦勞して手に入れること

ができる玉であるなあ。拾い求めて手に入れることができる玉であるなあ。その玉のようにもったいないあなたが歳をとってゆくのが惜しいことよと訳されることが多いのだが、「かも」を反語で捉えると、川の底の玉は手に入らない存在になる⁶。結句が五・三・七で結ばれているところに、古体を備えている。

前掲した3240番歌が「剣大刀 鞆ゆ抜き出でて 伊香山 いかにか我がせむ 行くへ 知らずて」と結んだ先は、時間の経過とともに、「池主」と「家持」等が、越前市から高岡市にかけて、都にもおとらぬ華やかな歌世界を『万葉集』に残している。それでも、家持が詠んだ立山より先に進むと、このようにどことなく神秘的な趣を含む歌世界に入り込むことになる。歌は作者も作歌事情もわからないだけに、蓮台寺PAに歌碑とともに並び立つ神話の姫の像を、思わず見直してしまう。

佐渡市に渡る方法としては、高速道路をさらに北へ進み上越ICで降りる。JRなら直江津駅で下車して、直江津港から佐渡汽船で小木港に渡る方法がある。ただ、便数が限られているので、ここでは新潟市を目指しておく。

『万葉集』の中からは、新潟市内に入る前にもう一例、弥彦山を詠む歌を見つけることができる。「越中国の歌四首」と記された中に、次の2首が残されている。

いやはこ
弥彦おのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そほ降る 一に云ふ「あなに神さび」
(16・3883)

ふもと け ふ かはごろも
弥彦神の麓に今日らもか鹿の伏すらむ 裘 着て角つきながら (16・3884)

一首目は、弥彦山はみずから神らしく青雲がたなびく日でさえ、小雨がそぼ降ると詠まれている。注によると「みずから神らしく」が「不思議に神らしく」とやや曖昧な表現になる。弥彦山が神の山として神秘性を備えているだけに、晴天の日でも小雨が降る不思議な光景が表現されている。二首目は、弥彦山の麓に今日あたりも鹿が寝ていることだろうか、皮服を着て角をつけたままだと表されている。山に住む鹿そのものを詠んでいるというより、鹿の格好をしながら行われる神事の様子を思い浮かべた方がわかりやすい。創作歌というより、信仰にまつわる歌世界が記録されていると考えるべきであろう。

佐渡市は、こうした神の住む弥彦山の麓に広がる海の向こうに見える。

『万葉集』は、もはや海の向こうにある佐渡国を記録しようとする意識をみせないが、歴史を振り返ることで、古代律令国家を支えた一国として、「老」を受け入れる様子が認められた。それだけではなく、配流された「老」が佐渡国の風土の中に顧みられ、彼の歌が碑として建立されたことで、私たちは享受史を考えるきっかけを得ることができた。

JR 京都駅から直江津駅まで特急を利用して約5時間、新潟駅までは6時間ほどかかる。『延喜式』「主計上」に、京の都から佐渡国の旅程を求めてみると、佐渡国から荷物を輸送

して陸路で都までの上りが34日、空身の下りで17日を数えている。海路だと39日を認めている。これには比べようもなくはやい。道中の車窓に述べてきたような万葉歌と古代史をなぞりながら、往来する人々が移動する距離と心情を重ねながら旅をしたい。新潟港から船で佐渡市に入り、物部神社の万葉歌碑を前に「老」の歌を口ずさんでみると、通り過ぎてきた風景を脳裏によみがえらせてみることで、少しばかりの実感をともなって、自身を重ね合わせてみる事ができる。

4. 結びにかえて

佐渡市に建立された万葉歌碑を新たな観光資源として読み解き、「佐渡の万葉歌碑と古代史」をテーマに訪ねることを企画した。歌碑が建てられた物部神社には、風土が生み出した「老」を見出すことができた。史実に残された「老」を捉えることができなかつた部分には、他の史跡をめぐりながら、奈良時代を考へてみることを提案した。配流という表現が、よい印象を与えないのかもしれないが、「老」が佐渡国に18年近くを過ごしたことは、古代律令社会の中にあつて、佐渡国が整備されてゆく過渡の一端が表されていた。都との往還の中に展開された和歌や歴史を知ることで、周辺地域とともに話題の展開が期待される。

『万葉集』をはじめとして、日本神話や古代説話を研究する側から「ものがたり観光行動」を学として志向してみると、その役割のひとつに、地域に残された文学や歴史が、なにを語り得るのかを見極める作業が求められる。表現された話題を、漠然とした「ものがたり」のままにすませてしまうのではなく、学術的な考察を加えて「観光」することで、表された内容を知るための「行動」につながる。

この視点をもって、日本中をひとつのテーマで訪ね歩くことのできる方法を構想している。今回は、その可能性の一端を述べた次第である。

注

1. 和辻哲郎（1935年9月）『風土——人間学的考察』岩波書店（本稿は1979年5月刊の岩波文庫による）の刊行によって盛んになる風土論は、『万葉集』研究にも大きな影響を与えた。犬養孝の『万葉の風土』（1956年7月 塙書房）・『万葉の旅』（1965年6月）社会思想社・『万葉の風土 続』（1972年1月 塙書房）をその代表的な研究としてあげておく。清原和義の『万葉集の風土的研究』（1996年5月 塙書房）の刊行後、論じられることが少なくなった。
2. 露木茂（1999年3月）『万葉——歌碑でたどる』上 溪声出版。
3. 畑野町史編さん委員会（1985年10月）『畑野町史 信仰編』畑野町。
4. 『畑野町史』の本文には「穂積隆雄」と記され、引用文には「穂積孝雄」と記されているので、引用文を優先して記し本文を併記した。
5. 『古事記』中巻の神武天皇条には、「故、迹芸速日命，登美毘古が妹，登美夜毘売を娶りて生みし子は，宇摩志麻遲命。此は物部連，穂積臣，姦臣の祖ぞ。」とある。
6. 新編日本古典文学全集『万葉集』3（1995年12月 小学館）は、「沼名川の 底にあるこの玉は 探し求めて 手に入れた玉なんかではない 拾い求めて 手に入れた玉なんかではない このようにもったいない 君が 老いてゆかれるのが惜しい」との訳を提示している。



エッセイ

美味しいロンドン

……ものがたり満載のグルメシティ

熊谷 真菜

イギリスはまずい、食文化もない。その証拠に、イギリス料理なんてないでしょ。

長年そう言われて、わざわざ訪ねる気にもなれなかったが、イギリス通の知人は最近そうでもないという。その要因として挙がるのが BSE 問題。いわゆる狂牛病の最初の症例がイギリスで出たために、深刻な社会問題に発展し、食材の安全性を見直すようになる。世界的な潮流である健康ブームはロンドンにも広がり、一方、低カロリーや有機栽培への関心が高まり、調理技術、盛り付けの工夫など美味しさ向上の予感のなか出かけることになった。

Oh My Cod !! フィッシュ&チップスの変化

イギリスらしいメニューとして代表格のフィッシュ&チップスも、昨今はラードで揚げた店が激減、衣も薄くなり、揚げおきではなく揚げたてを出す店が増えた。黒板に Oh My Cod!! と掲示するフィッシュ&チップスが有名な老舗レストランは、1階が持ち帰り専門の売り場とスタンディングを設け、明るい店内に改装中だ。会社帰りのお兄さんたちがビール片手に食べているので、こちらもそんな気分でほおばってみる。揚げたてでまずいわけではないはず、と思った通り、巨大ステーキぐらいの大きさがペロリといける。サクッとジューシー、白身もぷりぷり。薄味だが、塩コショウ、ピネガーも置いてあり、飽きはこない。

Cod = コッドはマダラ、パン粉のフライではなくフリッターで、大きめのフライドポテトがわんさかついてくる。新大陸のジャガイモは、19世紀半ばまでにはイギリスの食生活に欠かせないものとなり、「ホット・ポテト」の屋台が急増、それとは別に白身魚フライをパン切れと一緒に出す屋台もあったようだ。やがて、冷凍技術と鉄道の輸送手段が確立され、魚&ジャガイモのフライがセットになって、フィッシュ&チップスが普及するのが1960年代以降。いずれも労働者の定番夕食となった。

大英博物館近くの昔ながらのフィッシュ&チップス専門店では、いまもラードを使って揚げている。大きさも分厚さも食べごたえ満点、タクシーの運転手さん御用達。ここではハドック（コッドよりも小ぶりのスケソウダラに近い品種）のフライもたのんでみた。コッドよりもあっさりした感じだが、こちらもポテト以外は残さなくて食べた。イギリス=まずい=FISH & CHIPS という概念を取り外すことができ、私たちは超ゴキゲンでバスの2階先頭に陣取った。

ブルジョアスタイルの アフタヌーンティー

アフタヌーンティーを掲げる店はたくさんある。が、なかでもスコーンに定評のあるブラウンズホテルを選んだ。ここを愛用した著名人は数知れず、日本人だとユーミンが「時のないホテル」の撮影に使った最高級だ。が、何よりもロンドンらしいのは、あのグラハム・ベルが助手に「ワトソン君、用事がある、ちょっと来てくれたまえ」と、ここから人類初の電話をかけたこと。それだけにお値段も最高クラス、6千円くらいのセットを人数分オーダーしないとイケない。アフタヌーンティーといえば必須のあの三段トレーは1客で十分なのに、シャンパン付きのもっと高いセット、またはヘルシータイプの3種からの選択をせまられた。

気を取り直し銀の食器の重みと輝きに見とれていると、礼儀正しく給仕のワゴンが運ばれ、3段トレーがタワーのように設置される。小菓子、冷菓、サンドイッチ、スコーン。そのほかにケーキのワゴンが別に来て、スイーツ食べ放題の日本のホテルのような錯覚さえ。ところがここも食べ放題、飲み放題と聞いて、またも啞然とする。

18世紀後半、中国から茶の輸入が激増、緑茶よりも紅茶が好まれるようになって、上流階級は午後5時にアフタヌーンティーを持つようになり、19世紀中頃には中産階級もアフタヌーンティーをたしなみ、お茶に砂糖とミルクを入れてカップ&ソーサーで飲む慣習が定着した。

人気の美術館であるテートモダン、テートブリテンのテート氏は、砂糖精製、とくに角砂糖の特許によって財を成した人だ。当時のイギリスは、東洋の贅沢品である紅茶に植民地からの砂糖をたっぷり入れることで、イギリス独自の紅茶文化と、同時に焼き菓子の文化を開花させ、現代もその美味しさは世界に誇れるものだろう。庶民の私たちがお代わりできなかったのを氣遣ってか、なぜかポウイはスコーンの箱入りをお土産にもたせてくれた。



ジャパニーズコナモン

去年もロンドンにお好み焼店を出す日本人のお世話をしたが、すでに数軒のお好み焼屋さんがあり、春には知人のラーメン店がピカデリーサーカスにオープン、日本の食文化はロンドンでも注目されている。なかでも人気なのが地元のランキングでも上位にはいるうどん店。夜も更けて出かけてみたら、まだ行列が続いていた。藍色の暖簾に白木風のすっきりした店内、スタッフは日本人も多く、奥で自家製麺しているという。Yasai Tenzaru (11.5 £) は大枠で合格点。この価格でこの味と食感なら、管理の悪い（でも値段はA級の）回転寿司に出かけるより、はるかにお値打ちだ。経験者も多いと思うが、ユーロ圏の回転寿司の一皿100円はガリぐらい（決して食べ放題ではない）で、一人3千円払っても日本でのような満足感はない。ちなみにロンドンの回転寿司チェーンは20年前から展開している大手だと40店舗以上あり、すっかりイギリスに根付いている。パスタチェーンも健闘しているが、和の麺類に関してまだまだ発展途上だ。ズルズルっと麺をすすする音がない分、静けさのなかでいただくロンドン手打ちは、なぜか日本のわびさびにも通じる緊張感があった。

朝食以外も美味しいロンドン

スタートも立派な朝食だったが、ラストを飾るのもセントパンクラス駅での朝食だ。ベル

ギー発のベーカリーカフェチェーンがロンドンにも数店舗あり、イングリッシュブレックファーストのあらゆるメニューを完備する。ナチュラルコンセプトの店内に合わせた生成りの器に、ポリッジ、サーモンサンド、イングリッシュマフィン、レッドフルーツクランブル（粉、バター、砂糖をボロボロのそぼろ状にして焼きあげたものを果物にのせて焼いた伝統菓子）、フランス風のリーンなパンまでテーブルに並ぶ。こういった食事を出すカフェの比較でいうなら、パンの食感、大きさや価格のバランス、器や盛り付けのデザインも、パリよりロンドンのほうが現代的というか、型にはまらない自由な発想で提供しているように感じた。とくにオートミールのポリッジ（お粥）は、糖蜜の素朴な甘さからんだプチプチ&もっちり感がたまらない。

ウイリアム王子とケイト妃の結婚1周年、エリザベス女王即位60周年、オリンピック開催とおめでた続きのイギリスは、レストランはもとより、マーケットや下町、住宅街の食堂にいたるまで美味しい料理が提供され、グルメシティロンドンに変貌していた。「イングランドでおいしいものを食べようと思えば朝食を3回食べよ」という大作家の名言が撤回され、「パリより美味しいロンドン」なんて言われる日も近いような気がした。

参考文献

- ・川北稔『世界の食文化⑦イギリス』農文協
- ・角山栄『辛さの文化甘さの文化』同文館
- ・角山栄『茶の世界史』中央公論社
- ・小松喜美『イギリスのお菓子里に会いにロンドンへ』イカロス出版

編集規程および執筆要領について 概要

原稿受付は毎年 7/1 ～ 7/31，データ入稿に限る

ものがたり観光行動学会誌は、毎年 7 月末に原稿を締め切り、10 月に 1 巻 1 号を発行する。本誌に論文等を掲載できる者は、編集委員会が特に依頼する場合を除き、共同執筆の場合を含め個人会員名で発表する者に限る。その主な内容を以下に示す。

掲載する内容

1. 大会関係論文（依頼）
2. 研究論文（投稿）
3. 研究ノート（投稿）
4. エッセー（投稿）
5. 文献・図書（投稿）

査読の有無等

本学会編集委員会が別途定めた査読要領に基づき、掲載の可否を審査する。これらの詳細は、本学会ホームページ <http://narrative-tourism.org/> で公開する。

なお、規程・要領は学会誌の改善目的のために軽微な修正が加えられる場合がある。この場合、毎年 11 月末迄に上記のホームページ上に修正箇所を明記して公開する。

ものがたり観光行動学会誌

ものがたり観光 Narrative Tourism 第2号

印刷 2012年9月25日

発行日 2012年10月1日

発行／ものがたり観光行動学会

会長／白幡洋三郎（国際日本文化研究センター）

編集代表／ものがたり観光行動学会誌編集委員長 加藤晃規（関西学院大学）

ものがたり観光行動学会

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-5-11

TEL 06-6353-0029

FAX 06-6353-6649

✉ work@anata.org

デザイン・印刷／株式会社シンカ・コミュニケーションズ

〒586-0009 大阪府河内長野市木戸西町1-5-7

TEL 0721-52-5934 FAX 0721-53-3859

URL <http://www.cinca.jp> ✉ anata@cinca.jp

表紙について

鳥瞰絵師、吉田初三郎の瀬戸内海パノラマ地図である。第1号では九州・大分を發し、竹原～今治を結ぶ瀬戸内にかけてのパノラマを表紙とした。第2号では、ひきつづき大阪湾に至る図絵を使用した。初三郎の鳥瞰図絵については、学会誌第1号、白幡洋三郎の「遠い観光、近い観光」に詳しい。

2012年10月1日発行

